

法トナシ、職工ノ養成ヲ以テ目的トセル工業學校ノ効力ヲ疑フモノナキニ非ラズ。余ノ見ル所ニ依レバ、徒弟制度ト學校教育トノ利害ハ容易ニ判斷シ得ベキニ非ラズ。抑モ學校教育ハ只工業ニ關スル智識ヲ與フルニ止マリ、精巧ナル技術ハ徒弟制度ニ非レバ之ヲ習得スル能ハサル場合アリ。然レドモ徒弟制度ハ其本來ノ性質トシテ自家製造ニ於テノミ行ハルベキモノニシテ、工場製造ニ於テハ奈何ナル方法ニ依ルモ之ヲ實行スルニ由ナカラシム。蓋シ多數ノ職工カ工場ニ群居シ、一定ノ時間ヲ限リ奮一ナル規律ノ下ニ勞働セル場合ニ、工場主ハ是等ノ職工ニ托スルニ若干ノ徒弟ヲ以テシ、之ガ教習ヲ委スルモ到底其目的ヲ達スル能ハザルベシ。徒弟ニ在ツテモ他ノ職工ト均シテ工場ノ備人ナルガ故ニ、特ニ師匠ニ對スル情誼ノ觀念ナシ。技術稍々熟スルニ至レバ、他ノ工場ニ轉ジテ進ンデ職工トナルヲ欲スルハ人情ノ然ラシムル所ナリトス。要之スルニ徒弟制度ハ工場製造ト相容レザルノ性質ヲ有セルモノタリ。是故ニ自家製造ニ於テハ

此制度ノ存在スベキ餘地アルモ、工場ノ職工ヲ養成スルニ當ツテハ此制度ハ何等ノ効力ナキモノト云ハザルヲ得ズ

工業教育ハ尙ホ他ノ重要ナル目的ヲ有セリ。何ソヤ工業主タラントスル者ニ向ツテ、工業經營ニ必要ナル技術ノ思想ヲ注入スルコト是ナリ。抑モ工業主タル者ハ、嘗ニ經濟ニ關スル智識ヲ有スルヲ以テ足レリトセズ、必ラズヤ或程度ノ技術思想ナカル可ラズ。工業主ニ望ムニ技師タルコトヲ以テスルハ非ナリト雖モ、技術思想ト經濟思想トノ調和ハ實ニ工業ノ經營上必要ナルコト、ス。歐洲各國ノ工業教育ノ制度ニ於テ、此必要ハ夙ニ認識セラレ、工業學校ノ教科ニ於テ此目的ヲ示セルモノ多シ

余ハ茲ニ工業教育ノ實例ヲ示サンガ爲メニ、歐洲ニ於テ工業教育ノ最モ發達シ且ツ完備セリト稱セラル、佛獨二國ニ就キ述ブル所アルベシ。因ニ云フ、茲ニ述ブル所ノ佛獨工業教育ノ組織ハ純粹ナル工業學校ニ關スルモノタリ、夫ノ小學及ビ中學ニ附屬セル手工教育ノ如キ、或ハ是等ノ學

工業教育ノ實例

校ト殆ンド其性質ヲ同フシ而シテ加フルニ幾分ノ工業教育ヲ以テセル所ノ設備ハ本論ノ範圍外トナセリ

佛獨兩國ノ工業教育ハ左ノ三種ノ學校ヨリ成ル

- (1) 普通工業學校
- (2) 中等工業學校
- (3) 高等工業學校

此三種ノ學校ハ各々其目的ヲ異ニセリ、普通工業學校ハ職工ノ養成ヲ目的トシ中等工業學校ハ職工長、技手ノ養成ヲ目的トシ、高等工業學校ハ技師、學者ノ養成ヲ目的トナセリ、而シテ工業主ノ養成ハ普通及ビ中等ノ工業學校ニ於テ之ヲ行フモノトセリ、此三種ノ學校ハ猶ホ軍人ノ教育ニ於テ兵卒ノ訓練、下士ノ訓練及ビ士官ノ訓練ニ各々特別ノ設備アルガ如ク、此三種ノ學校具ツテ後始メテ工業教育ノ組織完全ナリト云フベシ、然ルニ佛獨兩國ニ於テモ此三種ノ學校ニ多少ノ欠點アリ、普魯西ニ於テハ中

等工業學校ノ數甚ダ少ナク、佛國ニ於テモ亦同一ノ非難アルヲ免レズ、要之スルニ右掲グル處ノ三種ノ學校ハ、工業教育ニ關スル理想的組織ニシテ、實際ニ於テハ未ダ完全ナル模型ヲ示セル國ナシ

第一 普通工業學校 此種ノ學校ニ二種アリ、一ハ工業ニ關スル一般ノ智識ヲ與ヘ、之ヲ卒業セル者ハ奈何ナル工業ニ従事スルモ差支ナキモノタリ、佛國ニテハ「エコールドメチエ」獨逸ニテハ「ゲウエルベシューレト」云フ、一ハ特種ノ工業ニ關スル教育ヲ施シ、之ヲ卒業セル者ハ只其種類ノ工業ニノミ従事スルヲ得ルモノタリ、佛國ニテハ「エコールダブランササ」獨逸ニテハ「フロッハシューレト」云ヘリ、此二種ノ學校ニハ各々長短得失アリ、一概ニ之ヲ判斷ス可ラズ、蓋シ第一種ノ學校ニ於テハ専門ノ技術ヲ授ケザルモ、一般ノ工業ニ關スル普通ノ智識ヲ得ルガ故ニ、職業ヲ求ムルニ便ナリ、第二種ノ學校ハ之ト反對ノ結果ヲ生ズルナリ

佛國ニ於ケル普通工業學校ハ工業者團體ノ經營ニ係ルモノ多シ、巴里市

ハ最モ此種ノ學校ニ富メリ、寶玉細工、眞珠細工、馬車製造、汽鐘製造、花鳥毛細工、紙細工、窓掛飾等ニ關スルモノ殆ンド枚舉ニ遑アラズ、其他或ハ工業者ノ個人事業タルモノアリ、或ハ職工組合ノ事業タルモノアリ、或ハ工業教育ニ關スル協會ノ事業タルモノアリ、其種類ヤ甚タ多シトス、各地方都市ニ於テモ亦是ノ如シ

獨逸ニ於ケル普通工業學校ノ多數ハ都市ノ事業トシテ經營セラレタリ、該國ニ於テ尙モ工業都市トシテ名アル處ニハ殆ンド此設ナキハナシ、其他工業者團體若シクハ私人ノ事業タルモノ多少之アリ、之ヲ佛國ニ比スレバ學校ノ數ハ稍々少ナシト雖モ、中央ニ集中セズシテ各地方ニ分布其ノ宜シキヲ得タルモノガ如シ

普通工業學校ノ學年ハ大概三四年トシ小學教育ヲ了ヘタル者ヲ入學セシムルヲ以テ通例トス、學科ハ工業ノ種類ニ依ツテ異ナルガ故ニ之ヲ概言スルヲ得ズト雖モ、學科ト技術トニ對シテ各々時間ヲ均分シ、技術教習

ノ方法トシテハ手工場ヲ設ケ精練ナル職工ヲ以テ教師トナスヲ常トセリ

此種學校ノ效果ノ大ナルコト固ヨリ疑ヲ容レザル所ナルモ、佛國ノ現況ニ就キ、ボネー氏ノ說ニ依レバ此種學校ニ在學セル徒弟ニ就キ、入學者ト卒業者トノ數ニ著シキ差異ヲ生ジ、入學者ノ約半數ノミ卒業セルノ事實アリ、而シテ之ガ原因ノ主ナルモノハ兒童ノ嗜好未ダ定マラザル時ニ當ツテ入學セシムルガ故ニ中途嫌惡ノ念ヲ起サシムルコト及ビ身體ノ發育未ダ充分ナラザル者ニ向ツテ手工ノ勞働ヲナサシムルガ爲メニ其體力ノ堪ヘザルコト等ナリトス、此事實ハ我國工業教育ノ局ニ當ル者ノ參考ニ資スルモノアルベシ

普通工業學校ノ一種トシテ補習教育ノ制度ヲ舉ゲザル可ラズ、蓋シ普通工業學校ハ將來ノ職工ヲ養成スルヲ以テ其目的トセリ、現ニ工場ニ在ツテ勞働ニ從事セル職工ニ對シテ補習教育ノ必要起ルナリ、補習教育ノ制

度ハ現在徒弟タリ或ハ職工タル者ニ對シ其勞働時間ノ幾分ヲ割キテ毎週數回晝間或ハ夜間ニ適當ナル工業教育ヲ授クルヲ以テ其目的トナス此種ノ設備ハ方今各國ニ盛ンニ行ハレタリ、余ハ茲ニ其ノ最モ完美ナリト稱セラル、獨逸ノ現狀ニ就キテ述ブル所アルベシ、獨逸ニテハ此種ノ工業補習教育ノ設備ハ都市、同業組合及ビ私人事業ノ三種ニ分レタリ、時ニ或ハ政府ノ補助ヲ受クルモノナキニ非ラズ、其名種ハ區々一ナラズ、或ハ工業補習學校 (gewerblich fortbildung schule) 或ハ徒弟學校 (lehrling schule) 手工學校 (Handwerkerschule) ト云フ都市ノ經營ニ係ルモノハ伯林ニ在ル工業講習處 (gewerbe Saal) ノ組織ヲ見バ其一班ヲ知ルヲ得ン此學校ハ各種ノ徒弟ニ製圖ノ術ヲ教ユルガ爲メニ設立セラレタルモノタリ、之ニ就學セル者ニハ石版工アリ、鍍工アリ、器械工アリ、其種類甚ダ多シ、其年齡ハ十四歳乃至十九歳トス、其多數ハ小學ノ科程ヲ了ヘタル後直チニ就學セル者ナリ、中ニハ二十五歳乃至三十歳ノ者モ往々之アリ、是等ハ現在職工タル

者ト知ルベシ、此學校ノ教師ニハ二種アリ、一ハ技師製圖教師等完全ナル教育ヲ經タル者ニシテ、一ハ職工及ビ職工長等經驗ニ依ツテ技術ヲ習得シタル者ナリ、教師ノ多數ハ後者ニ屬セリ、此事タル徒弟教育ノ爲メニ注意スベキコト、ス、教師一人ノ受持ツベキ徒弟ノ數ハ二十五人以下ト定メ由ツテ以テ教授ノ放漫ニ失セサルヲ務メタリ、同業組合ノ經營ニ係ル徒弟學校ノ設備ニ就キ、伯林市ニ在ル裁縫職組合ノ徒弟學校ヲ按スルニ、該學校ハ豫科ト本科トニ分チ、豫科ハ通常ノ補習教育ヲナスモノトシ、讀書作文算術簿記等ヲ教授シ、本科ハ技藝ノ教育ヲナセリ、技藝教育ハ學理ト實際トヲ包括セルヤ言フ俟タズ、就學徒弟ノ年齡ハ十五歳乃至十八歳トシ、小學教育ヲ終了シタル者ニ限レリ、學期ハ四ヶ年トシ、時間ハ每週二回トシ、授業時間ヲ四時間トセリ、教師ハ同業組合員タル裁縫職ノ師匠或ハ裁縫職工ヲ以テ之ニ充テタリ

佛國ニテハ各地方ニ此種學校ノ數甚ダ多シ、其ノ最モ著名ナルモノヲ一

八六四年以來「ローン」州工業教育協會ガ里昂市ニ設立シタルモノトス、其組織ハ獨逸ニ於ル工業補習學校ト大差ナシトス英國ニ於テモ亦此種ノ學校ノ設備ハ盛ニ行ハレタリ多クハ夜學校ノ方法ヲ執リ現ニ工場ノ職工タル者ヲ收容セリ英國ニ於ケル職工教育ノ中心ハ此夜學校ニ在リト云フモ不可ナキガ如シ

第二 中等工業學校 中等工業學校ハ佛國ニ於テハ政府ノ設立ニ係ルモノ其數三アリ「シャロン」「エイ」「アンヂェー」ノ諸市ニ在リ之ヲ稱シテ國立工藝學校 (école nationale des arts et métiers) ト云フ此三者ハ鐵工業、木工業ニ關スルモノトス、又「アレイ」市及ビ「ドゥエイ」市ニ鑛山學校アリ、是レ亦政府ノ設立セルモノタリ、私立學校トシテハ最モ著名ナルハ里昂「ボルドー」市「リール」市ニ在ルモノニシテ、之ニ次グモノヲ「リッエ」「ナント」「レイム」諸ノ市ノ工業學校及ビ「アミアン」市ニ在ル紡織學校等トナス

獨逸ハ佛國ニ比スレバ更ニ此種ノ學校ニ富メリ、今其重ナルモノヲ舉ゲ

ンカ「ミュル」ハウゼン「市」「イセルローヘン」市「ミットワイダ」市ノ工業學校「ハーゲン」ノ機械學校「ライン」州ノ鐵工學校「グレーフェルト」市及ビ「ケムニッツ」市ノ織物學校等ナリ、是等ノ學校ハ或ハ各州政府ノ設立ニ係ルモノアリ、或ハ都市ノ事業タルモノアリ然レドモ此種ノ學校ハ凡テ中央政府ノ經營ニ委スベシトノ議論近時盛ンニ起レリ、獨逸技師協會ノ如キハ一八八九年既ニ此議決ヲナセルヲ見テ之ヲ知ルベシ、獨逸ニ於テ此種學校ノ成蹟ハ大ニ見ルベキモノアルニ關ラズ、一派ノ論者ハ之ヲ以テ工業教育ニ必要ナル機關ト認メザル者アリ、一八八二年獨逸工業者聯合會ニ於テ此意見ヲ發表セリ、其ノ説ク所ニ依レバ技手、職工長ノ如キハ高等工業學校ニ於テ之ヲ養成スルヲ得ベシト云フニ在リ、去レド此議ヤ遂ニ輿論ノ贊同ヲ得ザリキ

第三 高等工業學校 高等工業學校ハ何レノ國ニ於テモ政府ノ設立ニ係レリ、佛國ニ於テハ巴里ニ鑛山學校、土木學校アリ、與ニ政府ノ技師ヲ養

成スルヲ目的トセリ。又工藝中央學校アリテ、民業ニ從事セントスル技師之ニ入學セリ。其他美術工業學校アリ、サンテチエン市ニ鑛山學校アリ、最初ハ中等教育ヲナスガ爲メニ設立セラレタルモ、現今ハ技師養成ヲ以テ其目的トセリ。

獨逸ニハ高等工業學校ノ數甚ダ多シ。所謂「テクニッシェホッホシューレ」ナルモノ是ナリ。各州殆ンド之ヲ有セザルハナシ。普國ニテハ「ベルリン」「ハノーバ」「アーヘン」ノ三市ニアリ、ブランシュワイヒニテハ「ブランシュワイヒ」市ニアリ、「ザクセン」ニハ「ドレスデン」市ニアリ、「ヘッセン」ニハ「ダルムスタット」市ニアリ、「バーデン」ニハ「カールスルー」市ニアリ、「ウールテムベルグ」ニハ「スツットガルト」市ニアリ、「バイエルン」ニハ「ミュンヘン」市ニアリ。其學科ヲ見ルニ大概五種ニ分テラルモノ、如シ、建築學科、土木工學科、器械學科、應用化學科、數學及理學科是ナリ。

我國工業教育ノ現狀ヲ按スルニ之ヲ歐洲各國ニ比スレハ尙ホ幼稚ナル

地位ニ在リト云ハザルヲ得ズ。高等教育ノ設備トシテハ工科大学ノ外東京、大阪、京都、熊本ニ各々一ノ高等工業學校アリ。

中等教育及ビ普通教育ノ設備ニ關シテハ政府ハ明治三十二年勅令第二十九號ヲ以テ實業學校令ヲ發布シ之ガ準則ヲ示セリ。茲ニ其ノ工業ニ關スルモノヲ掲ゲンニ先ヅ學校ノ種類ヲ工業學校(中等教育ノ設備)實業補習學校、徒弟學校(普通教育ノ設備)トナシ、何レモ府縣市町村ニ於テ設置スルモノトシ、私立ノ學校モ亦之ヲ認メタリ。

工業學校ニ就テハ明治三十二年文部省令第八號工業學校規程ヲ發布セリ。該法ニ依ルトキハ工業學校ノ學科ハ土木科、金工科、造船科、電氣科、木工科、鑛業科、染織科、窯業科、漆工業、圖案繪畫科等ニ分テ之ヲ適宜ニ撰擇シテ教科ヲ定ムルコトヲ得セシム。右ノ外修身、讀書、作文、數學、物理、化學、圖畫體操等ノ一般ノ中等教育ヲ授クルモノトセリ。修學年限ハ三箇年ヲ通則トシ一箇年以内ノ延長ヲ許セリ。入學者ノ資格ハ年齢十四歲以上ニシテ高等

小學校ノ卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有セル者トセリ、工業學校ハ二ケ年以内ノ學年ニ於テ豫科ヲ設クルコトヲ得、又別科及ビ專攻科ヲ設クルコトヲ得ルト定メタリ

實業補習學校ハ明治三十五年文部省訓令第一號ニ依ルトキハ職業ニ要スル智識技能ヲ授クルト同時ニ普通教育ノ補習ヲナシ實業教育ト普通教育トヲ并行セシムルヲ以テ目的トナセリ、其細目ハ明治三十五年文部省令第一號ニ依ツテ之ヲ知ルコトヲ得ベシ、該學校ノ科目ハ工業ニ關スルモノニ在ツテハ物理、化學、圖畫、模型、幾何、製圖、圖案、力學、材料、工具、製作等ト定メ之ニ就キ撰擇スルモノトス、此外ニ修身、國語、算術等ノ普通教育ヲ授クルモノトス、入學ノ資格ハ年齡十年以上トシ學力ハ尋常小學卒業以上ノモノトシ又特ニ尋常小學ヲ卒業セザルモ學齡ヲ過ギタル者ノ入學ヲ許スモノトス、徒弟學校ハ職工タルニ必要ナル教育ヲ授クル處トシ補習學校ニ比スレバ稍々専門的ノ設備タルモノトス、明治二十七年文部省令

第二十號徒弟學校規程ニ依ルニ學科ハ修身、算術、幾何、物理、化學、圖畫及ビ職業ニ直接ノ關係アル諸學科及ビ實習トナシ而シテ學科ノ編制ハ一種若クハ數種ノ職業ニ就テ之ヲ定メ若シクハ數種ノ職業ニ共通シテ之ヲ定ムルコトヲ得セシム、入學ノ資格ハ年齡十二歳以上及ビ尋常小學校卒業以上ノ學力ヲ有セルモノトセリ、其修業年限ハ六ヶ月以上四ケ年以内トセリ、學校ノ設立ハ特ニ之ヲナサズシテ小學校ニ附設スルコトヲモ認メタリ

是等ノ制度ニ基キテ設立セラレタル諸學校ノ統計ニ就キ明治三十七年政府ノ調査ニ依レハ中等教育ヲ授クル所ノ學校數ハ三〇ニシテ生徒數ハ三、一八四トス、又初等教育ノ學校數ハ八一ニシテ生徒數ハ四、八二六ナリ、此外ニ若干ノ徒弟學校アルモ之ハ商業及ビ工業ニ涉リ此統計ニ於テ特ニ工業ニ關スルモノヲ分ツコト能ハザルヲ以テ茲ニ其數ヲ掲ゲズ、政府ハ實業教育ノ費用ニ就キ國庫補助ノ必要ヲ認メ明治二十七年法律

第二十一號ヲ以テ實業教育費國庫補助法ヲ制定セリ、該法ニ依ルトキハ政府ハ各種ノ實業學校ニ對シテ其設立者ノ負擔額ト同額以內ノ範圍ニ於テ補助費ヲ下付スルコト、セリ、其期間ハ五ヶ年ヲ限リ尙ホ必要アルトキハ之ヲ繼續スルコトヲ得ルモノトス、補助ヲ受クル學校ノ設立者ハ補助年期内ハ其經費ヲ繼續支出スルノ義務アルモノトセリ此規定ニ依リ政府ノ支出セル費額左ノ如シ

明治三四年	二六九、六四六圓
同 三五年	三一七、八六七
同 三六年	三一八、五三八
同 三七年	三一九、一二〇
同 三八年	三二〇、〇〇〇

### 第十章 專賣特許制

專賣特許制ノ必要

專賣特許制ノ目的トスル所ハ、工業技術ノ發明者ニ與フルニ其發明ヨリ生ズル利益ヲ特占セシムルニ在リ、抑モ現時各國ノ經濟政策ハ成ルベク自由競争ノ原則ヲ守リ、特定ノ個人ヲシテ經濟上ノ利益ヲ壟斷セシメザルヲ以テ通義トナセリ、今專賣特許制ノ性質ヲ見ルニ工業技術ノ發明者ニ與フルニ一種ノ特權ヲ與フルモノナリ、從ツテ現時經濟政策ノ原則ト相容レザルモノ、如シ然リト雖モ此制度ハ方今各國ノ間ニ行ハレ假令ヒ内容ニ就テ稍其趣ヲ異ニスルモノアルモ尙モ工業國ト稱セラル處ニシテ、此制度ヲ存セザルハナク、近年ニ至ツテハ更ニ進ンデ一種ノ國際法規トナレリ、其ノ然ル所以ノモノハ他ナシ、此制度ハ工業技術ノ保護獎勵ノ爲ニ必須欠ク可ラザルモノタルニ由ル、顧フニ工業技術ノ發明タル他ノ科學的發明ト稍其性質ヲ異ニシ、直接ニ生産ノ補助ヲナシ工業者ヲ利



スルモノタリ。或ハ由ツテ以テ勢力ヲ減少スルコトヲ得ベク。或ハ由ツテ以テ生産ヲ増加スルヲ得ン。之ガ爲メニ工業者ノ掌中ニ落ツベキ經濟上ノ利益ヤ大ナルベシ。今若シ專賣特許ノ制度ナシト假定センカ、奈何ニ有益ナル發明ト雖モ只世間一般ノ工業者ヲ利シ、發明者自身ハ何ノ得ル所ナカルベシ。此場合ニ於テ發明者ニシテ若シ公其心ニ富メルカ、然ラザルモ名譽心ニ強キ者ナラシメバ、自己ノ利害ヲ眼中ニ置カズ、進ンデ發明ノ結果ヲ公ニスルナルベシ。然レドモ此種ノ發明者ハ稀有ニ屬セリ。多數ノ發明者ニ在ツテハ其發明ヲ秘シテ世間ニ發表セザルベク、偶々發明者ノ關係セル工場ニ就キ之ヲ利用スルコトアランモ他ノ工業者ハ毫モ其利ヲ享クルコトナキヤ必セリ。然リト雖モ專賣特許制ヲ設ケテ發明者ヲ保護セル處ニ在ツテハ決シテ此弊ナカルベシ。奈何ントナレバ此場合ニハ發明者ハ特定ノ條件ニ依リ、他人ヲシテ其發明ヲ利用セシムルコトヲ得レバナリ。右述ブル所ハ既ニ發明ヲナシタル者ニ關スル專賣特許制ノ利益

ナリ、若夫レ此制度ガ將來ノ發明ヲ獎勵スルノ力ヲ有セルコトハ之ニ由ツテ推スコトヲ得ベシ

歐洲ノ學者ニシテ專賣特許制度ヲ排斥スル者アリ。其ノ最モ顯ハル、者ヲ佛人「シニヴリエー」トナス。今氏ノ議論ヲ要スルニ、凡テノ發明ハ突如トシテ起ルモノニ非ラズ、長キ年代ニ於ル幾多ノ研究ノ結果ヲ總合シテ成リタルモノニ外ナラズ。然ルニ只最後ノ發明者ノミ之ヨリ生ズル利益ヲ特占スルハ不當ノ事タルヲ免レズト云フニ在リ。願フニ發明ガ歴史的發展ヲナセルコトハ固ヨリ疑ヲ容レザル所ナルモ、幾多ノ理論ヲ總合シテ之ヲ實際ニ應用シ、生産上ノ實利ヲ生シタルノ名譽ハ之ヲ最後ノ發明者ニ歸セザルヲ得ズ。是ノ如ク理論ト實際トヲ調和シタルノ報酬トシテ、發明者ニ與フルニ專賣ノ權利ヲ以テスルハ決シテ背理ノコトニ非ルベシ。專賣特許制度ノ必要ハ右述ル所ノ如シ。然レドモ此制度タル元來自由競爭ノ原則ニ對シテ特例ヲ開ケルモノナルガ故ニ、各國ノ法律ニ於テ此權

利ヲ附與スルニ就キテハ種々ノ制限ヲ附シタリ。或ハ一定ノ年期ヲ限リ此以後ニハ此權利ヲシテ消滅セシムルノ規定アリ。或ハ此權利ヲ附與スベキ發明ノ種類ヲ定メテ而シテ特定ノ種類ニ屬セル發明ニハ專賣權ヲ附與セザルノ規定アリ。或ハ發明ノ種類ニ依ツテ公益ノ必要アルトキハ之ヲ買上グルノ規定アリ。是等ノ規定タル公共ノ利益ヲ害セザル範圍ニ於テ、發明者ノ利益ヲ保護スルノ趣旨ニ基ケルモノニ外ナラズ。現今各國ニ於テ專賣特許制ノ必要ハ最早爭フ可ラザルコト、ナリタルモ、公共ノ利益ト發明者ノ利益トヲ調和シ相戾ラザラシムルノ方法ニ就キ立法者ノ苦心焦慮セルヲ見ル

## 各國專賣特許制ノ沿革

歐洲ニ於ケル專賣特許制ハ十七世紀ノ頃始メテ英國ニ起レリ。即チ一六二三年ニ制定セラレタル專賣特許法ヲ以テ之ガ嚆矢トナス。先是英國ニ於テ專賣權ハ其種類ノ何タルヲ問ハズ、國王ハ隨意ニ之ヲ授與スルノ特權ヲ有シ、而シテ之ニ對シテ徵收スル所ノ收入ヲ以テ皇室費ノ一トナセ

シガ故ニ、發明ノ保護ニ關シテ其制度ヤ確固ナラズ從ツテ弊害ニ堪ヘザリキ。然ルニ同年ノ專賣特許法ハ發明ニ關スル專賣權ハ、法律ニ依ルニ非レバ之ヲ得ル能ハザルコトヲ規定シ且ツ此特許ハ一定ノ年期ヲ限ツテ其效力ヲ有セシムルコト、ナセリ。次イデ一七九〇年更ニ之ヲ修正シ稍々完備ナル專賣特許法發布セラレタリ。英國ノ現行法ハ大體此法律ニ依リタルモノトス

佛國ニ於テ專賣特許法ノ制定ハ一七九一年ニ始レリ。先是革命政府ハ人權宣言ニ於テ、發明者ノ權利ハ自然的人權ノ一種ナルコトヲ明示セリ。願フニ英國ノ專賣特許法ハ專賣權ハ發明者ニ與フル國家ノ特典ナリトノ觀念ニ基キテ起リタルモ、佛國ニ於テハ最初ヨリ之ヲ以テ一種ノ私人ノ權利ト認メ之ヲ保護スルハ政府當然ノ職務ナリトノ主義ヲ採レリ。是レ二國ノ專賣特許制ガ互ニ其精神ヲ異ニセル所ナリトス。一八四四年改正專賣特許法ノ制定アリ。爾後幾回ノ修正ヲ經テ現行法成立セリ。白耳義以

太利等歐洲諸國ノ法律ニシテ之ニ則ルモノ少カラズ  
 獨逸ニ於ケル專賣特許制ハ一八一五年始メテ普國ニ制定セラレタリ其  
 他諸聯邦ニテ之ニ倣ヒタルモノアリキ一八三三年關稅同盟ノ締結セラ  
 ル、ヤ、普國ノ發議ニ基キ各聯邦ノ間ニ專賣特許ニ關スル條約ヲ結ビ一  
 聯邦ニテ得タル發明ノ特許ハ他ノ聯邦ニ於テモ均シク保護セラル、コ  
 トヲ定メタリ、然レドモ此條約ハ強制ノ力ヲ欠ケルガ爲メニ實效ヲ見ル  
 能ハザリキ、一八七〇年獨逸帝國ノ建設セラル、ニ及ンデ帝國法律トシ  
 テ專賣特許法ヲ制定スルノ議頻リニ起レリ、然レドモ識者ノ間該法ノ不  
 可ヲ主張セル者少シトセズ數年ノ間世論紛々タリシガ終ニ一八七七年  
 之ガ制定ヲ見ルニ至レリ

我國專賣特許法ハ明治四年四月ニ制定セラレタル新發明品專賣略則ニ  
 始マレリ、翌年三月第百五號布告ヲ以テ之ガ執行ヲ中止シ、尙後發明ヲナ  
 ス者アルトキハ地方官ヲシテ發明品及ビ發明手續ヲ取調ベ、之ヲ工部省

ニ届出デシムルコト、ナセリ、十八年七月更ラニ專賣特許條例ヲ發布セ  
 リ、二十一年十二月特許條例ヲ制定シ、三十二年修正ヲ加ヘ現行特許法ヲ  
 制定セリ

## 特許ノ種類

今各國專賣特許法ノ規定ヲ按ズルニ其細目ニ至ツテハ多少ノ差異アリ  
 逐一之ヲ述ブルコト能ハズ、去レバ余ハ茲ニ其大要ニ就キ概括叙述セン、  
 專賣特許ノ目的ハ發明ノ保護ニ在ルコトハ先ニ述ブル所ノ如シ然レド  
 モ發明ナルモノハ其範圍ヤ甚ダ廣ク、且其解釋ヤ明確ナリ難シ、各國ノ法  
 律ニ於テ發明ノ何タルカハ之ヲ明示セズ、只事實ノ問題トナセルヲ見テ  
 之ヲ知ルベシ、是故ニ單ニ發明トノミ云フトキハ工業技術上最モ有益ナ  
 ル工夫ニシテ、尙ホ專賣權ヲ得ル能ハザルノ憂ナキニ非ラズ、於是乎專賣  
 特許ノ目的物トシテ發明ニ加フルニ改良ナルモノヲ以テスルコトハ各  
 國其歸ヲ一ニセリ、即チ專賣權ノ種類ヲ發明ニ關スルモノト、改良ニ關ス  
 ルモノトノ二種ニ分チ、前者ハ獨創ノ發明ニ對シテ得ベキ專賣權ヲ指シ

後者ハ他人ノ發明ニシテ既ニ專賣權ヲ得タルモノニ幾分ノ改良ヲ加ヘタル場合ニ此改良ニ對シテ得ベキ專賣權ヲ指スコト、ナセリ。是レ工業技術ノ保護ノ爲メニ必要ナルコト、云フベシ

各國ノ專賣特許法ハ特許ノ條件トシテ、其發明ガ工業技術ニ關シ實益ヲ有セルコトヲ必要トセリ。去レバ技術上ヨリ觀察シテ偉大ナル發明タルモ毫モ實益ナキモノニ對シテハ專賣權ヲ與ヘザルナリ。又發明ノ目的物ニシテ飲食物、嗜好物及ビ醫藥品ナルトキハ專賣權ヲ與ヘザルヲ常トス。是レ他ナシ是等ノ物品ニ關シ專賣權ヲ與フルトキハ公共ノ利益ヲ害スルノ恐アルニ由ルナリ

專賣權ノ附與ハ一定ノ期間ヲ限リ發明者ヲシテ永久ニ之ヲ私スル能ハザラシムルコトハ各國ノ通例ナリトス。是レ亦公益ノ必要ニ基クモノニ外ナラズ。即チ發明者ガ一定ノ期間ニ於テ相當ノ利益ヲ得タル後ハ發明ヲ以テ公共ノ所有トナシ、何人ト雖モ隨意ニ之ヲ利用スルヲ得セシムル

特許ノ期間

ハ工業進步ノ爲メニ洵ニ必要ノコト、ス、各國專賣特許法ニ規定シタル最長期ハ左ノ如シ

英吉利	十四年
獨逸	十五年
米國	十七年
佛蘭西	十五年——十年——五年
奧匈國	十五年
瑞士	十五年
以太利	十五年
露西亞	十年——五年——三年
日本	十五年

特許料

各國ノ法律ニ於テ專賣權ヲ得ルニ就キテハ、當初ニ納ムル所ノ手数料ノ外更ニ定期ニ特許料ヲ納メシムルヲ常トス。是レ濫リニ特許ヲ受クルノ弊ヲ防止シ、且ツ發明ヲ實用ニ供スルコトヲ勵行スルノ手段トシテ必要

ナルコト、ス

英國ニ於テハ特許料ハ特許ヲ受ケタル時ヨリ四年以内ニ五十「ポンド」ヲ納メ、又八年以内ニ百「ポンド」ヲ納ムルコト、セリ、但シ本人ノ意思ニ依リ二回納付ニ代ヘ毎年若干ノ額ヲ納付スルコトヲ許セリ

佛國ニ於テハ五年ノ特許ニ對シテハ五百「フラン」、十年ノ特許ニ對シテハ一千「フラン」、十五年ノ特許ニ對シテハ一千五百「フラン」トセリ、此他特許税ナルモノアリ毎年百「フラン」ヲ納ムルコト、セリ

獨逸ニ於テハ特許ヲ得タル翌年五十「マーク」ヲ納メ、之ヨリ以後毎年五十「マーク」累進遞加スルコト、セリ、即チ十年目ニハ四百五十「マーク」、十五年目ニハ七百「マーク」トナル割合ナリ、而シテ十五ケ年間ノ合計ハ五千二百五十「マーク」トナル、我國ニ於テハ特許ニ對シテ二十圓ノ特許料ヲ納ムルコト、セリ

#### 特許ノ方法

特許ノ方法ニ就キテハ各國ノ法律ニ二種ノ區別アルヲ見ル、一ハ政府ガ

專賣特許ノ出願者ニ對シテ專賣權ヲ附與スルニ當リ、出願者ノ所謂發明ナルモノハ果シテ發明ノ事實アリヤ否ヤ換言スレバ他人ガ既ニ得タル專賣權ヲ侵スコトナキヤ否ヤ、又假令ヒ發明ノ事實アリトスルモ、其發明ハ果シテ工業技術上有益ナルモノナリヤ否ヤノ事項ニ就キ充分ノ審査ヲナシ、審査官ニシテ之ヲ是認スルニ非レバ特許ヲ與ヘザルノ制度ニシテ、一ハ發明ノ實質ニ就キ是等ノ事項ヲ審査スルコトナク、出願ノ手續及ビ發明ノ種類ニシテ適法ナルトキハ、直チニ專賣權ヲ附與スルノ制度ナリ、前者ハ之ヲ審査主義ト稱シ、後者ハ之ヲ出願主義ト稱セリ、前者ノ方法ハ佛蘭西、埃匈國、瑞士、以太利、白耳義、西班牙ニ行ハレ、後者ノ方法ハ獨逸、米國、露西亞、ニ行ハレタリ、英國ニ於テハ同時ニ同一ノ發明ニ關スル出願者アル場合ニハ其發明ノ實質ニ就キ審査ヲナシタル後ニ非レバ專賣權ヲ附與スルコトナシト雖モ、其他ノ場合ニ於テハ全ク第二ノ方法ヲ執レリ、我國專賣特許法ニ於テハ第一ノ方法ヲ執リ、專門技術官ヲシテ審査ノ

事ニ當ラシメタリ、抑モ此二種ノ特許方法ノ利害ハ實ニ專賣特許制度ニ關スル議論ノ燒點ナルガ如シ、殊ニ一八七七年獨逸ニ於テ專賣特許法改正ノ議起リタルニ際シ、此問題ハ盛シニ朝野ノ間ニ講究セラレタリ、審查主義ヲ主張スル者ハ曰ク、此方法ニ依ルトキハ出願者ニ向ツテ發明ノ實質ガ果シテ有益ナルモノナルヤ否ヤ、又其發明ハ他人ノ權利ヲ侵害スルモノニ非ルヤ否ヤ、ニ就キ明確ナル決定ヲ與フルノ利アリ、今若シ此方法ヲ舍テシテカ瑣細ナル小發明ニシテ專賣權ヲ得ルモノ工業界ニ堆積スベク、爲メニ工業技術ノ進歩ヲ攪亂スルノ憂アリ、加之ナラズ專賣權ニ關スル訴訟ハ非常ニ増加シ之ヲ裁判スルニ當リ當局者ノ煩累云フ可ラザルモノアルヤ必セリト、之ニ對シテ出願主義ノ辯解ヲ聞クニ曰ク、各種ノ發明ニ就キ工業ニ與フル利益ノ奈何ヲ決スルハ、多年ノ實驗ニ依ルコトヲ要ス、未ダ之ヲ實地ニ應用セザルニ當ツテ之ガ利益ヲ決定スルハ甚ダ困難ナリ然ルニ之ヲ審查ノ局ニ當ル者ニ一任スルハ不當ノコトタリ、焉ン

ゾ知ラン種々ノ弊害ハ是ヨリ生ズルコトヲ、且夫レ權利ノ侵害ヲ防止スルガ如キハ、寧ロ當事者ノ責任ニ放任スルヲ可トス、奈何ントナレバ法律ノ制裁ハ出願者ヲシテ其發明ニ關シテ充分ナル審査ヲナスコトヲ促セバナリト、余ノ見ル所ニ依レバ此二主義ハ互ニ長短得失アリト雖モ工業政策上審査主義ハ出願主義ニ優ルモノト云ハサルヲ得ズ、蓋シ出願主義ノ主張スルガ如クニ發明ノ利益ハ一朝ニシテ決定シ得ベキモノニ非ラズトセハ直チニ之ニ與フルニ專賣權ヲ以テスルハ不當ノコトタリ、且又權利ノ侵害ヲ豫防スルハ當事者ノ責任ナリト云フモ政府ハ之ニ關シテ豫防ノ方法ヲ設クルハ工業技術ノ進歩ノ爲メニ必要ナル措置タリトス、我國現行法ニ於テ審査主義ヲ執リタルハ至當ノ立法ナリト云フヲ憚ラズ

特許ノ強制  
讓與

專賣權ノ性質タル一種ノ所有權ニシテ之ヲ賣讓與シ若クハ擔保ニ供スルコトハ其所有者ノ意思ニ放任シ、法律ハ敢テ之ニ向ツテ制限ヲ附ス

ルコトナキヲ常トス、然レドモ技術上ノ發明ハ發明者ノ利益ヲ害セザル  
 範圍ニ於テ廣ク之ヲ實用ニ供セシムルハ、一國工業ノ進歩ノ爲メニ必要  
 ナルニ關ラズ、發明者即チ此權利ノ所有者ニシテ充分之ヲ利用スルノ資  
 カヲ有セズ其方法ヲ欠ケル場合ニ於テハ有益ナル發明モ公益上何等ノ  
 效果ヲ奏セザルノ恐ナシトセズ、於是乎歐洲專賣特許制ニ關スル學者及  
 ビ實務家ニシテ往々專賣權ニ關スル強制讓與 (Licences obligatoire) ノ議ヲ  
 立ツル者アリ、強制讓與ノ趣旨ハ特定ノ條件ノ下ニ、所有者ノ意志ノ奈何  
 シテ問ハズ、所有者ヲシテ其發明ヲ利用セント申出ヅル者ニ對シ其權利  
 ヲ讓與セシムルニ在リ、此場合ニハ讓與ヲ受ケタル者ヨリ所有者ニ對シ  
 相當ノ賠償ヲナサシムルハ固ヨリ言フ俟タザル所ナリトス、此議ヤ一八  
 七〇年始メテ「クロスタ・マン」氏ニ依ツテ唱道セラレシヨリ以來、各國ノ  
 法律ニ於テ既ニ幾分カ採用セラレタリ、米國ニテハ當初附與シタル特許  
 期限ノ延長ヲ許可スル場合ニハ、何時ニテモ此讓與ヲナスベキコトヲ命

特許ニ關ス  
 ル國際同盟

ジタリ獨逸ニテハ特許許可ノ時ヨリ三年ヲ經過シタル以後ニ於テ所有  
 者ガ他人ヨリ正當ナル條件ヲ附シ權利ノ讓與ヲ乞フモ、之ニ應ゼザル場  
 合ニハ政府ハ特許ヲ取消スノ權能ヲ有セルコト、セリ瑞士ニテモ稍々  
 之ニ類似セル規定ヲ存セリ、即チ特許ヲ得タル物品ガ外國ヨリ輸入セラ  
 レタル場合ニ於テ所有者ガ正當ナル讓與ノ要求ニ應ゼザルトキハ、政府  
 ハ特許ヲ取消スヲ得ルコト是ナリ、英國ニテハ所有者ガ內國ニ於テ其發  
 明ヲ使用セザルカ、或ハ公共ノ必要ヲ充足スル能ハザルカ或ハ充分ニ之  
 ヲ利用スルノ資力ヲ欠ケル場合ニ於テ、政府ハ強制讓與ヲ命ズルコトヲ  
 得ルモノトセリ  
 今ヤ歐米各國至ル處專賣特許ノ制度存在シ、發明者ハ之ニ依ツテ其權利  
 ヲ保護セラレタリ、然レドモ各國ノ間交通ノ頻繁ナル現時ニ在ツテハ自  
 國ニ於テ法律ヲ以テ保護セラレタル發明モ、外國ニ於テ他人之ヲ利用ス  
 ル者アルハ言フ俟タズ、又之ヲ利用シテ製造シタル物品ヲ自國ニ輸入ス

ルノ恐ナキニ非ラス是ノ如クンバ發明ノ保護ハ有名無實トナリ、發明者ハ自己ノ勞力ニ對シテ何等ノ利益ヲモ得ルコト能ハサルノ結果ヲ生スベシ。此弊害ヲ匡正スルガ爲メニハ必ラスヤ專賣特許ニ關スル國際同盟ヲ結バサル可ラス。一八八三年ニ締結セラレタル同盟ニ加ハリタル列國ヲ舉グレバ佛蘭西、以太利、白耳義、西班牙、瑞士等ナリ。若干モナクシテ英吉利、米國モ亦之ニ加盟セリ。而シテ獨逸、埃匈國及ビ露西亞ハ今尙ホ之ニ與セスト云フ

余ハ茲ニ獨逸及ビ本邦ニ於ケル特許統計ヲ掲ゲン

獨逸國特許ニ關スル統計

出願數	特許數
一八七八年	五、九四九
一八七九年	四、二〇〇
一八九三年	一四、二六五
一八九四年	六、四三〇
一八九五年	一四、九六四
一八九六年	六、二八〇
一八九七年	一五、〇六三
一八九八年	五、七二〇

一八九六年	一六、四八六	五、四一〇
一八九七年	一八、三四七	五、四四〇

本邦特許ニ關スル統計

出願數	特許數	十五年	十年	五年	別
明治二三年	一、一八〇	二四〇	一三一	八〇	二九
同 二四年	一、二八八	三六七	二二八	一一〇	二九
同 二五年	一、三四四	三七九	二二二	一一一	二六
同 二六年	一、三三七	三一八	二〇四	九六	一八
同 二七年	一、二五〇	三三六	二二〇	九三	二三
同 二八年	一、二二二	二二三	一五六	五四	二三
同 二九年	一、二二三	一六九	一一一	三九	九
同 三〇年	一、五四二	一八八	一三四	四三	一一
同 三一年	一、七八九	二九三	二〇五	八七	一〇
同 三二年	一、九一五	五八七	五二二	六三	二二



同治三三年	二,〇〇七	五八六
同 三四年	二,三九七	五〇三
同 三五年	三,〇九五	八七一
同 三六年	三,二五三	一,〇二四
同 三七年	二,六一八	一,二五三

(備考) 明治三三年以後ハ改正特許法ノ規定ニ依リ特許期間ヲ凡テ十五年ト定メリレ  
 タリ去レハ同年以後ハ特許年限別ヲ掲ケス

明治三十七年度ニ於ケル特許數ヲ工業ノ種類ニ依ツテ分類スレハ左ノ如シ

機械工業	五八七
化學工業	一一三
電氣工業	一四一
家具及被服類	四〇二
合計	一,二五三

## 第十一章 國際貿易ト工業政策

方今交通ノ機關益々發達シ國際ノ關係ハ次第ニ親密ヲ加フルノ時ニ當  
 ツテ、一國ノ工業政策ヲ定ムルニハ當ニ國內ノ工業事情ヲノミ標準トス  
 可ラズ、更ニ進ンデ、國際貿易ノ關係ヲ斟酌セザル可ラザルコトハ固ヨリ  
 言ヲ俟タズ、余ガ先キニ章ヲ追フテ説明シタル所ノ工業政策ハ國際貿易  
 ノ關係ノ奈何ニ關ラズシテ、一國工業ノ進歩發達ノ爲メニ政府ノ執ルベ  
 キ方針、所謂工業的對内政策ニ外ナラズ、本章ニ於テ余ノ講述セントスル  
 所ハ所謂工業的對外政策ニ關スルモノニシテ、主トシテ國際貿易ノ觀察  
 點ヨリ一國ノ工業政策ノ種類及ビ性質ヲ明ニスルニ在リトス  
 國際貿易ト工業政策トノ關係ニ就テ正反對ノ性質ヲ有セル二種ノ觀念  
 ハ從來學者及ビ實務家ノ間ニ行ハレタリ、即チ自由主義ト保護主義是ナ  
 リ、自由主義ノ說ニ依ルトキハ産業ノ發達ハ個人ノ活動ニ基カザル可ラ

ズ、國家ノ干涉ハ只已ムヲ得ザル場合ニ於テノミ至當ノ措置タルヲ得ベシ。去レバ政府ガ自國ノ工業ヲ保護スルノ目的ヲ以テ法制ノ力ヲ藉ツテ國際貿易ニ關スル自然ノ趨勢ヲ制止スルハ策ノ得タルモノニ非ラズトセリ。保護主義ノ説ニ依ルトキハ一國工業ノ發達ハ外國ノ競争ノ爲メニ阻害セラレ、コトアリ、此場合ニ於テ外國ノ競争ヲ制限シテ自國ノ工業ヲ保護スルハ政府當然ノ職務ナリトセリ、今若シ自由主義ヲ是認センカハ國際貿易ト工業政策トハ何等ノ關係ナキモノトナリ、從ツテ本章ノ問題ハ講究ノ價值ナシト断定スルノ外ナシ。反之シテ保護主義ヲ採用センカハ國際貿易ト工業政策トノ關係ハ工業經濟論中、洵ニ重大ナル事項ニ屬スルナリ。去レバ余ハ先ヅ二主義ノ系統ニ就キ之ヲ畧述セント欲ス

歐洲ノ經濟史上保護主義ガ自由主義ニ先ツテ起リタルノ事實ハ爭フ可ラザルコト、ス。即チ十七世紀ノ頃所謂尙金主義ト名クル保護主義ノ一派是ナリ。此主義ハ當時歐洲諸強國ノ間ニ盛ンニ行ハレタルモ、佛國ニ於

貿易主義ノ系統

テ「コルベア」ノ政府ハ最モ組織的ニ最モ統一的ニ之ヲ遂行シタルガ故ニ或ハ之ヲ「コルベア」主義ト稱スル者アリ、此主義ノ要旨ヲ按ズルニ一國ノ富財ノ多寡ハ其國ニ存在セル貴金屬ノ多寡ニ依ツテ分ル而シテ貴金屬ノ増減ハ輸出入ノ鈞衡ニ依ツテ定マル、即チ輸出ガ輸入ニ超過スルニ從ツテ外國ニ在ル所ノ正貨ハ自國ニ吸收セラレ自國ノ正貨ハ之ニ伴ツテ増加スベシ、奈何ントナレバ輸出入ノ差額ハ常ニ正貨ヲ以テ支拂ハザル可ラサレバナリ、是故ニ國際貿易ノ關係ニ於テ常ニ輸出超過ノ状態ヲ保タシムルコトハ國富増殖ノ惟一ノ方法タリ、尙金主義ハ此理想ヲ基礎トシ之ニ由ツテ各種ノ工業政策ヲ立テタリ、而シテ是等政策ノ要旨トスル所ハ他ナシ、一方ニ於テ自國ノ需要品ハ自國ノ生産品ヲ以テ之ヲ充足スルノ方針ヲ定メ由ツテ以テ輸入ヲ減少シ、又一方ニ於テ輸出品ヲ製出スル所ノ工業ヲ獎勵鼓舞シテ之ニ與フルニ種々ノ補助便宜ヲ以テシ、由ツテ以テ輸出ノ増加ヲ圖ルニ在リ

尙金主義ニ次イテ自由主義ハ起レリ。十八世紀ノ末葉、アダムスミスガ富國論ヲ著ハシ、尙金主義ノ謬妄ヲ指摘シ、國際貿易ノ本質ヲ明ニセシヨリ、此主義ハ一般ニ歡迎セラレ、十九世紀ノ前半期頃ニ至ルマデ、歐洲各國ノ貿易政策ハ漸次之ニ移式スルコト、ナレリ。氏ノ説ニ依ルトキハ、國際間ニ於ケル物品ノ交換ハ、國內ニ於ケル物品ノ交換ト其性質ヲ異ニスルモノニ非ラズ、二者均シク實利ト實利トノ交換ニシテ從ツテ又價格ト價格トノ交換ナリ。而シテ分業ノ理法ハ其間ニ行ハレ、交換ノ利益ハ雙方與ニ之ヲ享受スルコトヲ得ベシ。今國內ニ於テ個人ハ各自其ノ少ナク價格ヲ附スル所ノ物品ヲ與ヘテ多ク價格ヲ附スル所ノ物品ヲ得ルナリ。交換ノ利益於是乎存セリ。殊ニ生産ノ關係ニ於テハ各自其短處ヲ舍テ其長所ヲ取り最少ノ生産費ヲ以テ最多ノ生産ヲナスノ目的ヲ以テ業務ノ撰擇ヲナスガ故ニ、分業ノ利益ハ自ラ生ジ、社會經濟ノ發達ハ由ツテ以テ期圖スルコトヲ得ベシ。國際貿易ノ關係モ亦之ニ異ナルコトナシ。輸出品ハ、內國

ニ於テヨリモ寧ロ外國ニ於テ多クノ價格ヲ有セル物品ナリ、輸入品ハ外國ニ於テヨリモ寧ロ內國ニ於テ多クノ價格ヲ有セル物品ナリ、是故ニ輸出モ輸入モ與ニ人爲ノ制限ヲ受クルコトナク自然ノ趨勢ニ基キ圓滿ニ行ハル、ニ從ツテ內國ノ消費者モ外國ノ消費者モ與ニ其利益ヲ受クルコト多カルベク、而シテ其利益ハ全ク對等ナリトス。夫ノ輸出入ノ不均ト云フガ如キノ事實ハ此點ヨリ觀察スルトキハ殆ンド無意義ノコトナリト云ハザル可ラズ。又各國ノ間ニ氣候、風土、及ビ國民ノ氣質等ノ事情各々異ナルモノアリ、從ツテ工業ノ種類ニシテ其國ニ適應セルモノト然ラザルモノトノ區別アルハ必然ノ事ナリ、是故ニ生産ノ關係ニ於テ各國ノ間ニ分業ノ理法ハ自ラ行ハル、ナリ、是レ猶ホ內國各個人ノ間ニ於テ其趣ヲ一ニセリ然ルニ今若シ自國ノ工業ヲ保護スルノ目的ヲ以テ貿易政策ヲ定メンカ、是レ人力ヲ以テ自然ノ趨勢ヲ攪亂スルモノニシテ分業ノ理法ハ各國ノ間ニ行ハレザルベク、之ガ爲メニ各國經濟ノ發達ヲ阻

害スルコト少ナキニ非ルベシ、要之スルニ國際貿易ニ關シテハ全ク自由放任ノ方針ニ依リ絶對的ニ政府ノ干涉ヲ排除セントスルハ自由主義ノ理想ナリトス。此學說タル今尙ホ世ニ行ハレ各國ノ學者實務家ノ間之ヲ奉ゼル者少ナシトセズ。

自由主義ノ反動トシテ又尙金主義ノ匡正トシテ一種ノ保護主義ハ十九世紀ノ初期ニ當リ獨逸ニ起レリ。之が主唱者ヲ「リスト」「トナス」「リスト」ノ保護主義ハ其發生ノ當時自由主義ノ渦中ニ埋沒セラレ世人ノ贊同ヲ得ルコト能ハザリシモ次第ニ其勢力ヲ加ヘ、近時國際貿易ニ關スル最新ノ主義トシテ各國ノ間之ヲ唱道セル者多シ。殊ニ十九世紀ノ七十年代以後ニ至ツテハ歐洲諸強國ノ貿易政策ハ之ニ則ツテ確立セラレタルモノ少ナシトセズ。今茲ニ其要領ヲ述ベンニ、氏ノ說ニ依ルトキハ一國産業ノ發達ハ歷史的秩序ヲ履マザル可ラズ先ヅ漁獵、牧畜ノ時代ヲ脱シテ農業時代ニ進ミ、農業時代ヨリ工業ト工業トヲ併有セル時代、所謂農工時代ニ進ミ

更ニ進ンデ農工業ト商業トヲ併有セル農工商時代ニ達スルヲ常トス。今若シ各國ノ間ニ毫モ交通ノ關係存スルコトナク恰モ鎖國ノ狀態ニ在リト假定センカ、各國ハ其進度ニ遲速ノ別アルニ關ラズ早晚其ノ歸着スル所ヲ一ニスベシ。然レドモ方今交通次第ニ開ケ國際ノ關係益々親密ヲ加フルノ時ニ當ツテハ、進歩ノ程度高キ國ト進歩ノ程度低キ國トノ間ニ産業ノ競争ハ自ラ起ラザルヲ得ズ。此競争ニ於テ先進國ハ後進國ニ比スレバ産業ニ關スル多年ノ歴史ヲ有シ、技術ノ發達、職工ノ修練、交通ノ機關、金融ノ組織、事業ノ經營等ニ就キ既ニ優者ノ地位ニ在ルヲ以テ、今若シ之ヲ自然ニ放任センカ後進國ニ於ケル産業ノ發達ハ甚ダ緩漫ナルベク終ニ或ハ沈滯休止ノ悲境ニ陥ランモ亦知ル可ラズ。於是乎後進國ニ於テ政府ノ干涉ノ必要起ルナリ。即チ特定ノ産業ニ就キテハ輸入ヲ禁止若クハ制限シテ以テ自國生産ニ對シテ充分確實ナル販路ヲ有セシメ、或ハ輸出工業ニ就キテハ補助獎勵ノ方法ヲ設ケテ以テ外國生産者ト對等ノ地位ニ

近カシメ、由ツテ以テ外國市場ニ於ケル競争ニ就テ自國ノ産業ヲ助成スルコトヲ圖ラザル可ラズ。是ノ如クシテ後進國ヲシテ國際ノ競争場裡ニ於テ先進國ト對抗シ其進歩發達ノ目的ヲ達セシムルコトヲ得ベシヨリス「一派ノ保護主義ノ理想ハ是ノ如シトセバ、此理想ト尙金主義トノ區別ハ自ラ明ナルベシ。此理想ニ依レバ保護主義ノ實行ハ只一定ノ時期ヲ限ルベキモノタリ。自國ノ工業ガ最モ進歩シタル階段ニ達スルニ及ンデハ最早之ヲ廢止スルコトヲ得ルモノトスルモ尙金主義ハ之ト異ナリ永久ニ保護政策ヲ實行セザル可ラザルコトヲ主張スルモノタリ。保護主義ニ關スル最新ノ學說ハ獨逸ニ起レリ。所謂國力保護論(Schutz der nationalen Arbeit)ニシテ「レキシス」一派ノ唱道スル所タリ。此說ハ獨逸ニ於テ稍々勢力ヲ有セルモノ、如キモ未ダ他國ニ及バズ。顧フニ此說ノ基ツク所ハ內國生産品ハ凡テ其種類ノ何タルヲ問ハズ、內國ノ市場ニ於テ外國品ノ競争ヲ排除スルノ目的ヲ以テ保護政策ヲ實行セザル可ラズト云

フニ在リ、今若シ此主義ヲ實行センカ國際貿易ノ關係ハ殆ンド絶滅ニ歸スルニ至ルベク、或ハ此主義ヲ目シテ經濟上ノ鎖國主義ト云フ者アリ、亦宜ナリト云フベシ

以上述ブル所ハ國際貿易ト工業政策ノ關係ニ就イテ諸學派ノ主張セル意見ノ大要ナリトス。余ハ是ヨリ進ンデ是等ノ學說ニ關シ其當否ヲ評論セン

尙金主義ノ前提トスル所ハ國富ノ多寡ハ正貨ノ多寡ニ依ルト云フニ在リ。此思想ノ謬妄ナルコトハ固ヨリ説明ヲ要セザルナリ。蓋シ正貨ハ國富ノ一種ナリ而モ其流通ノ範圍ヤ廣ク其需要ノ方面ヤ多シ、又其保存ヤ最も久シキニ涉ルベシ。去レバ正貨ガ國富ノ重要ナル部分ヲ占ムルコト固ヨリ疑ヲ容レザル所ナルモ、正貨必ラズシモ國富ノ全體ヲ代表セルニ非ラズ正貨以外ニ以テ國富ニ數フベキモノ何ゾ限ラン。是故ニ正貨増加スルモ國富ハ之ニ伴ツテ増加セリト云フコトヲ得ズ、正貨減少スルモ國富

ハ之ニ伴ツテ減少セリト云フコトヲ得ザルナリ。尙金主義ガ正貨ノ増減ヲ標準トシテ貿易政策ヲ立テタルハ固ヨリ此誤謬ノ前提ニ基ケルモノナルガ故ニ今更之ヲ是非スルノ必要ナシ。然レドモ此主義ノ遺物トシテ今尙ホ世ニ行ハル、所ノ思想アリ。何ゾヤ。貿易政策上常ニ重キヲ輸出入ノ鈞衡ニ置キ輸出超過ノ事實ヲ以テ國富増進ノ主眼トナセルコト是ナリ。抑モ輸出超過ナル國際貿易上ノ現象ハ其事情ノ奈何ニ關ラズ國富増進ノ方法トシテ歡迎スベキモノナルヤ否ヤ。余ノ見ル所ニ依レバ一國ノ貿易ニシテ假令ヒ輸出ノ超過セルモノアルモ其輸出品ニシテ生産ノ原料或ハ機械器具等凡テ自國ニ於テ資本ノ効用ヲ完フスル所ノモノタリ。而シテ輸入品ニシテ奢侈品ノ如キ一時ノ消費ニ供スベク自國ノ生産ニ於テ毫モ裨補スルコトナキモノタラシメバ、國際貿易ノ關係ニ於テ輸出超過ノ事實アルモ自國ノ生産力ハ爲メニ消耗シ國力ノ衰頹ヲ來タスヤ必セリ。若シ反之シテ輸入ハ輸出ニ超過シタル國ニ於テ其輸入品ハ悉ク

生産ニ關係アル所ノモノタリ其輸出品ハ却ツテ奢侈品タル場合ニハ輸入ノ超過ハ國富増進ノ爲メニ毫モ憂フベキコトニ非ラズ。要之スルニ國民經濟ノ點ヨリ輸出入ノ關係ヲ觀察スルニ當ツテハ其數量ノ比例ヨリハ寧ロ其實質ノ奈何ヲ明ニスルヲ要ス。然ラザレバ遂ニ正當ナル斷定ヲナスコト能ハザルベシ。

今「アダムスミス」等ノ主唱ニ係ル自由貿易主義ヲ按ズルニ、其ノ説ク所ハ國際貿易ニ關スル理想トシテ洵ニ完全ナルモノニシテ一點ノ非難スベキ所ナキガ如シ。即チ國際貿易ハ國內ノ交換ト其性質ヲ異ニスルコトナシ之ヲ自由ニ放任スルトキハ國內ノ生産關係ニ於テ分業ノ理法ノ行ハル、ガ如クニ國際ノ生産關係ニ於テモ亦同一ノ理法ノ行ハル、ヲ得ント云フハ、理論トシテハ誰カ之ヲ承認セザル者アラシヤ。然リト雖モ此理論ノ前提トシテ一ノ假定ヲナサル可ラズ。即チ各國工業ノ進歩ハ同一ノ程度ニ在ルコト是ナリ。此點ニ於テハ保護主義ノ主唱者タル「リスト」モ

亦自由主義ニ左袒セル者ト云ハザル可ラズ。奈何ントナレバ一國工業ノ  
 進歩ガ他國ト同一ノ程度ニ在ラバ自由主義ヲ採ルモ不可ナシトハ彼ノ  
 主張スル所ナレバナリ。此假定ノ場合ニ於テハ自由主義ノ結果トシテ國  
 際的生産ノ分業ナル事實存在スベク各國與ニ其利ヲ被ルコトヲ得ルヤ  
 言ヲ俟タズ。然リト雖モ各國ノ間ニ工業進歩ノ程度ヲ異ニスルニ從ツテ  
 自由貿易ノ利益ハ獨リ進歩シタル工業國ノ壟斷スル所タルベク、幼稚ナ  
 ル工業國ハ却ツテ之ガ爲メニ其發達ヲ阻害セラル、ニ至ルベシ。是レ他  
 ナシ、進歩セル工業國ニ於テハ幼稚ナル工業國ニ比スレバ生産ニ關シテ  
 必要ナル各種ノ機關整頓シ、金利ハ低廉ナルベク、融通ノ便利ハ大ニ開ケ  
 職工ノ技術ハ進歩シ、器械應用ノ範圍ハ廣ク、交通ノ設備ハ充分ニ發達シ  
 是等ノ事柄ニ就イテ一種ノ特權ヲ有シタルノ觀ナキニ非ラズ。此場合ニ  
 於テ後進ノ工業國ニシテ之ト競争セントスルニ當リ自國ノ特產物タル  
 場合例ヘバ殖民地產物ノ如キモノヲ除キテハ到底先進ノ工業國ヨリモ

低廉ナル生産費ヲ以テ製造ヲ營ムコト能ハザルハ固ヨリ疑ヲ容レズ。假  
 令ヒ地質、風土等自然ノ事情ノ爲メニ多少自國ノ特產物トシテ世界ノ市  
 場ニ雄飛スルニ足ルノ工業アルモ資本、勢力等ノ經濟事情ニ因リテ先進  
 ノ工業國ノ爲メニ壓倒セラレ、終ニ其特色ヲ發揮スルコト能ハズシテ已  
 ムニ至ラン。果シテ然ラバ國際的生産ノ分業ナル自由主義ノ理想ハ奈何  
 ニシテ之ニ違スベキヤ。産業ノ國際競争ニ於テ強者ハ益々榮ヘ弱者ハ益  
 々衰ヘ優勝劣敗ノ趨勢ハ底止スル所ヲ知ラザルベシ。或ハ曰ク自由貿易  
 ハ猶ホ烈風ノ如シ、弱キ火ハ之ガ爲メニ消ヘ強キ火ハ之ガ爲メニ益々燃  
 ヲルナリト。眞ニ然リ。顧フニ國際的生産ノ分業ナル事實ハ偶然ニ起ルモ  
 ノニ非ラズ、特種ノ工業ガ一國ノ特產タルニ至ルニハ自ラ種々ノ歴史的  
 事情ニ基キタルモノナリ。當初ヨリ某工業ハ甲國ニ適當セリ某工業ハ乙  
 國ニ適當セリト斷定スルコトハ人智ノ得テ及ブ所ニ非ラズ、原料ノ產地  
 ヲ以テ該工業ニ關スル適當ナル國ト判斷スルハ通常ノ事ナリ。例ヘバ本

邦、以太利佛蘭西ノ如キハ、繭ノ產地ナルト同時ニ又生糸ノ產地ナルガ如シ。然レドモ英國ハ紡績業ヲ以テ特有ノ工業トナセルニ關ラズ、其原料ハ北米印度若シクハ埃及ノ原綿ヲ仰グルノ事實ヲ見バ、強チ原料ノ產地ト工業ノ特產地トハ同一ニ歸セザルコトヲ知ルニ足ルベシ。佛國ガ美術工業ノ特產地ナルコトハ世人ノ均シク認ムル所ナリ。或ハ之ヲ以テ佛國民ノ特性ニ歸スル者アルモ、又一方ニハ「コルベア」以來美術工業ニ關スル教育制度ノ力之ヲシテ、然ラシメタリト云フ者アリ。獨逸ハ化學工業ノ根據地タリ、此種ノ工業ガ獨逸ニ發達シタルモ、只之ヲ自然ノ事情ニ歸スルコト能ハザルベシ。由是觀之レハ、一國ガ特有ノ產物ヲ有スルコトハ多年ノ歴史ヲ經タル後ニ定マルコトナリ。去レバ自由貿易ノ主義ヲ採ラバ、國際的分業ハ自ラ行ハル、ニ至ルベシト斷言スルコトヲ得ズ。

「リスト」ノ主唱スル所ノ保護主義ハ其理想ニ就イテモ亦其實行ニ就イテモ一國ノ貿易政策トシテ推重スベキ價值アリ。氏ハ自由貿易ヲ以テ最終

ノ理想トナシ、保護貿易ヲ以テ進歩ノ段階トセリ。即チ工業ノ先進國ニ於テハ宜シク此主義ヲ採ルベシト論シ、而シテ工業ノ後進國ニ向ツテ保護主義ヲ勸告セリ。氏ノ保護主義ハ夫ノ尙金主義ノ如クニ、妄リニ輸入ノ鈞衡ニ重キヲ置クモノニ非ラス、政府ノ干涉ニ依リ、自國ノ産業ニ關スル國際競争ヲ排除シ、由ツテ以テ自國ノ生産力ヲ發達セシムルヲ以テ主眼トナセリ。「ロツセル」ガ此主義ヲ以テ教育的目的ヲ有セル保護政策ト名ケタルハ亦宜ナリト云フベシ。抑モ生産ニ關スル後進國ト先進國トノ國際競争ハ猶ホ發達ノ充分ナラザル兒童ヲシテ他ノ強健ニシテ且ツ年長ノ兒童ト競走セシムルガ如シ、若シ始メヨリ之ヲ放任センカ、前者ハ常ニ後者ノ壓倒スル所タルヲ免レザルベシ。然レドモ前者ニ對シテ訓練ヲ施シ、體育ヲ務メ、其齡熟スルヲ俟ツテ後者ト競走セシムルコト、セバ勝敗ノ數ハ未ダ知ル可ラズ。工業ニ關スル國際的競争モ亦之ヲ以テ推知スルコトヲ得ベシ。



保護主義ノ理想ハ右述ブル所ノ如シ。然リト雖モ余ハ「レキシス」一派ノ主張スル所ノ國力保護論ニ左袒スル者ニ非ラズ。抑モ奈何ナル工業ノ種類ガ一國ニ適セルヤノ問題ハ各種ノ事情ヲ參酌考量シタル後始メテ定マルベキモノニシテ容易ニ之ヲ斷定スベキニ非ラズ。然レドモ長キ經驗ト久シキ星霜ヲ經ルトキハ一國ニ適當セル工業ノ種類ハ之ヲ明ニスルコトヲ得ベシ。而シテ此性質ヲ有セル工業ニ對シテ充分ノ保護ヲ與フルハ實務家ノ宜シク務ムベキ所ナリ。夫ノ國力保護論ノ如キハ工業ノ適否ニ關スル問題ヲ度外ニ置キ凡テノ工業ハ勿論。尙ホ進ンデハ農業ヲモ保護政策ノ範圍内ニ包含セシメントスル所ノモノタリ。若シ此學說ヲ推及スルトキハ自國ノ需要ハ凡テ自國ノ生産ヲ以テ充足セシメ。毫モ外國ノ供給ヲ仰ガザルコト、ナリ。之ガ爲メ國內消費者ノ損失スル所大ナルベク産業ノ發達ハ所謂凡テニ通ゼル者バーノ長所ナキノ謬ノ如ク國際的分業ノ利益ハ終ニ之ヲ收ムルニ由ナカラシム。

國際貿易ト工業政策ノ關係ハ「リスト」ノ主義ニ基キテ之ヲ立ルコトヲ要ス。願フニ一國ノ政府ガ工業發達ノ爲メニ執ルベキ政策ハ一ニシテ足ラズ。工業教育ト云ヒ專賣特許制ト云ヒ同業組合ト云ヒ悉ク此系統ニ屬スルモノトス。是等ノ政策タル所謂對内的政策ニ外ナラズ。今之ニ加フルニ對外的政策ヲ以テシ自國ノ産業ニ對シ國內ノ販路ニ於テ外國ノ競争ヲ排除シ、外國ノ販路ニ於テハ外國ノ生産品ト對等ノ地位ニ立ツコトヲ得セシメザル可ラズ。是ノ如クシテ後始メテ工業ニ關スル保護獎勵ノ目的ヲ達スルニ於テ憾ム所ナカルベシ。貿易政策ノ方針ハ宜シク之ニ則ルベシ。近時歐洲各國ニ於ケル貿易政策ハ此方針ニ依ルモノ益々其數ヲ加フルモノ、如シ

余ハ是ヨリ進ンデ工業保護ノ目的ノ爲メニセル各種ノ貿易政策ヲ講究セン

第一 輸入ニ關スル政策 工業保護ノ目的ヲ達スルガ爲メニ特定ノ工

業ニ就イテハ國內ノ販路ヲシテ輸入品ノ侵ス所タラシメザルコトヲ務メザル可ラズ、此必要ニ基キ古來輸入ニ關シテ實行サレタル所ノ政策ハ其種類多シ、茲ニ其重ナルモノヲ擧ゲンニ

## 輸入禁止

(1) 輸入禁止 輸入禁止ノ政策ハ行政上ノ目的ノ爲メニスル場合ト保護政策ノ必要ニ基ケル場合トノ二種ニ分レタリ、夫ノ傳染病豫防ノ爲メ或ハ專賣特許法ノ結果トシテ或ハ政府ノ特占事業ノ爲メニ特種物品ノ輸入ヲ禁止スルガ如キハ全ク行政上ノ目的ヲ有セルモノニシテ保護政策ト何等ノ關係ナシトス。反之シテ國內ニ於テ輸入品ト同種ノ物品ヲ製出スル所ノ産業アリ、而シテ輸入ヲ杜絶スルハ、其産業ノ發達ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テ輸入禁止ヲナスハ即チ保護政策ニ基ケル輸入禁止ナリトス。余ノ茲ニ講述セントスル所ハ後者ノ場合ニ在リ、前者ノ場合ノ如キハ本論ノ範圍外ナリトス

歐洲ニ於ケル輸入禁止ノ實例ヲ按ズルニ中古時代ニ頻リニ行ハレ近世

ニ至ツテ次第ニ衰ヘ十九世紀ノ中葉ニ及ンデ殆ンド其跡ヲ絶テリ、英國ニテハ夫ノ航海律發市ノ頃ヨリ輸入禁止ハ盛ンニ行ハレタリ、一六六二年獨逸及ビ和蘭ニ對シ酒、煙草、鹽、木材等ノ輸入ヲ禁止シタルガ如キハ其ノ顯著ナルモノトス。一八一四年ノ調査委員ノ報告ニ依レバ當時各國ニ對スル輸入禁止品ノ種目ハ約二百アリキ而シテ此制度ガ全ク廢止セラレタルハ一八四二年ナリトス、佛國ニテハ此制度ハ十七世紀ノ末葉ニ起リ一七九三年ニハ三十四種ノ輸入禁止品アリキ次イデ王朝ノ時代ニ至ツテ輸入禁止論ハ盛ンニ朝野ノ間ニ歡迎セラレ一八三五年ニハ五十八種ノ多キニ上リシガ、一八六〇年ニ至ツテ此制ハ全ク除却セラレタリ、普國ニテハフリードリッヒ大帝以後輸入禁止頻リニ行ハレ、一七六六年ニハ其物品ノ種類ハ四百九十ナリシモ一八一八年ニ殆ンド廢止セラレタリ、埃國ニテハ一六七四年佛國ニ對シ此制ヲ採リシヨリ一七八四年ノ關稅法ニ約二百ノ輸入禁止品アリキ、一八一七年更ニ綿糸綿織物及ビ

毛織物ノ輸入ヲ禁止シ一八五一年ニハ尙ホ六十三ノ禁止品アリシモ同年以後全ク廢止ニ歸セリト云フ

輸入禁止ノ沿革ハ右述ブル所ノ如シ現今ニ至ツテハ各國ニ於テ殆ンド其痕跡ヲ留ムルコトナシ。顧フニ輸入禁止ハ極端ナル保護政策ナルコト言ヲ俟タズ。今若シ甲國ニシテ乙國ニ對シ此制ヲ採ランカ乙國モ亦之ニ報ユルガ爲メニ甲國ニ對シテ同一ノ方法ニ依ルベク之ガ結果トシテ殆ンド二國ノ間ニ貿易ノ戰爭ヲ起スコト、ナリ雙方與ニ失フ所大ナルベシ於是乎近時各國政府ハ輸入禁止ノ制ヲ廢シ之ニ代フニ輸入税ヲ以テスルコトヲ務メタリ

## 輸入税

(2) 輸入税 輸入税ノ目的ニ二種アリ一ハ財政上ノ必要ニ基キ政府ノ收入ノ爲メニスルモノニシテ一ハ保護政策實行ノ方法トシテ輸入ヲ制限シ由ツテ以テ國內ノ産業ヲ發達セシムルノ目的ヲ有セルモノトス今各國輸入税ノ沿革ヲ按スルニ當初ハ全ク財政上ノ目的ヲ有セルモノ

ナリシガ尙金主義ノ起ルニ及ンデ之ヲ以テ一種ノ保護政策ノ方法トナスコト、ナリ。是ヨリ以後此制度ハ各國ニ行ハレ而シテ保護政策ノ爲メニ重要ナル利器トナレリ

輸入税ハ課税ノ物件ニ就キテ之ヲ區別シテ食品ニ對スルモノ、原料ニ對スルモノ、粗製品ニ對スルモノ、完製品ニ對スルモノ、數種トナス。此區別ハ輸入税ト保護政策トノ關係ヲ明ニスルニ於テ洵ニ必要ナルコト、ス蓋シ工業保護ノ目的ヲ達センニハ課税物件ノ種類ノ異ナルニ從ツテ保護ノ程度ニ厚薄ノ別ヲ立テ從ツテ税率ノ高低ヲ異ニセザル可ラズ。殊ニ一國ノ工業發達ノ事情ニ依ツテハ食品、原料ニ就イテハ最早之ヲ保護スルノ必要ナキノミナラズ却ツテ輸入ヲ獎勵シ、只粗製品、完製品ニ就イテノミ輸入税ヲ課シテ輸入ノ制限ヲナスヲ利トスル場合モ亦屢々之アレバナリ

佛國ニ於テ輸入税ヲ保護政策ニ應用セルハ夫ノ尙金主義ノ主唱者タル

「コルベア」ノ時代ニ始レリ。「コルベア」ハ保護政策トシテ輸入禁止ニ左袒セズ輸入税制ノ實行ニ務メタリ。而シテ完製品ニ對シテハ成ルベク之ヲ重クシ原料ニ對シテハ成ルベク之ヲ輕クスルコトハ彼ノ輸入税ニ關スル主義ナリキ。爾來佛國ニ於ケル輸入税制ハ此方針ヲ守リ一七四九年ニハ綿織物ノ原料タル棉花ノ輸入ニ對シテハ全タク輸入税ヲ免除セリ一八一六年再タビ之ヲ課スルニ至リシハ、工業政策ヨリハ寧ロ財政ノ急ニ迫ラレタルモノナラン。王朝時代ニ於ケル佛國ノ保護政策ハ其極點ニ達シ原料ノ生産ニ對シテモ尙ホ保護ヲ加フルコト、ナリ。羊毛ニ對シテ重キ輸入税ヲ課スルニ至レリ。加之ナラズ穀物等ノ農産物ニ對シテモ亦過重ノ輸入税ヲ課シ由ツテ以テ國內生産者ヲ保護セリ。「ナポレオン」三世ノ工業政策ハ自由主義ニ傾キタルガ爲メニ輸入税ニ關シテ原料及ビ農産物ニ對スルモノハ勿論、製品ニ對スルモノニ至ツテモ成ルベク之ヲ輕減スルノ方針ヲ執レリ。然ルニ普佛戰爭以後政府ハ常ニ保護政策ヲ確守シ頻

リニ輸入税制ヲ擴張セルヲ見ル

英國ニ於テハ十七世紀ノ頃ヨリ輸入税制ハ次第ニ保護政策ノ方法トナリタリ。一六六〇年輸入税率ヲ見ルニ輸出ト輸入トノ間ニ著シキ税率ノ差アリ。殊ニ一六七〇年ノ穀物輸入法ノ如キハ國內穀價ノ高低ニ應ジ輸入税率ヲ異ニシ穀價ノ廉ナルトキハ税率ヲ高メ穀價ノ高キトキハ税率ヲ低クスルノ方法ヲ設ケ、農業者ノ保護ニ汲々タリ要之スルニ十八世紀ヲ通ジテ英國政府ノ工業ニ對スル保護政策ハ明カニ輸入税制ノ上ニ現ハレタルヲ見ル。一八二二年乃至一八六〇年ノ間此税制ニ關スル政府ノ方針漸次變化シ、同年以後英國ニ於ケル輸入税ハ全タク保護政策ノ舊套ヲ脱シ純然タル財政的租税ノ性質ヲ帶フルコト、ナレリ。普國ニ於テハ「フリードリック」大帝ノ時代ヨリ保護政策ハ其萌芽ヲ現ハセリ。而シテ大帝ノ保護政策ハ輸入税ヨリモ寧ロ重キヲ輸入禁止ニ置キタルガ故ニ輸入税制ノ施設見ルニ足ルベキモノナシ。一八一八年制定セ

ラレタル關稅法ニ於ケル輸入稅制ニ依リ保護政策ノ方針始メテ定マレ  
ルモノ、如シ此法律ニ於テ原料ニ對シテハ輸入稅ヲ免除若シクハ輕減  
シ農産物ニ對シテハ僅少ノ課稅ヲナシ、而シテ完製品ニ對シテハ約一割  
ノ從價稅ヲ課スルコト、セリ。十九世紀ノ中葉ニ在ツテ國際貿易ニ關ス  
ル政府ノ政策ハ寧ロ自由主義ニ傾キタリシガ爲メニ、此稅制ハ時々ノ變  
更アリシモ大體ヨリ云ヘバ漸次輕減セラレタルヲ見ル然ルニ帝國統一  
以來保護主義ハ次第ニ其勢力ヲ加ヘ、終ニ一八七九年關稅法ノ改正トナ  
リ、各種ノ輸入品ニ對シテ其稅率ヲ高メ保護政策ノ目的ヲ達スルニ於テ  
憾ム所ナキニ至レリ

現時歐洲各國ニ於ケル輸入ニ關スル保護政策ハ輸入稅ヲ以テ其中樞ト  
ナセルコトハ一般ニ認メラル、事實ナリトス。或ハ保護政策ノ目的ヲ遂  
行スルニ於テ輸入禁止ノ輸入稅ニ優ルコトヲ主張スル者アルモ、先キニ  
述ブル所ノ事情ニ基キ輸入禁止ハ現時ノ國際關係ニ徹シ到底實行サル

キ制度ニ非ラズ。去レバ必ラズ輸入稅制ニ依ツテ保護政策ノ基礎ヲ立テ  
ザル可ラザルヤ言フ俟タズ。然リト雖モ輸入禁止ト輸入稅制トハ實行ノ  
方法ニ依ツテハ其間髪ヲ容レザル場合ナシトセズ、是レ當局者ノ最モ注  
意ヲ要スルコトナリトス。輸入稅ノ一種トシテ禁止稅ト名ケラレタルモ  
ノアリ、此種ノ輸入稅ハ其稅率ヤ甚ダ高ク之ガ爲メニ殆ンド輸入ヲ杜絕  
セシムルコトハ屢々之アリ、加之ナラズ之ヲ實行スル所ノ當局者ニシテ  
往々輸入ノ杜絶ヲ目的トセル場合モ亦之アリ。是ノ如キハ名ヲ輸入稅ニ  
藉ツテ輸入禁止ノ實ヲ行フモノニシテ其害タル少シトセズ

第二 輸出ニ關スル政策 古來各國ニ於ケル輸出ニ關スル政策ハ大概  
二種ニ分レタルガ如シ一ハ食品原料等ノ輸出ニ就キ成ルベク之ヲ制限  
シ國內工業ノ資料ヲ充實スルノ目的ヲ有セルモノニシテ、輸出禁止及ビ  
輸出稅ノ如キハ此種ノ政策ニ屬セリ。一ハ製品ノ販路ヲ外國ニ擴張スル  
ノ目的ヲ有セルモノニシテ、輸出戻稅輸出獎勵金ノ如キ此種政策ノ重ナ

ルモノトス。要之スルニ二者與ニ國內ノ工業ヲ保護スルノ必要ニ基ケルモノニ外ナラズ。只一ハ消極的ニ一ハ積極的ニ之ヲ實行セルノ區別アルノミ

輸出禁止及  
輸出税

(1) 輸出禁止及ヒ輸出税 輸出禁止制ニシテ只政治上ノ目的ヲ有セルモノ例ヘバ兵器彈藥ノ輸出ヲ禁止セルガ如キハ茲ニ之ヲ論ゼズ。又東洋諸國ニ於テ屢々行ハレタル輸出禁止制アリ。夫ノ從來支那ニ行ハレタル米穀輸出禁止ノ如キハ全ク兎年飢歲ニ備フルニ外ナラズ。工業保護ノ爲メニセルニ非ラザルガ故ニ是レ亦本論ノ範圍ニ屬セズ。然レドモ歐洲各國ニ於テ輸出禁止ヲ以テ保護政策ノ一方法トナシタルコトハ其實例甚タ多シ。尙金主義ノ盛ンニ行ハレタル時代ニ於テ殊ニ然リトナス英國ニテハ前世紀ニ在ツテ羊及ビ羊毛ノ輸出ヲ禁止セリ。十九世紀ノ初期ニ至ツテモ器械類ノ輸出ヲ禁止スルノ議ハ朝野ニ喧シク、一八二五年ニハ終ニ議會ノ問題トナリタルモ器械業者ノ反對ノ爲メニ此議ハ議會ヲ通過

セズ、只器械ノ種類ニ依リ之ガ輸出ヲ禁ズルノ權能ヲ政府ニ與フルノ決議ヲナスニ止マリタリキ。其他諸國ニ於テモ亦原料等ニ關シ輸出ヲ禁止シタルコトハ屢々之アリトス。然レドモ近時此政策ハ殆ンド其跡ヲ絶テルモノ、如シ

輸出税ノ目的ハ輸出禁止ト均シク國內工業ニ必要ナル資料ハ成ルベク之ヲ國內ニ保存シ之ヲ完製シテ後輸出ヲナサシメントスルニ在リ。輸出税制ハ輸出禁止ニ比スレバ其處置ノ穩當ナルガ爲ニ尙金主義ノ盛時ニハ廣ク行ハレタリ。英國ニテハ十九世紀ノ二十年代及ビ三十年代ニ在ツテ輸出税ヲ課セラレタル物品ノ數甚ダ多ク、其税率モ亦重カリキ。石炭羊毛ノ如キ其ノ最モ顯著ナルモノトス。佛國ニテハ大革命前ノ頃ニ當リ關稅總額ノ約三分ノ一ハ輸出税ノ占ムル所タリ、之ヨリ後次第ニ減少シ一八一五年ニハ此割合ハ九歩半トナリ、一八二〇年ニハ五歩トナリ、又一八二六年ニハ一歩半トナリ終ニ六十年代ニ至ツテ廢止ニ歸セリ。現時英、佛

獨米ノ諸國ニハ輸出税ハ既ニ其跡ヲ留メズ只魯西亞以太利瑞士國ニ於テ極メテ狹隘ナル範圍ニ行ハレタルヲ見ル支那ニ於テハ茶ノ輸出ニ對シ原價四分ノ一ノ輸出税ヲ課シ「キユバ」ニ於テハ烟艸ノ輸出ニ對シ一割二分ノ輸出税ヲ課セリ是等ハ只政府ノ收入ヲ増加スルガ爲メニ之ヲ設ケタルモノニシテ工業政策ト何等ノ關係ヲ有スルコトナシ要之スルニ輸出税ハ輸入禁止ト均シク現時ニ在ツテハ之ヲ以テ保護政策ニ利用セラルモノ甚ダ稀ナリトス

輸出戻税及  
輸出獎勵  
金

(2) 輸出戻税及ビ輸出獎勵金 輸出戻税トハ輸入税ヲ課セラレタル輸入品ガ更ニ加工セラレテ輸出サル、場合ニ既ニ納付セル輸入税ヲ拂戻スヲ制ヲ云フ此制ヤ古來各國ニ行ハレタリ十九世紀ノ前半期佛國ニ於テ盛ニ行ハレタリ綿糸及綿織物ノ輸出ニ對シ棉花輸入税ヲ拂戻スノ制度ノ如キ其題著ナルモノトス輸出戻税ノ一變例トシテ輸入加工制ナルモノアリ是レ原料粗製品ニ對シ輸入ノ際加工ノ上輸出ヲナスノ條件ノ

下ニ輸入税ヲ免除スルノ制ナリ現今佛獨兩國ニ盛ンニ行ハル、ヲ見ル此制ハ之ヲ實行スルニ當リ困難少ナシトセス自由港ノ存在セル處ニ在ツテハ輸入ハ自由港ニ於テ之ヲナサシメ而シテ自由港ニ於テ加工ヲナシタル後輸出ヲナスガ故ニ監督上何等ノ支障アルコトナシト雖モ自由港ナキ處ニ在ツテハ此便宜ヲ欠グヲ以テ輸入地ノ附近ニ工場ヲ設ケ加工ヲナサシメ該工場ニハ常ニ官吏出張シテ取締ヲナスヲ例トス是レ獨逸ニ於ケル實例ナリトス此場合ニ於テ特定ノ工場以外ニテハ此輸入加工ノ特典ニ與ルコトヲ得ス從ツテ政府ノ保護公平ヲ欠クノ嫌ナシトセズ輸出獎勵金ハ政府ガ特種ノ輸出品ニ與フル所ノ恩典ニシテ之ニ依ツテ其輸出品ヲシテ外國市場ニ於ケル競争力ヲ強ムルコトヲ主眼トスルモノナリ此制タル古來其實例乏シトセズ近時獨逸政府ハ毎年二千萬「マ」クノ輸出獎勵金ヲ砂糖業者ニ與ヘタルヲ見ル

現時歐洲各國ニ於テ輸出戻税ハ廣ク行ハル、モ輸出獎勵金ハ稀ニ見ル

所ナリ。是レ實行ノ難易ニ依ツテ然ルモノナラン、蓋シ輸出戻税ハ其標準  
 ヤ明瞭ニシテ其範圍ヲ確定セルガ爲ニ之ヲ行フコト容易ナルモ、輸出獎  
 勵金ニ至ツテハ屢々濫惠ニ流ル、ノ傾アリ、且ツ一旦之ヲ行ヘバ之ヲ廢  
 スルコト甚ダ難キヲ常トス、加之ナラズ獎勵金ノ額多キニ過グルトキハ  
 輸出額ハ非常ニ増加シ一方ニ於テ財政ノ基礎ヲ危クシ、一方ニ於テハ外  
 國市場ニテ價格ノ低落ヲ來スノ憂ナシトセズ、是レ輸出獎勵金ニ關シテ  
 各國政府ガ最モ慎重ノ注意ヲナシ、容易ニ此制ヲ設ケザル所以ナリトス

## 第十二章 器械ノ應用ト勞働者ノ

### 利害

器械ノ應用ハ工業進歩ノ一大要件タルコトハ固ヨリ疑ヲ容レザル所タ  
 リ、國民經濟ノ點ヨリ觀察センカ、器械ノ應用ハ益々其範圍ヲ擴張スルノ  
 必要ナルコトハ學理ハ一ニ歸シ實例ハ之ヲ證スルニ餘アリ、然リト雖モ  
 社會問題ノ點ヨリ觀察シテ器械ノ應用ガ果シテ勞働者ニ奈何ナル影響  
 ヲ與フルカノ疑問ニ關シテハ其解決區々タリ、或ハ器械ノ應用ハ決シテ  
 勞働者ノ利益ヲ害スルモノニ非ラズ、否管ニ勞働者ノ利益ヲ害セザルノ  
 ミナラズ却ツテ勞働者ノ福利ヲ増進シ地位ヲ改良スルノ一手段タリト  
 斷定セル者アリ、或ハ器械ヲ以テ勞働者ノ敵ト認メ、器械應用ノ進歩スル  
 ニ從ツテ勞働者ノ地位ハ益々危殆ニ趣クコトヲ憂フル者アリ、二者孰レ  
 ガ是ナルカ是レ本章講究ノ目的タリ、抑モ器械ノ應用ガ勞働者ニ與フル



影響ニ就キテハ二種ノ問題ヲ區別スルノ必要アリ。一ハ器械ノ應用ト勞働者ノ需要トノ關係ニシテ一ハ器械ノ應用ト勞働者ノ賃銀トノ關係是ナリ。乞フ序ヲ追フテ之ヲ説明セン。

器械ノ應用ト勞働者ノ需要

第一 器械ノ應用ト勞働者ノ需要トノ關係  
器械ノ應用ガ勞働者ノ需要ヲ減少スルト云フハ皮相ノ見解ナリ。工業經濟ノ實情ヲ明ニセル者ハ器械ノ應用ハ却ツテ勞働者ノ需要ヲ増加スルノ傾向アルコトヲ認メザルヲ得ズ。今特種ノ工業ニ於テ新タニ器械ノ應用アリト假定センカ、一時ハ多少勞働者ノ需要ヲ減ズルノ事實アルベシ然リト雖モ永久ニ涉リテ之ヲ考フルトキハ毫モ此憂ナキナリ。蓋シ器械ノ應用サル、結果トシテ生産費ノ減少ヲ來タスハ必然ノ事ナリ。或ハ器械ノ應用ハ鉅額ノ固定資本ヲ要スルガ爲メニ生産費ヲ増加スベシトノ疑ヲ抱ク者アランモ、器械ノ應用サル、ニ從ツテ著シク生産額ヲ増加スルコトヲ得ルガ故ニ一方ニ於テ固定資本ノ増加ヲ見ルモ他方ニ於テ生

産額ノ増加アリ、之ガ結果トシテ生産費ノ總額ハ増加スルモ之ヲ生産品ノ總額ニ割當テ生産品ノ單位ニ對スル生産費ヲ算出スルトキハ多少ノ減少ヲ見ルナリ。一八九八年米國勞働局ハ此點ニ就キ各種ノ工業ニ就キ精密ナル調査ヲナシ其結果ヲ公示セリ。此調査ニ依ルトキハ多數ノ工業ニ就キ器械ノ應用ハ生産費ノ減少ヲ來タスノ事實ハ固ヨリ爭フ可ラザル所ナリ。今若シ此斷定ヲ是認センカ、生産費減少ノ結果トシテ必ラズ起ルベキ現象ハ生産品ノ價格ノ減少ナルベシ。奈何ントナレバ生産費ナルモノハ物價ノ高低ヲ定ムルノ一原因ナレバナリ。然リ而シテ價格減少ノ結果トシテ其製品ニ對スル需要ノ増加スルコトハ自然ノ趨勢ナルベシ。但シ特別ノ場合ニ於テ製品ニ對スル需要ハ自ラ一定シ、價格ノ減少スルニ關ラズ需要ハ之ニ伴ツテ増加セザルコトアルモ是レ例外ノ事實タルニ過ギズ。各種ノ工業ニ就キテ概言センカ價格ノ減少ト需要ノ増加トハ必ラズ相伴隨スベキモノタリ。製品ノ需要是ノ如クシテ増加センカ工業

主ハ之ニ伴ツテ生産ヲ増加スルハ是レ亦必然ノ結果ナリ。生産ノ増加サル、ニ從ツテ更ラニ労働者ノ需要ヲ生ズルコトハ當然ノ事タリ。要之スルニ器械ノ應用ハ生産費ノ減少ヲ來タシ生産費ノ減少ハ價格ノ減少トナリ價格ノ減少ハ製品ニ對スル需要ノ増加トナリ製品ニ對スル需要ノ増加ハ生産ノ増加トナリ生産ノ増加ハ終ニ労働者ニ對スル需要ノ増加ヲ來タスナリ。然ラバ則チ器械應用ノ爲メニ一時ハ労働者ノ需要ヲ減少スルモ永久ニハ之ヲ回復スルノミナラズ却ツテ之ヲ増加スルモノト云ハザルヲ得ズ。

今翻ツテ器械ノ應用サレタル工業ヲ離レテ此工業ニ關聯セル他種ノ工業ニ於テ労働者ニ對スル需要ノ變動ヲ見ルニ、労働者ノ爲メニ毫モ憂フベキモノナキノミナラズ寧ロ賀スベキ事情アルヲ見ル。今紡績工業ニ於テ新器械ノ應用アリト假定センニ、紡績業ガ器械應用ノ爲メニ生産ノ増加ヲナシタル結果トシテ紡績工業ノ原料タル綿花ノ生産ニ於テ又燃料

ヲ供給スル石炭礦ニ於テ其生産額ヲ増加スルノ必要ヲ生ジ、此種ノ工業ニ於ケル労働者ノ需要ハ之ニ伴ツテ増加スベキコトハ疑ヲ容レズ。且又器械工業ニ於テハ新器械ヲ製造スルガ爲メニ之ニ對シテ労働者ノ數ヲ増加セザル可ラズ。則チ器械工業ニ於ケル労働者ノ需要ハ紡績工業ニ關スル器械ノ應用ニ伴ツテ増加スルコト、ナル、加之ナラズ器械ノ應用進歩スルニ從ツテ器械ノ構造ガ益々精巧トナルハ必然ノ事ナリ。器械ノ精巧ニ進ムニ從ツテ器械ノ生命ハ次第ニ短縮セラルヘシ。器械學者ノ說ニ依レバ器械ノ精巧ニ進ムニ從ツテ其運動ハ緻密トナリ、又、リンク(器械ノ各部分)ノ面積ハ狭クナルヲ常トス。運動ノ緻密ニ趣キ、リンクノ狭小ナルニ從ツテ其破損ハ容易ナルヘシ。是レ器械ノ精巧ニ進ムニ從ツテ其生命ノ短縮セラル、所以ナリト云フ。斯ク器械ノ生命ガ短縮スルニ從ツテ新タニ器械ヲ製造スルノ必要起リ器械製作ノ業ハ次第ニ繁忙トナルベシ。器械製作業ノ繁忙ニ伴ツテ此業ニ於ケル労働者ノ需要ハ自ラ増加スル

ハ固ヨリ言ヲ俟タズ。且夫レ器械ノ應用ハ畜ニ器械工業ニ於ケル労働者ノ需要ヲ増加スルノミナラズ。器械製造ニ要スル所ノ鐵類及ビ石炭ノ消費ヲ増加スルガ爲メニ製鐵業及ビ石炭礦ニ於テモ亦其事業ヲ擴張セザル可ラズ。從ツテ此種ノ工業ニ備使セル労働者ノ數ヲ増加セザル可ラザルノ結果ヲ生ズヘシ是等ノ事情ニ徴スルトキハ器械ノ應用ハ決シテ労働者ノ需要ヲ減少スルモノニ非ラズ。夫ノ社會主義者ノ主張スル所ノ如キハ杞憂タルニ過ギザルナリ。

余ハ次ニ各國ノ實例ニ徴シテ之ヲ證明セン。

米國ハ工業ニ於ケル器械ノ應用ニ關シテハ其範圍ノ廣大ナルト其進歩ノ顯著ナルトヲ以テ夙ニ世界ニ鳴ル處ナリ。第十一回國勢調査報告ニ依リ、八種ノ工業ニ就キ既往二十年間原力數及ビ職工數ノ増加ノ狀況ヲ按ズルニ左ノ如シ。

年	職工數	原力數(馬力)	一八七〇年		一八八〇年		一八九〇年	
			職工數	原力數(馬力)	職工數	原力數(馬力)	職工數	原力數(馬力)
綿織物業	職工數	一六,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
製粉業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
鋼鐵業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
硝業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
製紙業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
糖業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
橡物業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
橡物業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
橡物業	職工數	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	
	原力數(馬力)	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇	

本表ニ依ルトキハ此年間ニ於ケル職工數ノ増加率ハ原力數ノ増加率ニ及バザルコト遠シト雖モ、原力數ノ増加ニ伴ツテ職工數ハ多少ノ増加ヲ

ナセルノ事實ハ明カニ之ヲ認ムルコトヲ得ベシ。則チ器械ノ應用ハ労働者ノ需要ヲ減少スルト云フコトヲ得ザルヤ固ヨリ言ヲ俟クズ。英國ノ工業ハ十九世紀ニ於テ偉大ナル進歩ヲナセリ。之ニ應用サレタル器械ノ進歩ハ實ニ驚クベキモノアリ。今若シ器械ノ應用ハ労働者ノ需要ヲ減少スルトノ假定ヲシテ眞ナラシメンカ、労働者ノ階級ニ於テ失業労働者ハ前後相踵イデ生ジ、貧民ノ増加ハ殆ンド底止スルヲ知ラザルコト夫ノ「ザモンデー」ノ豫想スル所ノ如クナルベシ。今前世紀ノ後半期ニ於ケル英國貧民統計ヲ按ズルニ左ノ如シ

年次	人口ニ對スル百分比例
一八五〇年	五七
一八五五年	四八
一八六〇年	四三
一八六五年	四六
一八七〇年	四七

一八七五年	三四
一八八〇年	三四
一八八五年	二六
一八九〇年	二五
一八九五年	二六
一八九九年	二四

〔備考〕 本表中一八八〇年迄ハ英國蘇格蘭ニ就イテノ調査ニシテ一八八五年以後ハ全國ニ就イテ調査シタルモノトス

本表ノ示ス所ニ依レバ英國貧民數ハ五十年以後漸次減少シ現今ニ至ツテハ殆ンド半數トナレリ。此事實ニ關シテハ諸般ノ事情之ガ原因タルモノアラシ。然レドモ器械ノ應用カ労働者ヲ驅逐スルノ力ナキコトハ之ニ由ツテ知ルコトヲ得ベシ

第二 器械ノ應用ガ労働者ノ賃銀ニ與フル影響  
器械ノ應用ハ労働者ノ賃銀ヲ騰貴セシムルノ原因タルコトハ學理ニ照

器械應用ト  
労働者ノ賃

ラシ實例ニ徴シ争フ可ラサルコト、ス、抑モ賃銀ノ昂低ヲ定ムル所ノ事情タル一ニシテ足ラズ、或ハ消費者購買力ノ増減ノ如キ、或ハ労働者ノ生活費ノ多少ノ如キ、或ハ労働者ト資本家トノ間ニ存セル勢力ノ消長ノ如キ悉ク賃銀ノ昂低ニ密接ノ關係ヲ有セルモノナリ。殊ニ労働者ノ生産力ノ如キハ右述ブル所ノ各種ノ事情ト與ニ賃銀ノ昂低ヲ定ムル一大原因タルヲ失ハズ、蓋シ勞力ハ交換價格ヲ有セル一種ノ商品ナルモ勞力其物ハ元來何等ノ價格ヲ有セズシテ、只生産ノ方法トナリテ始メテ價格ヲ有スル場合多シ。是故ニ多ク生産ヲナシ得ル勞力ハ少ナク生産ヲナシ得ル勞力ヨリモ其價格ノ高キコトハ言フ俟タザル所ナリトス。然リ而シテ労働者ノ生産ノ多少ニ關シテハ技術的能力ノ多少、勤勉ノ程度等ノ如キ内界ノ事情ハ之ヲ定ムルノ原因タルト同時ニ労働者ノ從事セル業務ニ於ケル器械應用ノ状態ノ如キ外界ノ事情モ是レ亦主要ナル原因タリ換言スレバ精巧ナル器械ヲ使用セル労働者ハ粗惡ナル器械ヲ使用セル労働

者ニ比シテ多額ノ生産力ヲ有セルモノトス。然ラバ即チ器械ノ應用ハ労働者ノ生産力ヲ増加シ、從ツテ其ノ受クル所ノ賃銀ヲ増加スルノ結果ヲ生ズルコトヲ認メザルヲ得ズ。

世間尙ホ賃銀基金説ヲ奉ズル者アリ。此説ニ依ルトキハ賃銀ハ賃銀基金ノ總額ト労働者ノ總數トノ比例ニ依ツテ定マルモノナリ。而シテ賃銀基金ハ流通資本ノ一部分ナリ。然ルニ器械ノ應用ハ流通資本ヲ減少シテ固定資本ヲ増加シ「マークス」ノ所謂資本ニ關スル一種ノ變形作用ヲ惹起スヲ免レズ。從ツテ賃銀基金ノ總額ヲ減少シ賃銀トシテ労働者ニ分配スベキ資本額ヲ減少スルノ結果ヲ生ズルコト、ナルベシ。此場合ニ於テ一方ニ於テ労働者ノ總數ニシテ依然舊ノ如クナランカ、一方ニ於テ賃銀基金ノ減少アリ各労働者ノ受クベキ賃銀ハ自ラ之ニ應ジテ減少セザルヲ得ズ余ノ見ル所ニ依レバ此結論タル賃銀ハ賃銀基金ト労働者ノ總數ノ比例ニ依ツテ定マルト云フ賃銀基金説ノ前提ニ基キテ起ル所ノモノタリ、

然リト雖モ此前提ノ誤謬ナルコトハ殆ンド學者ノ定論トナリ今更ラ說明ヲ要セザル所ナルモ茲ニ其概要ヲ擧ゲンカ凡ソ貸銀ノ出處ハ生産者ノ資本ニ非ラズシテ消費者ノ資産ニ在リ生産者ガ労働者ニ對シテ貸銀ヲ支拂フハ只消費者ニ代ツテ一時貸銀ノ繰替ヲナスニ過ギズ貸銀ニ關スル終極ノ支拂者ハ消費者ニ外ナラズ此事實ヲ明ニスルニハ原始時代ニ於ケル貸銀ノ性質ヲ見ルニ如クハナシ此時代ニハ労働者ノ外別ニ生産者ナル者ナク労働者ハ自然物ヲ採収シ之ニ勞力ヲ加ヘ價格ヲ増加シ消費者ニ賣渡スヲ常トス此場合ニ於ケル貸銀ハ勞力ノ爲メニ増加シタル價格ニシテ此價格タル消費者ガ労働者ニ對シテ直接ニ支拂フ所ノモノタリ現今ノ經濟組織ニ於テ生産者ナル特別ノ階級アリテ労働者ト消費者トノ間ニ立テルモ貸銀ノ性質ハ全タク之ニ異ナル所ナシ蓋シ生産者ガ労働者ニ對シテ貸銀ヲ支拂フニ當リ消費者ガ生産者ニ對シテ物品ノ代價トシテ多額ノ支拂ヲナシタル場合ニハ多額ノ貸銀ヲ支拂フコト

ヲ否マザルベク又消費者ノ支拂フ所少額ナルトキハ之ニ準ジテ少額ノ貸銀ヲ労働者ニ支拂フナルベシ是レ何ニ由ツテ然ルカ生産者ハ自ラ貸銀ヲ負擔スルニ非ラズシテ之ヲ消費者ニ轉移スルコトヲ知レバナリ由是觀之レバ貸銀ノ負擔者ハ生産者ニ非ラズシテ消費者ナルコトハ固ヨリ疑ヲ容レズ然ルニ貸銀基金說ガ貸銀基金ヲ以テ貸銀ノ出處トナシ生産者ヲ以テ貸銀ノ負擔者トナスハ洵ニ誤謬ノ見解ト云ハザルヲ得ズ貸銀基金說ヲ奉ズル者ガ器械ノ應用ト労働者ノ貸銀ノ關係ニ就イテ一種ノ謬見ヲ抱ケルハ亦怪ムニ足ラズ器械ノ應用ガ貸銀増加ノ一原因タルコトハ當ニ學理上ノ論結タルノミナラズ近時歐洲米各國ニ於テ貸銀ガ漸次騰貴スルノ傾向ヲ示セルノ事實ヲ見テモ亦之ヲ知ラン

英國紡績職工ノ貸銀ニ關シ「エリソン」ノ調査ニ依レバ左ノ如シ

紡績

綿織物

一八一九年乃至二一年	二六、一三 <sup>セ</sup>	二〇、一八 <sup>セ</sup>	二六〇
一八二九年乃至三一年	二七、六	一九、八	
一八四四年乃至四六年	二八、一二	二四、一〇	
一八五九年乃至六一年	三二、一〇	三〇、一五	
一八八〇年乃至八二年	四四、四	三九、〇	

(備考) 本表ノ貸銀額ハ一ヶ年ノ貸銀額ナリ

「ボレー」ハ英國ニ於ル五種ノ工業即チ建築、綿紡績、毛紡織、鐵業、石業ニ就キ一八六〇年以後貸銀ノ調査ヲナセリ。今該年ノ貸銀額ヲ一〇〇トシテ其以後ノ貸銀ノ比較左ノ如シ

年次	貨幣ニ依リ計算シタル貸銀額	實物ヲ以テ計算シタル貸銀額
一八六〇年	一〇〇	一〇〇
一八七一年乃至七三年	一四八	一二三
一八九一年	一四八	一五七

米國ニ於ケル貸銀ノ狀況ニ關シテ該國上院議員「アルドリッチ」ガ廿二種

ノ工業ニ就キ、一八六〇年以後ノ貸銀ノ昂低ヲ調査シタル所ニ依レバ、同年ノ貸銀ヲ一〇〇トスレバ一八九一年ニハ一三七乃至二二四ノ割合トナル之ガ平均ハ一六〇ナリト云フ

佛國ニ於ケル貸銀ノ狀況ニ就キテハ該國勞働局調査ノ結果左ノ如シ

各種男工平均賃銀	各種女工平均賃銀	炭礦々夫賃銀
一八四〇年—四五年	二、〇四	二、一〇
一八五三年—五七年	—	二、三五
一八六〇年—六五年	二七、六	二、六〇
一八七四年	—	三、五六
一八九一年—九三年	三、九〇	四、二〇

(備考) 本表ノ職工賃銀ハ日給ニシテ而シテ巴里以外ノ各縣ニ於ケルモノトス

右列記セル所ノ賃銀統計ニ關シ、或ハ此年間ニ於ケル賃銀ノ騰貴ハ職工消費物ノ價格騰貴ノ結果ト認メ賃銀ハ名義上騰貴シタルモ實物上尠モ騰貴セザルカヲ疑フ者アリ。然レドモ先キニ掲ゲタル「ボレー」氏ノ調査

ハ明カニ此臆測ヲ否定セリ。余ハ更ラニ此事ニ關シテ學者ノ説ヲ掲ゲン「レヲン、レゾイ」曰ク一八五一年乃至一八八四年ノ間家賃ハ大都市ニ在ツテハ騰貴セリト雖モ食品、衣服等ノ必需品ノ價格ハ漸次下落セルヲ見ル。去レバ職工ノ生活費ハ増加セリト云フヲ得ズト

一八九三年英國勞働調査委員會ニ於テ「ギョフエン」ノ述ブル所ニ依レバ今一八四二年ヲ起點トシテ觀察センニ此年ヨリ一八七二年ノ頃マデハ物價ハ一般ニ騰貴ノ傾向ヲ示セリ、而シテ此年間ニ於テ賃銀ハ著シク騰貴セルヲ見ル一八七二年以後物價ハ漸次下落セリ只特別ノ場合ニ於テ依然舊ノ如キモノアリシノミ。然ルニ賃銀ニ至ツテハ決シテ低下セルコトナク却ツテ益、騰貴セリト云フ

「シャトウイク」ノ調査ニ係ル職工家族ノ毎週食費統計左ノ如シ但シ本表ハ夫婦小兒三人ノ家族ヲ標準トシタルモノトス

一八三九年

二四、志九片

一八四九年

二一、五、五

一八五九年

二〇、六、五

一八八七年

一八、五、五

由是觀之レバ前世紀ノ後半期ニ於ケル賃銀騰貴ノ事實ハ顯然掩フ可ラザルモノアリト云フベシ。此事實ノ原因タル種々アルベシ。國民消費力ノ増加ト云ヒ職工組合ノ發達ト云ヒ固ヨリ之ガ原因タランモ器械應用ノ進歩發達ノ爲メニ勞働者ノ生産力ガ著シク増加シタルコトモ亦其一ニ數ヘザル可ラズ。ルヅ「ジュール」氏ハ「米國勞働者」ト題スル著書ニ於テ米國ニ於ケル賃銀騰貴ノ趨勢ヲ説明シク曰ク工業ノ進歩ハ賃銀ノ騰貴ヲ促ガスハ各國ノ恒例ナリ。是レ器械ノ應用、工場組織ノ擴張、國富ノ増殖ナル三大原因ニ基クナリ。又職工組合ノ發達モ之ヲ數ヘザル可ラズト是等諸氏ノ斷定ニ依テ考フルモ器械ノ應用ハ勞働者ノ賃銀ヲ増加スルノ結果ヲ生ズルコト疑ヲ容レザルナリ



### 第十三章 工場法

工場法ハ社會問題上ヨリ工業經濟ヲ研究スルニ當リ極メテ重要ナル關係ヲ有セルモノトス願フニ工場法ハ各種社會改良策ノ先驅ヲナシ殆ンド之ガ基礎ヲナセリ。現今各國ノ社會改良策ヲ按ズルニ國情ノ異ナルモノアリ時勢ノ均シカラザルモノアルガ爲メニ多少其趣ヲ異ニスルニ關ラズ、工場法ヲ存セザル處ハ之ナキガ如シ。社會改良策ニ於ケル工場法ノ地位ハ由ツテ以テ之ヲ推スニ難カラザルベシ

社會改良策  
ニ於ケル工  
場法ノ地位

工場法ノ目的トスル所ハ他チシ勞働者ガ工場生活ノ爲メニ被ルベキ害惡ヲ除却スルニ在リ。工場生活ノ害惡ハ其種類一ニシテ足ラズ。今之ガ原因ニ就キ分類ヲナサンカ、勞働條件ヨリ起ルモノト工場設備ヨリ生ズルモノトノ二種アリ。例ヘバ勞働時間ノ過長ナルコト、徹夜業ヲナスコト等ノ爲メニ起ル所ノ害惡ハ前者ニ屬シ、危險ナル器械ヲ使用シ或ハ有害ナ

ル物品ヲ取扱フガ爲メニ生ズル所ノ害惡、所謂業務災厄ハ後者ニ屬セリ又工場生活ノ害惡ヲ其結果ニ依ツテ區別センカ、或ハ衛生上ノ害タルモノアリ或ハ教育上ノ害タルモノアリ或ハ風教上ノ害タルモノアリ或ハ經濟上ノ害タルモノアリ、其種類極メテ多ク且ツ其ノ及ボスベキ範圍ハ廣大ナリトス。抑モ工場生活ノ害惡ハ工業ノ發達ニ伴フ必然ノ結果ニシテ、其事實ノ最モ顯著ナルハ工業革新ノ時代即チ工業組織ガ自家製造ヨリ工場製造ニ移リタル時代ニ在リ。是故ニ是等害惡ノ實狀ヲ詳ニセント欲セバ重要工業國ニ就キ工業革新ノ時代ニ遡リ勞働者ノ状態ヲ見ルニ如クハナシ。余ハ茲ニ拙著「歐洲勞働問題ノ大勢」ヨリ其大要ヲ鈔録セン

十九世紀ノ前半期ハ歐洲ノ先進國ニ於ケル工業革新ノ時代ナリ、而シテ其先驅ヲナセルモノヲ英國トナス。殊ニ該國紡績工場ノ慘狀ハ實ニ社會史上ノ一大現象トシテ今ニ至ルマデ世人ノ記憶ニ存スルモノタリ。一八三二年工場調査會ノ報告ニ依レバ當時該國ノ紡績職工ニハ九歳以下ノ

者甚ダ多ク七歳以下ノ者モ亦少ナシトセズ、又其ノ勞働時間ハ十六時間ヲ以テ通例トセリ。往々晝夜交代ノ執業方法ヲ執ル所アルモ夜業ノ組ニ屬セル職工ニシテ欠員アルトキハ晝業ノ組ニ屬セル者ヲ以テ之ヲ補フガ故ニ其勞働時間ハ晝夜ヲ通ジ二十四時間トナルコト屢々之アリ

「ロード、シヤッフツベリ」ハ英國工場法ノ首唱者トシテ其名聲ハ不朽ニ傳ハリ、氏ノ言フ所ハ以テ有力ナル證言タルヲ得ン。一八七三年氏ノ上院ニ於ケル演說ニ曰ク本世紀ノ初期ニ於テ我國紡績工場ニ在ル幼者ノ状態ハ洵ニ憐ムニ堪ヘタリ。余ハ屢々工場ノ前ニ佇立シ工場ヲ出入セル所ノ幼者ヲ見ルニ何レモ顔容蒼白ニシテ肉落チ骨立チ累々然タル者比々皆然ラザルハナシ。殊ニ「ブラットフォード」市ニ於テハ最モ已甚シキモノアリ、余曾ツテ此地ニ赴キシトキ友人某數多ノ幼年職工ヲ集メテ余ニ示セリ、余之ヲ見ルニ其多數ハ畸形ニシテ實ニ一見人ヲシテ顔ヲ蔽ハシメタリト

「エイキン」ノ記録ニ曰ク工場ノ慘狀世ニ公ニセララル、ヤ附近地方ノ者ハ其子女ヲ職工タラシムルコトヲ好マズ、從ツテ職工ノ供給欠乏シタリケレバ終ニ貧民院ノ子女ヲ傭入ル、者多カリキ、其手續ヲ見ルニ貧民院ノ管理者ハ工場主ノ求ニ應ジテ若干ノ貧兒ヲ撰拔シテ之ヲ遠方ノ工場ニ送レリ。工場主ハ一々之ガ體質ヲ驗査シ合格者ハ之ヲ工場ニ止メ徒弟見習ノ名義ヲ以テ使役シ給スルニ弊衣粗食ヲ以テシ毫モ賃銀ヲ與ヘズ、而シテ之ニ課スルニ過度ノ勞働ヲ以テシ若シ之ニ應ゼザルトキハ加フルニ鞭撻ヲ以テシ呵責慮遇到ラザルナシ。彼等ニシテ之ガ苦痛ニ堪ヘズ逃亡ヲ企ツル者アルトキハ之ヲ捕ヘ鐵鎖ヲ以テ其足ヲ繋ギ之ヲ使役スルコト恰モ囚徒ノ如シ。去レバ是等幼者ノ中往々自殺シテ以テ工場ノ苦楚ヲ免ル、者少カラズト

佛國ニ於テモ亦工業革進ノ時代ニ際シ工場ノ慘狀殆ンド英吉利ニ讓ラザルモノアリ。一八三〇年博士「グヒラメ」ハ「巴里倫理學政治學協會」ノ囑託

ヲ受ケテ職工事情調査ノ爲メニ各地ヲ周遊シ一篇ノ報告書ヲ製シタリ。此報告書ニ於テ氏ハ先ヅ労働時間ノ過長ナルコトヲ述ベテ曰ク紡績、毛織物工場ニ於ケル労働時間ハ十四五時間ヲ通例トセリ。此労働時間ハ獨リ成年職工ニノミ之ヲ課スルニ非ラズ兒童モ亦此長時間ノ労働ヲナサル可ラス、而シテ此兒童ニハ往々六歳内外ノ者アリ又八歳以下ノ職工ハ其數少ナシトセズ、ミルハウス工業組合ノ報告ニ依レバ各地ノ紡績工場ニ於テ労働時間ヲ十七時間ト定メタルモノ多キヲ見ルト更ニ獨逸ニ就キテ之ヲ觀察センニ一八二八年普國徴兵検査官「フォン、ホルン」ハ政府ニ報告シテ曰ク「ライン」地方ニ於テ工場労働ノ爲メニ多數人民ノ體質ハ著シク毀損セラレ兵役合格者ハ到底數ヲ充タスコト能ハザルニ至レリト。當時「ライン」地方ハ獨逸工業ノ中心タリ、此地方人民ニシテ此狀況ニ陥ルヲ見バ獨逸ニ於ケル工場ノ慘狀モ亦推シテ知ルベシ右述ブル所ノ害惡ハ主トシテ労働條件ヨリ起リシモノタリ、更ニ翻ツテ

工場設備ヨリ生ズル害惡即チ所謂業務災厄ノ狀況ヲ觀察センニ憾ムラクハ工場革新時代ニ於ケル此種ノ資料ナシ。近時獨逸國ニ行ハル、所ノ災厄保險制ノ結果トシテ調査セラレタル統計ヲ見ルニ左ノ事實アリ

被保險者數	一八八七年	一八九二年	一八九六年
業務災厄ニ罹リタル者ノ數及ヒ被保險者數ニ對スル千分比例	三、八六一、五六〇	五、〇七八、一三三	五、四〇九、二二八
未詳	未詳	一六五、〇〇三	二〇五、〇一九
制規ノ賠償ヲ得タル者ノ數及ヒ被保險者數ニ對スル千分比例	一五、九七〇	二八、六一九	三三、七二八
(四、一三三)	(五、六四)	(六、二四)	(六、二四)
死 亡 者	二、九五六	三、二八二	三、六四四
賠償ヲ得タル者	二、八二七	一、五〇七	七八〇
全部 不具者	八、二二六	一八、〇四九	一九、三二二
一部 不具者	一、九七一	五、七八一	九、九九二
一時休業者(十三週以上)			

(備考) 獨逸災厄保險法ニ依レハ業務災厄ニ罹リタル者ニ就キ自己ノ惡慮及ヒ重大ナル過失ニ基ケル者ニ對シテハ賠償ヲナスコトナシ且又制規ノ賠償ヲ受クヘキ者ト雖モ十三週以下ノ休業ノ場合ハ之ヲ疾病保險ニ讓ルコト、セリ。此

事實ヲ參酌シテ本表ヲ見ルヲ要ス

抑モ獨逸國ハ危害豫防ノ方法最モ備ハレルヲ以テ鳴ル處ナリ之ニ關シテハ工場法ニ於テ詳細ナル規定ヲ存スルノミナラズ災厄保險法ハ工場主ノ同業組合ヲシテ一定ノ準則ヲ設ケテ危害ノ豫防ヲ圖ラシムルナリ然ルニ本表示ス所ニ依レバ獨逸ニ於テスラ業務災厄ノ爲メニ年々三千万内外ノ死亡者ヲ出ダシ又約二萬ノ不具者ヲ生ズルノ事實ヲ見バ工場監督ノ制度ガ存在セザル處ニ在ツテ多數ノ職工ガ工場生活ノ犠牲トナルコトハ固ヨリ怪ムニ足ラザルナリ

工場生活ノ害惡ヤ其ノ顯著ナルコト是ノ如シ苟モ社會問題ノ觀察點ヨリ工業經濟ヲ研究スル者豈之ヲ忽諸ニ附スベケンヤ願フニ社會改良ノ理想ヲ達セント欲セバ先ヅ職工ノ階級ヲシテ衛生ニ教育ニ風教ニ一般國民ト同一ノ程度ニ立タシメザル可ラズ而シテ後各種ノ畫策ヲ施シ其地位生計ヲ改良進歩セシメザル可ラズ是ノ如クシテ始メテ社會問題ノ

解釋期シテ俟ツヘキナリ然ルニ今若シ多數ノ職工ガ工場生活ノ爲メニ其身心ノ健全ヲ阻害サレ年壯ニシテ既ニ其勞働力ヲ失ヒ相率キテ貧民ノ群ニ陷ル者歳ヲ追フテ増加スルコトアラシカ斯問題ノ前途ハ實ニ寒心ニ堪ヘザルモノアラン加之ナラズ幼者ニ在ツテハ其發育ヤ不充分ニシテ且ツ國民教育ノ恩典ニ浴スルコトヲ得ズ婦女ニ在ツテハ雷ニ其生殖ノ機能ヲ減ズルノミナラス家庭ノ注意モ之ヲ抛ツテ嬰兒ノ撫育亦之ヲナスニ由ナケン果シテ然ラバ奈何ンゾ將來有爲ノ職工ヲ得ルヲ望マシヤ是ノ如クシテ養成サレ是ノ如クシテ生活シタル勞働者ニ對シテ或ハ職工組合ヲ起シ或ハ勞働保險ノ制ヲ設ケテ其地位ヲ改良セシメントスルハ抑モ難イ哉工場法ノ必要ハ於是乎生ゼリ工場法ガ各種社會改良策ノ基礎ヲナスト云フモノ豈偶然ナランヤ

余ハ之ヨリ進ンデ各國工場法ノ内容ニ就キ其立法ノ理由及ビ實例ヲ説明セシ

第二 職工ノ最低年齢

各國工場法ニ於テ職工ノ最低年齢ヲ定メ此年齢以下ノ者ニ對シテハ工場勞働ヲ禁止スルヲ常トス。是レ國民教育及ビ國民衛生ノ必要ニ基クモノニ外ナラズ。今若シ此規定ナシトセンカ、學齡兒童ニシテ父兄ノ爲メニ強ヒラレ職工トナル者多カルベク、國民教育ハ遂ニ其效果ヲ收ムルニ由ナカルベシ。夫ノ強迫教育制ヲ採用セル國ニ在ツテ學齡ノ最終期ヲ以テ此最低年齢トナセルカ如キハ國民教育普及ノ目的ヲ達スルガ爲メ當然ノ措置ナリト云フベシ。又幼者ハ衛生上最モ注意ヲ要スルモノタルニ關ラズ其發育未ダ充分ナラザル時ニ工場生活ヲ爲サシメンカ其勞働條件ハ奈何ニ寛大ナルモ到底健全ナル發達ヲナス能ハザルベク、而シテ此種人兒童ニシテ其數ヲ加フルニ至ラバ當ニ國民ノ生産力ヲ減ズルノミナラズ延ヒテ國家ノ存在ヲ危クスルノ憂モ亦之アルヲ免レザルヘシ。今職工ノ最低年齢ニ關スル各國ノ實例ヲ按ズルニ、最モ高キハ十四歳ニ

シテ最モ低キハ九歳ナリ。抑モ最低年齢ヲ定ムルニ就キテハ國民教育ノ制度ヲ參酌シ學齡ノ規定ニ準據スルノ必要アルト同時ニ、其國ノ風土、人情ニ鑑ミ兒童發育ノ遲速ヲ考量セザル可ラズ。一八九〇年伯林ニテ開カレタル列國工場法會議ニ於テ以太利ノ委員某氏ガ之ニ關シテ述べタル所ノモノハ以テ參考トスルニ足ラン。曰ク最低年齢ニ就キ畫一ニ國際的規定ヲ設クルハ非ナリ、我國ノ如キハ氣候、風土ノ關係ニ於テ兒童ノ發育ヲ速カナラシムル事情存セリ。此點ニ就キ我國ハ他ノ歐洲各國ト大ニ其趣ヲ異ニセルニ關ラズ同一ノ最低年齢ヲ以テ與ニ之ヲ律セントスルハ不當ノ事タルヲ免レヌト

余ハ茲ニ歐洲各國工場法ニ就キ最低年齢ニ關スルモノヲ鈔録セン

英 吉 利 一一  
佛 蘭 西 一二  
編 述 一三

以	太	利	九
瑞	馬	典	一三
那	威	亞	一三
露	西	亞	一〇
西	牙	利	一三
匈	牙	利	一三
奧	太	利	一三
瑞	士	士	一四
白	耳	蘭	一三
和	蘭		一三

職工ノ分類

第二 職工ノ分類

最低年齢ノ規定ハ右述ブル所ノ如シ然リ而シテ此年齢以上ノ職工ガ勞

第一種工業  
第二種工業

働ヲナスニ當リ工場法ヲシテ完全ニ且ツ有效ニ職工保護ノ目的ヲ達セシメント欲セバ必ラズヤ其長幼及ビ男女ノ區別ニ從ツテ自ラ保護ノ程度ヲ異ニセザル可ラズ即チ幼者ニ對シテハ長者ニ對スルヨリモ幾分カ其保護ヲ厚ウシ又婦女ニ對シテハ男子ニ對スルヨリモ多少慎重ノ注意ヲナサザル可ラズ蓋シ職工ニ對スル保護ノ程度ヲ定ムルニハ先ヅ職工ガ有セル自衛力ノ強弱即チ自由意志ヲ遂行スル能力ノ強弱ヲ明ニスルヲ要ス而シテ是等ノ事情ハ長幼男女ノ區別ニ依ツテ大ニ其趣ヲ異ニスルヲ見ル各國工場法ガ此區別ニ基キテ職工ノ分類ヲナセルハ當然ノ處置ナリト云フベシ

歐洲各國ノ工場法ニ於ケル職工ノ分類方法ニハ概ネ二種ノ區別アリ一ハ職工ヲ幼年工、少年工、成年女工、成年男工ノ四種ニ分テルモノニシテ一ハ職工ヲ幼少工、成年女工、成年男工ノ三種ニ分テルモノナリ多クノ場合ニ於テ幼少年者ニ就キテハ男女ノ區別ヲナサズ之ニ施スニ同一ノ保護

ヲ以テシ、而シテ一定ノ年齢以上ノ者ニ就キ始メテ男女ヲ分チ保護ノ程  
度ヲ異ニスルヲ常トス

第一種ノ分類方法ヲ採用セル各國ノ實例左ノ如シ

國名	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
英吉利	至十歲	至十四歲	十八歲以上	十八歲以上
佛蘭西	至十二歲	至十三歲	十八歲以上	十八歲以上
獨逸	至十二歲	至十四歲	十六歲以上	十六歲以上
以太利	至十二歲	至十四歲	十五歲以上	十五歲以上
瑞馬	至十二歲	至十四歲	十八歲以上	十八歲以上
那威	至十二歲	至十四歲	十八歲以上	十八歲以上
露西亞	至十二歲	至十四歲	十七歲以上	十七歲以上
西班牙	至十二歲	至十四歲	十六歲以上	十五歲以上

匈牙利 至十四歲 至十六歲 十六歲以上 十六歲以上

又第二種ノ分類方法ヲ採用セル各國ノ實例左ノ如シ

國名	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
瑞士	至八歲	至十四歲	十八歲以上	十八歲以上
和蘭	至十歲	至十二歲	十六歲以上	十六歲以上
白耳	至十歲	至十二歲	二十一歲以上	十六歲以上
奧太利	第一種工業 至十二歲	第二種工業 至十四歲	十四歲以上	十六歲以上

勞働時間ノ制限

第三 勞働時間ノ制限

勞働時間ノ制限ハ各國工場法ニ於テ其重點タル所ノモノトス。願フニ過長ノ勞働時間ハ業務ノ奈何ニ關ラズ衛生上有害ナルコトハ固ヨリ言ヲ俟タズ工場ノ勞働ニ在ツテハ此事實ヤ更ラニ顯著ナリトス。密閉セル室内ニ於テ空氣ハ濕潤シ塵埃ハ飛散シ機械ノ動響ハ驚々トシテ堪ユ可ラ

ズ職工ハ其内ニ在ツテ監督者ノ督勵ニ促カサレ利慾ノ念ニ驅ラレ知ラズ識ラズ過長ノ勞働ヲナシ其健康ヲ傷クルニ至ルコトハ彼等ノ常態ナリトス。若夫レ成年男工ニ在ツテハ自由ノ意志ニ依リ外部ノ強制ニ抵抗スルコトヲ得ンモ、幼少者、婦女ニ在ツテハ此抵抗力ヲ欠ケリ、過長勞働ノ弊害最モ憂フベキモノアルハ亦已ムヲ得ザルコト、云フベシ。抑モ此種ノ職工ハ衛生上殊ニ注意ヲ要スル者タルノミナラズ、幼少者ハ教育ヲ完了セザル可ラズ、婦女ハ一家ヲ整理スルノ責任ヲ負ヘリ、然ルニ彼等ニ課スルニ過長ノ勞働ヲ以テスルハ社會上ノ弊害ナリト云ハザルヲ得ズ。勞働時間制限ノ必要於是乎起レリ。

勞働時間ノ制限ニ就キテ各國工場法ハ職工ノ種類ニ依ツテ其程度ヲ異ニセリ。幼年工ニ對シテ之ヲ制限スルハ各國其揆ヲ一ニセリ。少年工ニ對シテハ以太利ヲ除クノ外悉ク相當ノ制限ヲ附セリ。成年女工ニ對シテハ制限ヲナセル所ト然ラザル所ト殆ンド相半バスルヲ見ル。而シテ成年男

工ニ對シテハ瑞士、埃太利、露西亞、佛蘭西ヲ除クノ外ハ皆無制限ナリトス。勞働時間制限ノ方法ニ關シ、各國工場法ニ於テ職工種類ノ奈何ニ關ラズ同一ノ制限ヲナセルモノト然ラザルモノトノ區別アリ。佛蘭西、以太利、瑞士ハ前者ノ方法ヲ採レルモ、其他ノ諸國ハ後者ノ方法ヲ採リ、職工ノ種類ニ依ツテ制限ノ程度ヲ異ニセリ。例ヘバ幼年工ニ對シテハ六時間トシ、少年工、成年女工ニ對シテハ十時間トシ、成年男工ニ對シテハ十二時間トナスガ如シ。後者ノ方法ハ工場經營ノ爲メ工場主ノ常ニ不便ヲ感ズル所タリ。蓋シ工場ノ勞働ハ必ラズシモ職工ノ種類ニ依ツテ分離シ得ベキモノニ非ラズ、各種ノ職工ガ同一ノ執業場ニ於テ共同ニ勞働ヲナセル場合ニ一種ノ職工ハ已ニ退場セル爲メニ他種ノ職工ハ其勞働ヲ繼續スル能ハザルコトナシトセズ。工場主ニシテ之ニ備ヘント欲セハ豫メ補充ノ職工ヲ置カザル可ラズ、而シテ二三時間ノ補充勞働ノ爲メニ殊ニ職工ヲ備入ル、ハ殆ンドナシ得ザルコトナリトス。夫ノ英國工場法ニ於テ幼年工



ニ對シテ半日制若シクハ隔日制ヲ採ラシメ此種ノ職工ヲシテ半日交代  
 或ハ隔日交代ヲナサシムルハ此欠點ヲ補フモノタリ近時ノ立法ニ於テ  
 次第ニ前者ノ方法ニ依ツテ勞働時間ヲ制限スルニ至リシハ洵ニ嘉ミス  
 ベキコト、云フベシ

休憩時間ノ規定ハ勞働時間ノ制限ト密着ノ關係ヲ有シ職工保護ノ爲メ  
 ニ必要ナルコトタリ各國ノ法律ニ於テ勞働時間ノ制限アル場合ニハ必  
 ラズ休憩時間ノ準則ヲ設クルヲ常トス然リ而シテ休憩時間ノ規定ニハ  
 之ヲ成規ノ勞働時間中ニ合算シタルモノト之ヲ除外シタルモノトノ二  
 種アリ例ヘハ英國ニ於テ少年工ノ勞働時間ヲ十二時間トナシ其中ニ就  
 キ二時間ヲ割キテ之ヲ休憩時間トシ十時間ヲ以テ正味ノ勞働時間トナ  
 シタルハ前者ノ場合ニ屬セリ佛蘭西ニ於テ各種ノ職工ニ對スル勞働時  
 間ヲ十時間トシ一時間ノ休憩時間ヲ以テ一日ノ勞働ヲ中斷シ正味ノ勞  
 働時間ハ依然十時間ナルハ後者ノ場合ニ屬セリ此二種ノ方法ニ依リ工

場監督ノ實行上難易ノ區別ヲ生ズルハ言ヲ俟タズ

余ハ茲ニ各國ニ於ケル勞働時間ノ制限ニ關スル實例ヲ掲ゲン

英吉利	佛蘭西	獨逸	伊太利	瑞馬	瑞典	那蘭	露西亞
半日制(六時間) 或ハ隔日制(十二時間) 休憩一時間合算 幼 年 工	十時間 休憩一時間除外 幼 年 工	六時間 休憩三十分合算 少 年 工	六時間 休憩一時間除外 成 年 女 工	六時間 休憩三十分合算 成 年 男 工	六時間 休憩三十分合算 無 制 限	六時間 休憩三十分合算 無 制 限	八時間 休憩一時間除外 同 上
十二時間 休憩二時間(紡織工) 或ハ隔日制(十二時間) 休憩一時間(紡織工) 以外工場合算 同 上	同 上 休憩一時間 同 上	十時間 休憩二時間合算 無 制 限	無 制 限 無 制 限 無 制 限	十二時間 休憩二時間合算 無 制 限	十時間 休憩二時間合算 無 制 限	十時間 休憩一時間合算 無 制 限	十時間 休憩一時間除外 同 上
無 制 限 但シ前三種ノ職工ト與 ニ勞働スル場合ニハ凡 ソ同一ノ制限ヲ受ク	同 上 休憩一時間 同 上	十時間 休憩一時間合算 無 制 限	無 制 限 無 制 限 無 制 限	無 制 限 無 制 限 無 制 限	無 制 限 無 制 限 無 制 限	無 制 限 無 制 限 無 制 限	同 上 休憩一時間 同 上

西班牙	五時	八時	無	無	無	無
匈牙利	八時	十時	無	無	無	無

幼 少 年 工	成年女工	成年男工
瑞士	同	同
和 蘭	同	同
白耳義	無	無

各國ノ工場法ハ勞働時間ノ制限ヲナスヲ以テ通則トシ、特定ノ場合ニ於テ例外ノ規定ヲ設ケタリ。顧フニ各種ノ工業ニ對シ何等ノ場合タルヲ問ハズ勞働時間ノ制限ヲ畫一ニ適用センカ、工場ノ經營上其害ノ及ブ所少ナキニ非ルベク、特例ノ規定ハ實ニ已ムヲ得ザルコト、云フベシ。抑モ此特例タル各國其揆ヲ一ニセザルモ大概左ノ如シ

(1) 業務ノ性質ニ基ケル場合、即チ所謂時季工業ノ類ニシテ、一定ノ季節ニ於テ特ニ繁忙ヲ極ムル所ノ工業例ヘバ魚類、菓實ノ採收業等ノ如シ、或ハ執業ノ都合ニ依リ成規ノ時間ニ完了スル能ハザル業務例ヘバ活版所、晒染工場等ノ如シ

(2) 外部ノ事情ニ基ケル場合、即チ天災、地變其他偶然ノ事變ニ際シ損害ヲ豫防スル爲メニ成規ノ勞働時間ニ依ル能ハザル場合等ノ如シ

徹夜業ノ禁止

第四 徹夜業ノ禁止

徹夜業ノ衛生ニ害アルコト誰カ之ヲ疑フ者アラシ、普通ノ業務ニ在ツテモ徹夜業ノ害ヤ顯著ナリ、況ンヤ工場勞働ニ於テオヤ、抑モ工場ノ徹夜業タル成年男工ニ對シテハ尙ホ忍ブベシトスルモ、幼少者ノ如キ發育ノ未ダ充分ナラザル者、婦女ノ如キ體質ノ軟弱ナル者ニ對シ之ヲ強ユルハ其結果實ニ憂フベキモノアルベシ。加之ナラズ徹夜業ノ害タル當ニ之ニ從事セル者ノミ之ヲ被ルニ非ラズ、其嬰兒タル者モ亦其生育ヲ阻害セラレ

、コト、ナル。今若シ既婚ノ婦女ニシテ徹夜業ニ從事センカ、夜間嬰兒ノ哺育ヲナス者ナク其營養ハ不充分トナリ終ニ死亡スルヲ免レザルベシ。假令ヒ生存スルモ到底健全ナル發育ヲナス能ハザルベシ。一八九二年佛國醫學會ハ女工ニ對シ徹夜業禁止ノ利害ニ關シ下院ノ諮問ニ答ヘテ曰ク、睡眠ヲ奪フハ苦痛ノ已甚シキモノタリ。況ンヤ之ニ加フルニ單調ニシテ趣味ナキ工場勞働ヲ以テスルニ於テオヤ、殊ニ女工ノ被ル所ノ害タル大ナリ、徹夜業ヲナスコト久シキニ及ベバ身體次第ニ衰弱シ終ニ貧血症ニ陥ルヲ免レズ、彼等ニシテ既ニ人ノ母タル者ナラシメハ乳ハ減シ小兒ノ滋養ハ欠乏スベシ又彼等ハ小兒保育ノ責ヲ果タスコト能ハズ、假令ヒ晝間ハ小兒預所ニ置クコトヲ得ルモ夜間ニハ此種ノ設備ナキヲ以テ小兒ハ終夜營養ヲ給セラル、コトナク看護ヲ受ケズシテ兒籠ノ中ニ眠ラザルヲ得ズ、近時我國ノ立法者ハ小兒ノ死亡ヲ減少スルガ爲メニ種々ノ畫策ヲナセリ、今若シ女工ニ對シ徹夜業ヲ禁止セバ此目的ヲ達スルニ於

テ獲ル所少キニ非ラザルベシト、要之スルニ徹夜業ガ衛生上有害タルコトハ固ヨリ言フ俟タズ

徹夜業ガ災害ノ原因タルコトハ何レノ國ニ於テモ苟モ工場生活ノ經驗アル者ノ均シク認ムル所タリ、蓋シ徹夜業ニ於テ職工ハ氣力弱ク注意薄ク、加之フルニ屢々睡魔ノ襲フ所トナリ知ラズ器械ノ使用ヲ誤リ終ニ災害ノ犠牲タルニ至ル、而シテ此害ヤ婦女幼少者ニ於テ殊ニ已甚シトス、是レ他ナシ此種ノ職工ハ成年男工ニ比スレバ體質孱弱ナルヲ以テ睡眠ニ犯サレ易ク危害ヲ豫防スルノ力ヲ欠ケルニ依ル  
更ニ風致ノ點ヨリ徹夜業ヲ觀察センカ、其弊害ヤ言フニ忍ビザルモノアリ、半夜人靜カニシテ器械ノ響ノミ響々タルトキ、工場ノ一隅電燈影暗キ處低聲密話ノ漏ル、コトアルハ工場ニ在ル者ノ常ニ目撃セル事實ニ非ラズヤ、又夫ハ晝間ノ勞働ヲ下リ薄暮家ニ歸レバ妻ハ既ニ夜業ノ爲メニ工場ニ赴ケリ、妻ニシテ翌朝家ニ歸ランカ夫ハ更ニ工場ニ赴カザルヲ得

ズ。是ノ如キ生活ニ於テ家庭ノ快樂ハ何處ニカ之ヲ求メン。風紀ノ紊亂スル亦已ムヲ得ザルナリ

是等ノ理由ニ基キ歐洲各國ノ工場法ニ於テハ徹夜業ノ禁止ヲ以テ通則トセリ。只各種ノ職工ニ對シテ悉ク之ヲ適用セルモノト特種ノ職工ニノミ之ヲ適用セルモノトノ區別アルノミ。幼年工ニ對シテハ各國均シク之ヲ禁止シ、少年工ニ對シテハ極メテ少數ノ例外ヲ除ケバ悉ク之ヲ禁止セリト云フコトヲ得ベシ。成年女工ニ對シテハ禁止ト無制限ト相半バスルモノ、如シ、成年男工ニ對シテハ之ヲ禁止セルハ只瑞士ノ一國アルノミ。佛國ニ於テハ此議ハ目下朝野ノ問題トナレリト云フ

余ハ茲ニ歐洲各國工場法ニ就キ徹夜業ニ關スル規定ヲ鈔録セン

	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
英吉利	禁	止	同	無制限
佛蘭西	禁	止	同	無制限

	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
獨逸	禁	止	同	無制限
以太利	禁	止	同上但六時以內ヲ許ス	無制限
瑞馬	禁	止	同	無制限
瑞典	禁	止	同	無制限
那威	禁	止	同	無制限
露西亞	禁	止	無(制限)禁止(特種工業)	無制限
西班牙	禁	止	同	無制限
匈牙利	禁	止	同	無制限
奧太利	禁	止	禁	無制限
白耳義	禁	止	無制限	無制限
和蘭	禁	止	同	無制限
瑞士	禁	止	同	無制限

徹夜業ノ禁止ニ就キ各國工場法ハ多少ノ特例ヲ設ケ以テ工場經營ノ便

益ヲ圖レリ。此特例ニハ臨時ノ性質ヲ有セルモノト永久ノ性質ヲ有セルモノトノ二種アリ。前者ノ特例ハ勞働時間ノ制限ニ關スルモノト大差ナキガ故ニ茲ニハ之ニ及バズ、只後者ノ特例ニ就キテノミ説明セン  
永久ノ性質ヲ有セル徹夜業禁止ノ特例ハ之ヲ分ツテ二種トナス

(1) 工業ノ種類ニ依リ徹夜業ヲ許可セル場合 各國ノ法律ニ於テ所謂繼續セル火力ヲ用キル所ノ工業即チ是ナリ。繼續セル火力ナル用語ハ甚ダ明確ヲ欠クト雖モ、要之スルニ工場ノ經營上器械ノ運轉ヲ繼續セシムル必要アル工業ヲ指セリ。例ヘバ熔鑄所、ガラス工場、製紙工場、製糖工場等ノ如シ

(2) 執業方法ニ依リ徹夜業ト認メラレタル時間ヲ短縮スルコトヲ得ル場合 今若シ徹夜業ノ時間ガ午後九時乃至翌日午前五時ナリトセンニ、二十四時間ヨリ此時間ヲ控除セバ殘餘ハ十六時間トナル十六時間勞働ヲ繼續セシムルハ法律ノ許サザル所タルガ爲メニ二組交代ノ方

定期休業日

第五 定期休業日

法ニ依リ執業セシメンカ、各組ノ勞働時間ハ八時間ニ過ギズシテ甚ダ短キニ失スルノ憂アリ。此場合ニ於テ徹夜業ノ時間ヲ短縮シテ午後十時乃至翌日午前四時トナシ、殘餘十八時間ニ就キ各組ノ勞働時間ヲ九時間トナスカ如キ特例ハ各國ノ法律ニ規定セラレタリ

歐洲各國ノ工場法ニ於テ大祭日ノ外日曜日ヲ以テ定期休業日トナスヲ常トス。只伊太利、西班牙ニ於テ之ヲ強制セザルノミ、或ハ殊ニ日曜休業ノ規定ヲ設ケズ。毎週一日ノ休業日ヲ與フルコト、定メタル處アリ。佛蘭西、白耳義ノ如シ。願フニ職工ニ對シ定期休業日ヲ與フルハ衛生上急要ナルコトハ固ヨリ言フ俟タズ。器械器具ト雖モ時々之ヲ休止シ修繕ヲナスノ必要アリ。況ンヤ人類ニ於テヲヤ。曾ツテ獨逸工場監督官ノ報告ヲ讀ムニ業務災厄ト日曜休業トノ關係即チ各曜日中何レノ日ニ於テ災害最も多キヤヲ調査シタル統計アリ。茲ニ之ヲ鈔録セン

監督區名	日	曜	月	曜	火	曜	水	曜	木	曜	金	曜	土	曜
シユワールペン	一九	一三七	一六九	一六六	一六八	一九六	一七一							
パウチエン	六	五四	六四	五〇	三六	五七	五二							
ナツタウ	七	三四	三六	四四	五八	五一	六九							
デーベルン	九	五九	五三	五三	五九	六八	六二							
ケムニッツ	三	五九	五五	六八	五一	七五	八〇							
フナベルグ	五	二四	三四	二六	三〇	三二	二七							

(一八九五年工場監督官報告)

此表ニ基キ監督官ハ断定シテ曰ク一斑ノ統計ヲ以テ全豹ニ對スル斷言ヲナシ難キモ業務災厄ハ金曜日土曜日ニ於テ最も多キコトハ疑ヲ容レズト余ハ此說ニ左袒スル者ナリ蓋シ災厄ノ原因タル種々アリト雖モ職工ノ不注意ニ基ク場合少ナシトセズ而シテ職工ノ不注意ハ多クハ其身心ノ疲勞ニ依ル身心ノ疲勞ハ連日勞働ヲ繼續セルコト之ガ一原因タルヲ失ハズ之ヲ職工ノ經驗ニ徵スルニ毎月數回ノ休業日ヲ與フル工場ニ

在ツテモ休業日ノ前二三日間ハ身心著シク疲勞スルヲ覺ユト云フ然ラバ則チ金曜日土曜日ニ於テ災厄ノ屢々起ルハ強チ偶然ノ事ト云フ可ラス此事實ニ依ルモ亦定期休業ガ衛生上奈何ニ必要ナルカヲ知ルベシ定期休業日ハ又風教上忽諸ニ附ズ可ラザルモノタリ基督教國ニ於ケル日曜休業ガ國民道德ニ與フル影響ハ論ゼズシテ可ナリ假令ヒ基督教國ニ非ルモ定期休業日ハ家庭ノ團樂ヲ保ツガ爲メニ必要ナリ抑モ工場生活ナルモノハ家庭ノ關係ヲ紊亂スルコト甚シ家族ノ多數ガ職工タル場合ニ於テ或ハ各自其工場ヲ異ニセルコトアラン或ハ晝業ニ從事シ或ハ夜業ニ從事スル者モアラン今若シ定期休業日ナシトセンカ彼等ハ毎週何レノ日ニ於テカ和氣霽然タル家庭ノ快樂ヲ貪ルコトヲ得ン苟モ心ヲ風教維持ノ上ニ寄スル者ハ此點ニ就キテ更ニ定期休業ノ必要ヲ認メザルヲ得ズ

歐洲各國ノ工場法ヲ按ズルニ定期休業日ハ幼年工少年工ニ對シテ之ヲ

強制スルハ各國其授ヲ一ニセリ。成年女工ニ對シテハ往々之ヲ放任セル處アリ。成年男工ニ對シテハ二者相半バヌルモノ、如シ余ハ茲ニ之ニ關スル各國ノ實例ヲ掲ゲン

	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
英吉利	日曜日	同上	同上	無制限
佛蘭西	毎週一日	同上	同上	無制限
獨逸	日曜日	同上	同上	同上
以太利	無制限	同上	同上	同上
羅馬	日曜日	無制限	同上	同上
瑞典	日曜日	同上	無制限	同上
那威	日曜日	同上	同上	同上
丹麥	日曜日	同上	同上	同上
西班牙	無制限	同上	同上	同上
匈牙利	日曜日	同上	同上	同上

定期休業ノ規定モ亦各國ノ法律ニ於テ多少ノ特例ヲ設ケタリ。此特例ニハ臨時ノ性質ヲ有セルモノト永久ノ性質ヲ有セルモノトノ區別アリ。臨時ノ特例ハ労働時間徹夜業ニ關スルモノト大差ナシ。永久ノ特例ニ就テハ繼續セル火力ヲ用ユル所ノ工業及ビ消費者ノ必要ノ爲メニ日々間斷ナク生産ヲナサル可ラザル工業例ハ食物製造業ノ如キモノニ對シ之ヲ認メタリ

第六 賃銀ノ支拂方法  
労働者ノ賃銀ハ生産力ノ多寡及ビ労働ノ需要供給ノ關係等經濟ノ理法

賃銀ノ支拂方法

ニ依ツテ定マルモノタリ。法律ヲ以テ之ニ干涉スルハ當ニ背理ノ事タルノミナラズ實ニ至難ノ業ニ屬セリ。近時法律ヲ以テ貸銀ノ最低限度ヲ定ムルノ議ヲ立ル者アルモ未ダ識者ノ贊同ヲ得ル能ハズ。然リト雖モ貸銀支拂ノ方法ニ關シテハ各國工場法ハ之ヲ以テ内容ノ一部トセリ。殊ニ英吉利、白耳義、露西亞ニ於テハ之ニ關スル特別法ヲ制定シ詳密ナル規定ヲナセルヲ見ル

貸銀ハ通貨ヲ以テ支拂ハザル可ラズ、其他ノ物品ヲ以テナシタル支拂ハ凡テ無效トスルコトハ各國法律ノ通則トス。所謂實物貸銀支拂ノ禁止是ナリ。顧フニ實物ヲ以テ貸銀ヲ支拂フコトヲ許スルハ工場主ハ通常ノ市價ヲ以テ粗惡ナル物品ヲ供給スルカ、或ハ市價以上ニ其價格ヲ昂上シテ之ヲ強賣スル等ノ事情ノ爲メニ物品ノ販賣ニ關シ多少ノ利益ヲ得間接ニ貸銀ノ減少ヲ圖ルコトナシトセズ、斯ノ如クシテ實物貸銀支拂方法ハ工場主ガ職工ヲ欺瞞スルノ手段トナルベシ此弊害ヲ匡正スル爲ニ各國

法律ニ於テ之ヲ禁止スルノ規定ヲ設クルコト、ナレリ

實物貸銀支拂ノ禁止ニ關シテハ各國トモ若干ノ特例ヲ認メタリ。即チ家屋、宅地及ビ器具ノ使用ニ對スル報酬ニ就キテハ之ヲ貸銀ニ合算スルコトヲ許セリ。蓋シ是等ノ物件タル他ノ物品ト稍々其性質ヲ異ニシ陰險ナル工場主ト雖モ欺瞞ヲ逞ウスル能ハザルノミナラズ、慈善ナル工場主ガ屢々之ニ依ツテ以テ職工ノ利益ヲ圖ルノ方法トセルモノナリ去レバ之ヲ以テ特例ト認ムルハ至當ノ事トス

各國ノ法律ニ於テ貸銀支拂ノ場所ニ制限ヲ附シタルモノ多シ、即チ酒舖、飲食店等ニ於テ貸銀ノ支拂ヲナスヲ禁止セルコト是ナリ。是レ工場主ガ是等ノ營業者ト聯絡ヲ通ジ不當ノ利得ヲ私スルノ弊ヲ防グノ趣旨ニ出デタルニ外ナラズ、各國法律中貸銀支拂ノ期日ニ關スル規定ヲ設ケタルモノアリ、露西亞、白耳義ノ如シ、白耳義一八八七年貸銀ノ支拂差押讓與ニ關スル法律第五條ニ曰ク五、フラン以下ノ貸銀ハ毎月二回以上ニ支拂フ



ヘシ、各支拂期日ノ間斷ハ十六日ヲ超過ス可ラズ、自宅ニテ勞働ヲナセル場合及ビ賃業給ヲ以テ勞働ヲナセル場合ニハ賃銀ノ支拂ハ其ノ全部タルト一部タルトヲ問ハズ、毎月一回以上タルヲ要スト露西亞一八八六年賃銀ニ關スル法律ニ左ノ規定アリ、曰ク賃銀支拂期日ハ一ヶ月以上ノ定期雇傭規約ナルトキハ毎月一回以上トシ、又不定期雇傭規約ナルトキハ毎月二回以上ナルヲ要スト是等ノ規定ハ職工保護ノ爲メニ必要ナリ、今若シ之ヲ自由ニ放任センカ工場主ハ賃銀ノ支拂ニ關シ自己ノ都合ヲ以テ職工ニ不利ヲ醸スノ憂ナシトセズ、殊ニ小資本家ニシテ而モ市況ノ變動劇甚ナル工業ニ從事セル者ニ在ツテハ賃銀支拂ノ長期ニ涉ルコトハ職工ノ爲メニ不測ノ損害ヲ來タスノ原因タルコト屢々之アリトス

#### 執業規則

#### 第七 執業規則

職工ノ雇傭契約ニ於テ明文ヲ以テ約束セル條項ヲ定ムル場合ハ甚ダ少ナク只勞働時間及ビ賃銀等重要ナル事項ニ就キテノミ契約ニ明示シ其

他ハ凡テ工場主ガ任意ニ定ムル所ノ執業規則ヲ遵守スルヲ以テ一般ノ事例トナス。是故ニ執業規則ハ雇傭契約ノ實體ヲ具フルモノナリ。今雇傭契約ニ關スル監督ヲナサント欲セバ須ラク執業規則ニ關スル監督ヲ爲スヘシ。歐洲各國ノ工場法ニ於テ執業規則ニ對シ相當ノ監督ヲナセルハ此理由ニ基ケリ。或ハ之ガ内容タルベキ事項ヲ定メタルアリ、或ハ之ガ届出認可ノ手續ヲ定メタルアリ、或ハ之ヲ工場内ニ揭示シ職工ヲシテ之ヲ知ラシムルノ義務ヲ工場主ニ負ハシメタルアリ、各國ノ法律各其趣ヲ異ニセリ。茲ニ白耳義ノ執業規則ニ關スル法律ノ要領ヲ摘録セン

第二條 執業規則ニハ業務ノ性質ニ應ジ相當ノ範圍ニ於テ左ノ規定ヲ設ケザル可ラズ

- (1) 始業終業時刻、休憩時間、定期休業日
- (2) 賃銀支拂ノ方法、即チ時間給、日給、賃業給、請負給等ニ關スルコト
- (3) 賃業給、請負給ノ場合ニハ算定及ビ監査ニ關スル方法

(4) 賃銀支拂期日

第三條 執業規則ニハ特種ノ業務ニ於テハ左ノ規定ヲ設ケザル可ラズ

(1) 工場監督者ノ權限及ビ職工ガ工場監督者ノ處置ニ對シ不平アル  
場合ニ申立ツベキ方法

(2) 賃銀ノ前貸差引等ニ關スルコト

(3) 雇傭解除ノ豫告期間及ビ豫告ナクシテ解除ヲナシ得ベキ場合

(4) 懲罰、罰金ノ制ヲ設ケタル所ニ在ツテ懲罰ノ種類、及ビ罰金ノ最高  
額、罰金ノ使用方法

第五條 特種ノ業務ニ對シテハ勅令ヲ以テ執業規則ニ左ノ規定ヲ設ケ  
シムルコトヲ得

(1) 危害ノ豫防、衛生ノ保全、風紀ノ維持ニ必要ナル施設

(2) 危害ニ罹リタル職工ニ對シテナスベキ應急ノ手當

職工證

第八 職工證

職工證ノ目的トスル所ハ職工ノ身分ヲ證明シ雇傭契約ヲ確固ナラシム  
ルニ在リ、此必要ニ基キ各國工場法ハ職工證ノ制ヲ設クルヲ常トス而シ  
テ其適用ノ範圍ハ幼少年工ニ限り成年工ニ對シテ之ヲ適用セルモノハ  
未ダ之ヲ見ズ、之ニ關スル規定ハ各國ノ間ニ多少其趣ヲ異ニスルコトア  
ルモ概畧左ノ如シ

幼少年工ガ工場ニ備使セラル、場合ニハ特定ノ官署ニ就キ職工證ヲ請  
求スルヲ要ス、此官署ハ或ハ市町役場ナルアリ、或ハ警察署ナルアリ、而シ  
テ是等ノ官署ハ或ハ職工ノ原籍地タルベシト定ムルアリ、或ハ工場所在  
地タルベシト定ムルアリ、以太利ニテハ職工證ノ交付ハ官署之ヲナサズ  
シテ同業組合ニ一任セルハ偶々以テ一異例タリトス

職工證ニハ職工ノ氏名、年齢、住所、出生地及ビ父母、後見人ノ氏名、住所ヲ記  
載スルヲ要ス、而シテ職工傭入ノ際ニ工場主ハ傭入時日、雇傭期間及ビ業  
務ノ種類等ヲ記入シ之ヲ預リ置クモノトス、滿期解傭ノ際工場主ハ解傭

シ時日ヲ記入シ職工ニ返附ス職工ハ之ヲ受取リ更ニ他ノ工場ニ備入レ  
 ラル、トキニ同一ノ手續ヲナスベキモノトス又工場主ガ職工證ニ記入  
 ヲナスニ當リ法定ノ事項ノ外何等ノ記入ヲナスコトヲ得ズ、標號ヲ以テ  
 暗ニ職工ノ性行ヲ示シ同業者ニ注意ヲ與フルガ如キハ固ヨリ之ヲ禁止  
 セリ、工場主ハ工場監督官ノ求ニ應ジテ何時ニテモ之ヲ示サ、ル可ラズ  
 是レ工場監督ノ必要ニ基ケルモノナリ

危害ノ豫防

第九 危害ノ豫防

各國工場法ヲ按ズルニ危害豫防ニ關スル規定ヲ存セザルモノ殆ンド之  
 ナシ、抑モ此種ノ規定タル工業ノ種類ニ應ジテ其方法ヲ異ニセザル可ラ  
 ズ、又各種ノ場合ニ於テ特別ノ處分ヲナスノ必要アルガ爲メニ法律ハ其  
 大體ノ準則ヲ定メ詳細ナル事項ハ之ヲ命令ニ讓ルヲ以テ各國立法ノ通  
 例トス、又獨逸ノ如キ災厄保險制ヲ設ケ工場主ノ同業組合ヲシテ危害豫  
 防ニ關スル規約ヲ設ケシムル處ニ在ツテハ同業組合ノ規約ハ危害豫防

ノ目的ヲ達スルニ於テ緊要ナルモノタリ、危害豫防ノコトタル職工保護  
 ノ爲メニ重要ナル關係ヲ有セルコト固ヨリ爭フ可ラザル所ナルモ技術  
 ノ問題ニ屬シ余輩ノ驟ヲ容ルベキモノニ非ラズ、去レバ余ハ茲ニ各國工  
 場法中ヨリ之ニ關スル規定ヲ鈔録シ以テ危害豫防ノ何者タルカヲ示サ  
 ント欲ス

佛蘭西工場法第十四條ニ曰ク本法第一條ノ造營物及ビ之ニ附屬セル建  
 物ハ當ニ清潔物ニシテ適當ナル明取通風ノ設備ヲナシ衛生及ビ保安ノ  
 爲メニ必要ナル事情ヲ具備スベシ、原力ヲ用キル器具ヲ備フル所ノ工場  
 ニ於テハ車輪、帶革、觸接部等ニシテ危害ノ憂アルモノハ職工ヲシテ安リ  
 ニ之ニ近寄ラシメザルノ設備ヲナスベシ、井戸、土窖、階段ノ降口ニハ圍障  
 ヲ設クルヲ要ス

獨逸工業法甲第二百二十條ニ曰ク工業主ハ事業ノ性質ガ許ス限リ執業場  
 機械及器具等ノ設備排列ニ就イテ職工ノ生命健康ニ危害ヲ來タサハル

コトヲ努ムベシ、殊ニ工場ニ充分ノ日光、空氣ヲ流通シ、執業ノ際生ズル塵埃ヲ掃除シ、烟及瓦斯ノ室内ニ入ルヲ防ギ、且ツ此等ノモノヨリ生ズル種々ノ危害ヲ防止スルコトヲ注意スベシ、機械ノ全部若シクハ部分ニ接觸スルヨリ起ル危害及ビ執業場或ハ職業ノ性質ヨリ生ズル危害并ニ火災ヨリ生ズル危害ニ對シ、職工ヲ保護スル爲メニ必要ナル設備ヲナスヲ要ス、工業主ハ執業ノ整理及ビ職工ノ行爲ニ關シ、危害豫防ニ必要ナル規則ヲ設クルコトヲ要ス

埃太利工業法第七十四條ニ曰ク、工場主ハ自己ノ費用ヲ以テ、工場ノ設計、機械、器具ノ排列、整理ニ關シ、及ビ其他業務或ハ工場ノ組織ニ基キ、職工ノ生命健康ヲ保護スル爲メ、必要ナル設備ヲナスベシ、工場主ハ機械器具ノ全部或ハ一部例ヘバ、節動輪、傳導機、車軸、架起重器、大槽、釜等ニハ、圍繞ヲ施ス等、職工執業ノ際、危害ノ發生ヲ豫防スルノ設備ヲナスベシ、工場主ハ事業ノ程度ニ應ジ、工場ニ通風ヲ善クシ、照明ヲ便ニシ、清潔ニナスベシ、化學

工場法ニ關  
スル列國會  
議

工業ニ關シテ職工衛生ノ爲メニ特別ノ設備ヲナスヲ要ス

工場法ヲ以テ國際法律トナシ、各國ノ條約ニ依ツテ均一ナル規定ヲ設クルノ議ハ夙ニ社會改良家ノ間ニ起レリ、此事タル工場法ノ進歩改良ノ爲メニ洵ニ急要ナリトス、蓋シ各國特別ノ規定ヲ設ケ、勞働者ノ年齢及ビ勞働時間等ノ制限ニ就キ、等差ヲ存スルトキハ、進歩セル工場法ヲ有セル國ハ、然ラザル國ニ對シ、國際貿易ノ競争場裏ニ於テ常ニ不利益ノ地位ニ立タザルヲ得ズ、是レ實ニ各國工場法ノ前途ニ横ハル所ノ一大障害ナリ、今若シ是等ノ事項ニ關シ、各國ノ間ニ均一ナル規定ヲ設ケンニハ、工場法ハ國際貿易ノ關係ニ於テ何等ノ支障ヲ與フルコトナク、其進歩ハ期シテ待ツベキモノアラン、然レドモ各國其風土民情ヲ異ニセルノミナラズ、生産ノ状態及ビ經濟ノ進歩ニ於テ其趣ヲ一ニセザルガ爲メニ、此計畫ハ容易ニ實行ノ緒ニ就カザリキ、一八九一年獨逸皇帝ハ此目的ノ爲メニ列國工場法會議ヲ開ラキ、各國ノ代表者ヲ招集シタリ、之ニ賛同セル諸國ハ、埃

國、白耳義、璉馬、西班牙、佛蘭西、英吉利、以太利、ルユクサシブルグ、和蘭、葡士牙、瑞典、那威、瑞士ナリ。此會議ニ於テ、日曜休業、幼少年工女工ニ對シ、勞働時間ノ制限及ビ徹夜業ノ禁止等ニ就キ、決議ヲナシタルモ、此決議タル只各國ノ立法者ニ對スル列國會議ノ冀望ヲ述ベタルニ止マリ、直チニ之ヲ以テ國際條約トナシ、強行ノ力ヲ有セシムルコト能ハザリキ、一九〇四年、瑞士政府ノ提議ニ依ツテ、第二回列國會議ハ「ベルン」ニ開カレタリ、之ニ賛同セラル諸國ハ第一回ニ於ケルト畧同一ナリトス。該會議ノ議題ハ女工ニ對シ、徹夜業ヲ禁止スルコト及ビ燐寸ノ製造ニ黃燐ヲ用キルコトヲ禁止スルノ二件ナリシガ、各國委員ノ大多數ハ之ヲ可決セリ。此決議ハ直チニ國際法規トナル能ハザリシモ、之ニ基キテ條約ヲ締結セル國少ナシトセズ、實ニ此會議ハ各國工場法ノ歴史ニ於テ一期節ヲナセルモノト云ハザルヲ得ズ。

歐洲各國ニ於ケル工場法ノ現況ハ右述ブル所ノ如シ、今ヤ我國ノ工業ハ

既ニ所謂工業革新ノ時代ニ移リ、工場勞働者ノ弊害ハ歳ヲ追フテ其度ヲ高メタリ、從ツテ工場法ノ必要ハ次第ニ朝野ノ間ニ認めラレタルモ、未ダ法律ノ制定ヲ見ザルハ洵ニ憾ムベキコトタリ。明治三十一年政府ハ工場法案ヲ起草シ之ヲ農工商高等會議ニ諮問セリ、茲ニ其要旨ヲ掲ゲン

- (1) 法律適用ノ範圍ハ五十名以上ノ職工徒弟ヲ僱使セル工場トセルコト
- (2) 職工ノ最低年齢ヲ十歳トセルコト
- (3) 勞働時間ノ制限ハ十四歳未滿ノ職工ニ對シ一日十時間トセルコト
- (4) 各種ノ職工ニ對シ一ヶ月二日ノ休業日及ビ一日一時間ノ休憩ヲ與フルコト
- (5) 各種ノ職工ニ對シ職工證ヲ所持セシムルコト
- (6) 業務災厄ニ罹レル職工ニ對シ工業主ヲシテ責任ヲ負擔セシムル

コト

- (7) 尋常小學校ノ教科ヲ卒ラザル十四歳未満ノ職工ニ對シ工業主ヲシテ教育ノ義務ヲ負ハシムルコト
- 農工商高等會議ハ右ノ法案ニ對シ左ノ如ク修正ヲナセリ
- (1) 法律適用ノ範圍ニ關スル制限ヲ除却スルコト
- (2) 最低年齢、労働時間、休業日、休憩時間ニ關スル事項ニ就キ法律ヲ以テ制限ノ標準ヲ示シ其範圍内ニ於テ主務大臣ヲシテ適宜ノ命令ヲ發セシムルコト、而シテ此標準タル十歳未満ノ幼者ノ傭使ヲ禁止或ハ制限ヲナスコト、女子又ハ十四歳未満ノ者ニ對シ一日十二時間迄ニ労働時間ヲ制限スルコト、一ヶ月二日ノ休業日ヲ與フルコト、一日十時間以上ノ労働ヲナス場合ニ一時間ノ休憩ヲ與フルコトナリ
- (3) 職工證ノ規定ヲ撤去スルコト
- (4) 教育ニ關スル工業主ノ義務ヲ認メザルコト

(5) 業務災厄ノ場合ニ於ケル工業主ノ負擔ノ程度ヲ明示セルコト  
 同年内閣ノ交迭アリ、工場法ニ關スル諮問案モ修正案モ與ニ空文トナリ了リヌ、次イデ明治三十三年政府ハ特ニ工場調査ノ機關ヲ設ケ工場職工ノ現状ヲ調査シ工場法ノ立案ヲナサシメタリ、余モ亦之ニ參加スルノ榮ヲ得テ三十六年ニ至ルマデ種々ノ調査立案ヲナシタルガ、同年調査ノ機關ハ廢止セラレ、終ニ法律ノ制定ハ何レノ時ニアルカ知ル能ハザルニ至レリ

### 第十四章 勞働保險

勞働保險ノ  
必要

勞働保險ノ目的ハ勞働者ヲシテ偶然ノ事情ノ爲メニ勞働ノ能力ヲ失ヒ衣食ノ資ニ窮シ終ニ窮民ノ伍ニ入ルヲ豫防スルニ在リ、換言スレバ勞働者ノ生計ノ安固ヲ圖ルハ勞働保險ノ主眼トスル所ナリ

世人動モスレバ勞働者ト窮民トヲ同一視シ勞働問題ト窮民問題トヲ區別セザルノ傾向アリ、是レ誤謬ノ己甚シキモノタリ、勞働者必ズシモ窮民ナラズ勞働者ニシテ完全ナル勞働能力ヲ有セル間ハ其所得ハ優ニ中等ノ資本家ト匹敵スルコトヲ得ル場合アリ、英國勞働者ノ狀況ヲ觀察センカ、此社會階級ノ地位侮ル可ラザルモノアルヲ見シ、抑モ勞働者ト窮民トヲ同一視スルノ非ナルコトハ固ヨリ言フ俟タザル所ナルモ勞働者ハ窮民ニ陥リ易キ地位ニ立ツ境遇ニ在ル者ナリト云フハ失當ノ言ニ非ルベシ、蓋シ勞働者ハ資本家ノ如クニ資本ノ收入ニ依ツテ衣食スル者ニ非ラ

ズ只自己ノ身體ニ附着セル勞力ヲ估賣シ由ツテ以テ生計ノ資ヲ得ル者ナルガ故ニ、其勞働能力ニシテ完全ナル間ハ何ノ憂フル所ナシトスルモ一旦偶然ノ事情ノ爲メニ此能力ヲ減少若シクハ喪失センカ、彼等ハ其財源ヲ奪ハレ空シク道途ニ彷徨スルノ窮境ニ陥ルベシ、勞働者ノ境遇ヤ亦憫ムベキモノアリト云ハザルヲ得ズ

勞働者ヲシテ勞働能力ヲ減失セシムルノ事情一ニシテ足ラズ、今其重ナルモノヲ擧ゲンカ左ノ如シ

- (1) 業務災厄
- (2) 疾病
- (3) 老衰及ビ廢疾

右擧グル所ノ各事情ニ就キ業務災厄ナルモノハ固ヨリ勞働ニ伴フ所ノ特種ノ事情ニシテ勞働者以外ノ社會階級ニ於テハ稀ニ見ル所タリ、殊ニ器械的工業ニ在ツテハ殆ンド免ル可ラザルモノトス、而シテ工業ニ於ケ

ル器械ノ應用進歩スルニ從ツテ益々増加スルハ自然ノ勢ナリ。顧フニ業務災厄ノ結果ニシテ輕微ナル場合ニ於テハ勞働者自己ノ資力ヲ以テ之ニ處スルコトヲ得ベク之ヲ放任センモ可ナルベシト雖モ、其ノ重大ナルモノニ在ツテハ或ハ四肢ヲ挫折シ或ハ五官ヲ傷害スル等著シク勞働能力ヲ減少シ、或ハ全タク之ヲ喪失セル場合ニ於テハ彼等ハ到底窮民トシテ他人ノ保護ニ依ルカ然ラザレバ公共ノ救助ヲ仰グノ外其途ナキニ至ルベシ。若シ夫レ業務災厄ニ罹ツテ死亡セル勞働者ノ遺族ニ至ツテハ其狀更ニ憫ムベキモノアルハ固ヨリ言フ俟タズ

疾病、老衰、廢疾等ノ事情ハ一般ノ人ト雖モ免ル、能ハザル所ニシテ勞働者ニ特有ナルモノニ非ラズ。是レ此事情ガ業務災厄ト稍々其趣ヲ異ニセル所ナリトス。然リト雖モ勞働ノ種類ニ依ツテ特有ノ疾病ヲ存セル場合アリ、例ヘバ紡織工場ニ於ケル肺病、有害物ヲ取扱フ工場ニ於ケル有害物中毒等ノ如シ、其他ノ工場ニ於テモ亦種々ノ原因ニ基キ工場生活ノ爲メ

ニ疾病ヲ惹起スルコト少ナシトセズ、又老衰及ビ廢疾等ノ事情ニ就イテモ勞働ノ種類性質ニ基キ一般人ニ比スレバ勞働者ノ老衰ノ期ハ速カニ至ル又廢疾トナルノ機會多シトス。是レ疾病ノ場合ニ於ケルガ如ク工場生活ニ伴フ弊害ニ外ナラズ。是等ノ事情ノ爲メニ勞働不能トナリタル勞働者ハ奈何ニシテ自力ヲ以テ其生計ヲ支持スベキヤ、短期ノ疾病ハ措イテ之ヲ問ハズトスルモ其ノ久シキニ涉ルモノニ在ツテハ殆ンド之ニ處スルノ方法ナカルベシ。殊ニ老衰廢疾ノ場合ニ至ツテハ永久ニ其勞働能力ヲ恢復スルノ望ナク收入ノ途ハ更ラニ再タビ之ヲ求ムル能ハズ、相率イテ窮民ノ伍ニ加ハルニ至ルベシ

會ツテ「ポールマン」ガ獨逸ニ於ケル窮民統計ニ基キテ之ガ原因ヲ分類シタルモノヲ見ルニ

原因ノ種類	百分比例
疾病	二八・四



孤兒寡婦	一七、五
老 衰	一四、九
廢疾不具	一二、三
失 業	五、四
其他ノ原因	二一、五

貯金制ト保  
險制トノ比

茲ニ掲クル所ノ調査中疾病孤兒寡婦及ビ廢疾不具ト云フハ自然ニ起リタルモノト業務災厄ノ爲メニ起リタルモノトノ二種ヲ包含スルモノト知ルベシ。又茲ニ窮民ト云フハ各種ノ社會階級ヲ網羅シ強チ勞働者ニノミ限リタルニ非ルモ其大部分ハ勞働者ナリトス。此表ヲ按スルトキハ余ガ先キニナシタル斷定ノ謬ラザルコトヲ明ニスルヲ得ベシ。勞働者ヲシテ窮民トナルヲ豫防スルノ方法タル他ナシ、是等ノ事情ニ對シ豫メ救濟ノ途ヲ開ラキ其生計ノ安固ヲ圖ルニ在リ。然リ而シテ此手段ニ就キ說ヲナス者アリ、曰ク天ハ自ラ助クル者ヲ助ク、勞働者ニシテ窮民

タルコトヲ欲セスンバ宜シク常時ニ貯金ヲナシ由ツテ以テ不時ノ厄ニ備フベシト。余ハ勞働者ニ對シテ貯金ノ必要ヲ認ムルコト論者ニ讓ラズ、然レドモ勞働不能ニ處スルノ救濟方法トシテハ貯金制ヨリハ寧ロ保險制ヲ採ラント欲スル者ナリ。今勞働不能ニ對スル救濟ノ方法トシテ二者ヲ比較センカ、貯金制ニ依ツテハ其金額足ラズ充分ナル救濟ヲ施スコト能ハザルトキニ於テモ保險制ニ依レバ直チニ其目的ヲ達スルコトヲ得ベシ。奈何ントナレバ保險制ニ於テハ特定ノ事情發生スルトキハ既ニ支拂ヒタル保險料ノ多寡ニ關ラズ定額ノ保險金ヲ受取ルコトヲ得レバナリ。加之ナラズ勞働不能ナル事情ハ不時ニ起ル場合多キガ故ニ之ニ對シテ豫メ一定ノ貯金ヲナスハ殆ンド不可能ノ事ニ屬セリ。夫ノ保險制ニ於テ特定ノ條件ヲ充タストキハ何時ニテモ救濟ヲ受クルヲ得ルノ便宜ノ如キハ得テ之ヲ望ム可ラズ。又保險制ハ貯金制ニ比スレバ貯蓄ニ關スル強制力ヲ有セルノ事實アリ、貯金制ニ於テハ貯金ノ多寡ハ常人ノ意思ニ

労働保險ノ組織

放任セルヲ以テ勤モスレバ放漫ニ流レ易ク他ノ事情ノ爲メニ之ヲ忽ニスルノ傾向アルヲ常トス。然ルニ保險制ニ於テハ定額ノ保險料ヲ支拂フニ非レバ保險ノ利益ヲ受クル能ハザルガ故ニ其定額ニ達スルマデ當人ハ奈何ナル事情ヲモ顧ミズ自己ノ所得中ヨリ之ヲ抽出スルハ人情ノ然ラシムル所ナリ。是レ亦貯金制ト保險制ト其性質ヲ異ニセル所以ニシテ、從ツテ労働不能ノ救濟方法トシテ保險制ノ貯金制ニ優ル所以ナリトス。労働保險ノ組織ハ種々アリ。而シテ其利害優劣ノ分ル、所ハ保險ノ種類及ビ國民ノ氣風ニ依ルヲ以テ一概ニ之ヲ斷定シ難シト雖モ茲ニ歐洲各國ニ行ハル、所ノ實例ヲ列記センカ、大約左ノ四種ニ外ナラズ

- (1) 營業保險
- (2) 單獨保險
- (3) 相互保險
- (4) 官業保險

營業保險ナルモノハ労働保險ト相容レザル性質ヲ有セリ。蓋シ營業保險ハ營利ヲ目的トシテ成立セルモノナルガ故ニ成ルベク保險料ヲ多クシ而シテ成ルベク保險利益ヲ少クスルコトヲ務ムルヲ常トス。假令ヒ同業者間ニ行ハル、所ノ自由競争ノ爲メニ又私業ニ伴フ經費節約ノ結果トシテ例外ノ事實時ニ或ハ之アリトスルモ其本來ノ目的ニ於テ既ニ労働保險ノ如キ社會改良ノ理想ニ出ルモノトハ大ニ其趣ヲ異ニセリ。去レバ營業保險ガ中産以上ノ者殊ニ資本家ヲ以テ得意ノ範圍トナシ廣ク労働者ニ及ボスコトヲ好マザルハ固ヨリ怪ムニ足ラズ

單獨保險ハ大工場主ガ只自己ノ僱使セル労働者ニノミ對シテ行フ所ノモノタリ。労働保險ノ組織トシテハ固ヨリ間然スル所ナシ。然レドモ是ノ如キハ慈善心ニ富ミ常ニ労働者ノ休戚ヲ念トスル所ノ工場主ニ就テ望ムベキコトタリ。而シテ此種ノ工場主ハ殆ンド九牛ノ一毛タルヲ常トスルガ故ニ之ヲ以テ普ネク労働保險組織ノ方法トナス能ハザルハ言ヲ俟

タズ

相互保險ニハ其種類三アリ

- (1) 労働者が共済ノ目的ヲ以テ設立セル組合
  - (2) 工業主ガ労働者救済ノ爲メニ組織セル組合
  - (3) 労働者工業主協同シテ労働者救済ノ爲メニ組織セル組合
- 相互保險ハ労働保險ノ組織トシテ最モ廣ク行ハル、所ノモノナリ。是レ相互保險ノ性質之ヲシテ然ラシメタルニ依ル。蓋シ相互保險ハ營業保險ノ如クニ被保人以外ニ營業者アリテ利益ヲ占ムルコトナク各自共同ニ其費用ヲ負擔シ其利益ヲ享受スルヲ以テ主眼トナスモノナレバナリ。然リ而シテ前掲グル所ノ相互保險ニ關スル三種ノ組織ニ就キ孰レヲ最モ可トスルヤノ問題ニ就テハ一概ニ之ヲ斷定シ難ク、要之スルニ保險ノ種類ニ依ツテ異ナルト云フノ外ナシ。災厄ニ對スル保險ハ第二種ノ組織ニ依ルコトハ各國殆ンド其歸ヲ一ニセリ。是レ各國ノ法律ニ於テ工業主ヲ

シテ災厄救済ノ義務ヲ負ハシムルニ依ル。疾病ニ對スル保險ハ第一種ノ組織ニ依ルモノト第三種ノ組織ニ依ルモノト稍々相半スルモノ、如シ老衰及ビ癡疾ニ對スル保險ハ第三種ノ組織ヲ以テ經營セラル、ヲ常トス、是レ此種ノ保險ハ費用ヲ要スルコト多キガ爲メニ到底労働者ノ獨力ヲ以テ之ニ當ルノ難キニ依ツテ然ルモノトス

官業保險ハ政府自ラ經營スル所ノ保險組織ニシテ労働保險ノ理想ヲ充足スルニ於テ其ノ適當ナルコト相互保險ニ讓ル所ナシ、殊ニ老衰及ビ癡疾ニ對スル保險ニ就テハ其基礎ノ鞏固ナルコト、其發達ノ健全ナルコト恐ラクハ官業保險ノ右ニ出ルモノナカルベシ。蓋シ此種ノ保險ニ在ツテハ其救済ヤ永久ニ涉ルガ故ニ私業トシテ之ヲ營ムハ危險ノ虞ナキニ非ラズ、又其救済ノ費用ハ鉅額ニ上ルガ故ニ政府ガ多少ノ補助ヲナスニ非レバ労働者ハ到底保險料ノ負擔ニ堪ヘザルノ憂アリ、是等ノ理由ニ基キ老衰ニ對スル官業保險ハ漸次各國ニ行ハル、ニ至レリ

労働保険ノ主義ニ關シテ現今歐洲各國ノ實例ニ二種ノ區別アリ、曰ク任意保険、曰ク強制保険是ナリ。此二主義ノ分ル、所ハ強制加入ノ有無ニ在リ。之ヲ詳言センカ政府ハ労働者若シクハ、資本家ニ對シテ労働保険ニ加入スルノ義務ヲ負ハシムルヤ否ヤニ在リ。一派ノ學說ニ依レバ強制保険ノ條件トシテハ強制加入ノ外尙ホ強制設備ヲ加ヘザル可ラズ、即チ政府ガ法定ノ設備ヲナスコトヲ労働者若シクハ資本家ニ強行シ、且ツ之ニ加入スルコトヲ強行スルニ非ンバ強制保険ノ性質ヲ欠クモノトナセリ。余ノ見ル所ハ之ト異ナリ若シ夫レ強制保険ノ實行ヲ終極マデ遂行セント欲セバ此二條件ヲ充タサル可ラザルヤ論ナキノミ、然レドモ強制保険ハ必ズシモ強制設備ヲ俟ツテ始メテ行ハル、者ニ非ラズ、強制設備ナキ場合ニ於テモ特定ノ條件ニ依ツテ公認サレタル保険設備ニ就キ強制加入ヲ強行セバ強制保険ノ目的ヲ達スルコト敢テ難シトセズ、余ハ各國實例ノ之ヲ證明スルニ足ルモノアルヲ疑ハズ、反之シテ只強制設備ノミ存

在シテ強制加入ヲ遂行セザル場合ニ於テハ強制保険ハ何ニ依ツテ其目的ヲ達スルコトヲ得ン、只強制加入ノ鞏固ナルノ結果ハ則チ之アラシモ其他ノ點ニ於テハ任意保険ト異ナルコトナカルベシ。夫ノ官業保險局ヲ設立シ而シテ強制加入ノ主義ヲ採ラザル處ニ就キ之ヲ徵センカ、此事實ハ明カニ之ヲ認ムルヲ得ベシ。由是觀之レバ強制保険ノ條件ハ只強制加入ノ主義ヲ守ルニ在リ、其設備ノ強制ナルト任意ナルトハ之ヲ問フヲ要セズ、余ハ各國保險制ヲ講究スルニ當リ強制加入ノ主義ヲ採ラザル場合ニ於テハ官業保險ト雖モ尙ホ之ヲ以テ任意保険トナシ、又強制加入ノ主義ヲ採リタル場合ニハ任意設備ヲ認メタルモ尙之ヲ強制保険ノ一種ニ舉ゲント欲ス

任意保険ト強制保険トヲ比較シ其優劣ヲ断定スルコトハ容易ノ業ニ非ラズ、茲ニ各國労働保険ノ來歴ヲ按ズルニ從來ハ任意主義ヲ通則トセリ、只二三ノ國ニ於テ極メテ狹隘ナル範圍ニ強制主義ヲ採用シタルヲ見ル

近年獨逸政府ガ鐵血宰相ノ創意ニ基キ強制主義ニ依ツテ各種ノ勞働保險ヲ實行シタルヨリ各國之ニ倣フモノ漸次其數ヲ加フルニ至レリ。是故ニ強制保險ニ關スル各國ノ實驗ハ日尙ホ淺ク其法律ハ歲ヲ追フテ改正サレ殆ンド試驗時代ニ在ルノ看ナキニ非ラズ。從ツテ其利害ノ計算ヲナスノ資料少ナシトス。只強制主義ハ各國社會改良家ノ多數ノ贊同ヲ得多少ノ變形ヲ以テ立法ノ基礎トナルノ事實ヲ見ルトキハ此主義ノ勢力亦之ヲ知ルニ難カラザルベシ。願フニ強制保險ノ利害ヲ判斷セント欲セバ主トシテ國民ノ氣風ヲ參酌セザル可ラズ。夫ノ英國人ノ如キ自尊獨立ノ氣象ニ富ミ政府ノ干涉ハ成ルベク之ヲ避ケントスルモノニ在ツテハ強制保險ハ到底之ヲ行フニ由ナカルベク。假令ヒ之ヲ行フモ却ツテ害アツテ利ナカルベシ。寧ロ之ヲ任意保險ニ放任スルニ如カザルナリ。然レドモ之ト正反對ノ氣象ヲ有セル獨逸人ノ如キニ在ツテハ任意主義ニノミ依頼スルトキハ勞働保險ノ發達ハ甚ダ緩漫ニシテ從ツテ時勢ノ急ニ應ズ

コト能ハザルベシ。是ノ如キ國民ニ對シテ強制主義ヲ採ルハ亦已ムヲ得ザルコト、云フベシ。要之スルニ國民ノ氣風奈何ニ依ツテ利害ノ計較ヲナサザル可ラズ。今假リニ此論點ヲ離レテ一般ニ強制保險ノ利害ヲ説明センカ勞働保險ヲ普及セシムルガ爲メニハ強制保險ノ利タル固ヨリ爭フ可ラザル所ナリトス。然リト雖モ強制保險ニ於テハ勞働者ノ之ニ加入スルハ保險ノ必要ヲ自覺シタルニ依ルニ非ラズシテ、只政府ノ命令ヲ違背スルノ恐アルガ爲メニスルモノナルガ故ニ立法ノ精神ハ彼等ノ間ニ明ナラズ。社會組織ニ對スル勞働者ノ不平咨嗟ヲ鎮定スルノ力ハ之ナシトス。余曾ツテ歐洲ニ留學セルヤ獨逸ニ留マルコト數月偶々一勞働者ニ就キ強制保險ニ關スル彼等ノ意向ヲ窺ヒシニ、彼ハ冷然トシテ語ツテ曰ク余輩ハ消費稅其他各種ノ稅目ヲ以テ政府ニ納ムル所少ナキニ非ラズ、然ルニ政府ハ尙ホ之ヲ以テ足レリトセズ更ニ進ンデ保險稅ヲ徵收セリ、政府ノ誅求何ゾ是ノ如ク甚シキヤト。願フニ此勞働者ハ社會黨ニ加盟セ

ル者ナリ、從ツテ其思想ノ詭激ニ失セルコト是ノ如キハ敢テ怪ムニ足ズト雖モ獨逸勞働者ノ強制保險ニ對スル感想ノ一斑ハ之ニ由ツテ推スコトヲ得ベシ。更ラニ強制保險ニ關スル資本家ノ態度ヲ按スルニ彼等ガ勞働保險ニ關シ多少ノ負擔ヲナセルハ彼等ノ任意ニ出ルニ非ラズ、強制ノ結果ナルガ爲メニ彼等ノ抱ク所ノ感情モ亦勞働者ト同一ナルモノ、如シ。而シテ之ニ關スル勞働者ノ感情ハ殊ニ奇ナルモノアリ、彼等ハ資本家ガ此負擔ヲナスハ當然ノ義務ナリトシ、毫モ資本家ヲ德トスルノ念ナシ、是等ノ事情ハ強制保險ノ弊害トシテ認ムベキモノナリ、若シ夫レ任意保險ニ在ツテハ勞働者ノ保險ニ加入スルヤ其思想ハ全タク之ト其趣ヲ異ニスベク、又資本家ノ之ニ加入スルハ勞働者ト資本家トノ調和ヲ保ツニ於テ其效大ナルベシ、要之スルニ強制保險ハ社會改良ノ實效ヲ收ムルニ就キテ固ヨリ間然スル所ナキモ、只其倫理的、道義的、基礎ヲ預收セシムルノ恐ナシトセズ、從ツテ社會ノ調和ニ益スルコト少ナシト云ハザルヲ得

勞働保險ニ  
關スル費用  
ノ負擔

ズ

勞働保險ニ關スル費用ノ負擔ニ就テハ保險ノ組織及ビ保險ノ種類ニ依ツテ其趣ヲ異ニスベキコトハ言ヲ俟タザルモ之ヲ概言センカ、勞働者、資本家及ビ國家ノ共同負擔トナスコトハ各國立法ノ趨勢ナリトス。順フニ勞働保險ノ被保人トシテ保險ノ利益ヲ受クル所ノ者ハ勞働者ナルヲ以テ保險料ノ負擔ハ獨リ勞働者ニ歸スルヲ以テ當然ナリトスルモ、勞働者ノ僅少ナル所得ヲ割キテ保險料ヲ支出セシムルノミニテハ到底充分ナル救済ヲナス能ハザルノ憂アリ、殊ニ老廢保險ノ如キ鉅額ノ費用ヲ要スル場合ニ於テ其ノ然ルヲ見ル。於是乎資本家ヲシテ之ヲ分擔セシメ、尙ホ進ンデハ國家ヲシテ相當ノ補助ヲナサシムルノ必要起レリ、或ハ曰ク資本家ヲシテ此費用ノ一分ヲ負擔セシメ、保險ノ組織ニ參加セシムルハ勞働者ノ獨立心ヲ妨グ之ニ對シテ屈辱ヲ甘ンズルノ結果ヲ生ズベシト、此議ヤ英佛兩國ニ於テ盛ニ行ハル、所ノモノタリ、余ハ或程度ニ於テ此

事實ヲ認ムル者タリ、然リト雖モ資本家ヲシテ費用ヲ分擔セシムルコトハ保險技術上至大ノ利益アリ、又社會ノ調和ニ資スル所少ナキニ非ラズトセバ一方ニ於テ多少ノ弊害アルモ社會改良上之ヲ忍バザル可ラズ、若シ夫レ保險ノ組織内ニ於ケル資本家ノ勢力ニ至ツテハ之ヲ防止スルニ於テ自ラ其途アルベシ

工業主ヲシテ保險ノ費用ヲ分擔セシムルノ理由ハ右述ブル所ノ如シ、然リ而シテ此理由ハ一般ノ勞働保險ニ關スルモノタリ、若夫レ災厄保險ニ關シテハ各國ノ制度ニ於テ其費用ハ全然工業主ノ負擔ニ歸スルヲ例トセリ、只埃太利ニテ勞働者ヲシテ小部分ノ負擔ヲナサシムルアルノミ、願フニ災厄保險ハ他種ノ勞働保險ト稍々其性質ヲ異ニセリ、蓋シ災厄保險ノ目的トスル所ハ業務災厄ニ在リ、而シテ業務災厄ノ原因タル工場設備ノ不完全ナルコト器械ノ整調宜シキヲ得ザルコト等勞働ト密接ノ關係ヲ有スル外部ノ事情ニ基ケルヲ常トス、夫ノ疾病老廢ノ如ク勞働ト直接

ノ關係ナク人生免ル可ラザル自然的狀態トシテ起ルモノト其趣ヲ異ニセリ、於是乎災厄ニ對スル責任ハ工業主之ヲ負ハザル可ラザルコト、ナル、是レ災厄保險ニ關スル費用ノ負擔ヲ工業主ニ歸スル所以ナリ、勞働保險ノ費用ヲ國家ニ分擔セシムルコトハ最近ノ事例ナリ、而モ各國ニ於テ有力ナル立法ノ方針トナレリ、抑モ政府ガ社會政策ノ必要ノ爲メニ相當ノ費用ヲ支出スルハ當然ノ事タリ、殊ニ勞働保險ノ如キ最モ緊要ナル社會改良策ニ對シテハ財力ノ許ス限リ補助金ヲ與フベキモノタルコトハ誰カ亦之ヲ疑ハン、産業保護ノ名稱ノ下ニ資本家ガ多額ノ國費ヲ消耗セルコトハ各國常ニ見ル所タリ、政府ハ獨リ勞働者ニ對シテ吝ナルノ理アラシヤ、況ンヤ勞働保險ニ關シテハ保險技術上政府ノ補助ヲ必要トスル場合アルニ於テヲヤ

國家ヲシテ勞働保險ノ費用ヲ分擔セシムルノ理由ハ管ニ社會政策ノ必要ニ基ケルノミナラズ更ラニ財政上ノ必要ニ基ケルモノアリ、願フニ勞

働保險ナルモノハ労働者ヲシテ窮民ニ陥ルコトヲ豫防スルノ方策ナリ、此方策ニシテ不完全ナランカ窮民ハ次第ニ増加シ殆ンド其ノ底止スル所ヲ知ラザルベシ。歐洲各國ニ於テハ窮民救助ヲ以テ公共ノ義務トナシ殊ニ窮民救助ノ制ヲ設クルハ各國ノ恒例ナリ、而シテ之ガ爲メニ支出スル所ノ費用ハ歳ヲ追フテ増加セリ、各國財政ノ局ニ當ル者頻リニ苦心シ或ハ窮民ノ範圍ヲ制限シ成ルベク其數ヲ減少センコトヲ圖リ或ハ自宅救助ヲ嚴密ニシ救助院救助ヲ厲行シ由ツテ以テ濫惠ノ弊ヲ矯メントスル等種々ノ方法ヲ設クルモ、窮民救助費ノ増加ハ滔々トシテ禦グ可ラザルモノアリ、之ヲ防止スルノ方法ニシテ充分其效ヲ奏シタルモノハ未ダ之ナキガ如シ、然ルニ獨逸ニテハ強制保險ヲ施行セシ以來窮民救助費ハ比較的增加ノ趨勢ナシ、只此制度ノ實行ハ多ク年所ヲ經ザルカ爲メニ救助費ノ減少セル事實ハ未ダ俄カニ之ヲ認ムルヲ得ザルノミ、果シテ然ラバ獨逸政府ガ労働保險ノ爲メニ鉅額ノ補助ヲナセルモ之ガ爲メニ窮民

救助費ノ増加ヲ防グコトヲ得タレバ一方ニ失フ所アルモ一方ニ得ル所アリ一國財政ノ上ニ於テ彼是損益スル所ナシト云ハザルヲ得ズ、若シ夫レ數十年後此保險制ノ爲ニ窮民ノ數著シク減少スルニ及ベバ獨逸政府ハ財政上偉大ナル效蹟ヲ奏シタルモノナルベシ、聞説獨逸ニ於テ労働保險法案ガ議會ノ議ニ上ルヤ社會黨ハ頻リニ冷語ヲ放ツテ之ヲ傷ケタリ或ハ之ヲ稱シテ「マンテル」法案ト云ヘリ、蓋シ窮民救助法ノ實質ニ被ラシムルニ労働保險ノ形式ヲ以テシ由ツテ以テ窮民救助ノ費用ヲ節約セントスルノ意義ナラン、顧フニ鐵血宰相ガ此法律ヲ創成シタルハ社會問題ノ解決方法ト認メタルニ依ル彼ノ眼中ニ財政計畫ナキコトハ疑ヲ容レザル所ナルモ之ガ結果ヲ見レバ社會黨ノ批評モ亦幾分ノ眞理ヲ含メルモノタリ、要之スルニ労働保險ニ對シテ政府ノ補助ハ財政上必要ノ處置ナリト云ハザルヲ得ズ

余ハ是ヨリ進ンデ先キニ掲グル所ノ災厄疾病及ビ老廢ニ對スル三種ノ



## 災厄保險

保險ニ就キ各國ノ實例ヲ叙述セン

## 第一 災厄保險

災厄保險ハ業務災厄ニ對スル保險ナルコトハ先ニ之ヲ説明セリ。近時各國ノ社會立法ニ於テ業務災厄ニ關スル責任ハ概シテ之ヲ工業主ニ歸セシメ之ト同時ニ保險制ニ依ツテ被害ノ勞働者ヲ救済スルヲ以テ通則トセリ。先是業務災厄ノ性質未ダ立法者ノ間ニ明ナラズ之ニ關スル救済ハ只民法ノ規定ニ基キテ極メテ狹隘ナル範圍ニ於テ勞働者ハ工業主ニ對シ損害賠償ヲ請求スルノ方法アルノミ。然ルニ各國民法ノ規定ハ社會政策ノ目的ヲ達スル能ハズ勞働者ノ疾苦ハ終ニ之ヲ救済スルニ由ナキヲ以テ次第ニ特別法ヲ設ケテ賠償ノ範圍ヲ擴張スルノ傾向ヲ生ジタリ。此特別法ハ民法ニ比スレバ社會政策上幾分ノ進歩ヲ示セルコト固ヨリ疑ヲ容レザルモ到底充分ノ效果ヲ奏スル能ハザリキ。於是乎災厄保險ノ制度起リ勞働者ニ對シテハ救済ヲ求メ得ベキ範圍ヲ非常ニ擴張シ工

業主ニ對シテハ或ハ任意ニ或ハ強制ニ保險ノ方法ニ依ツテ其負擔ヲ容易ナラシメ由ツテ以テ二者ノ利益ヲ關停スルコトヲ圖レリ。歐洲各國ニ於ケル災厄保險制ノ現況ヲ按スルニ其主義ニ基キ任意保險ト強制保險ノ二種ニ分レタリ。而シテ任意保險ニハ更ラニ二種ノ區別ヲ生ジタリ、一ハ法律ヲ以テ只勞働者ガ工業主ニ對シテ要求スベキ賠償ノ範圍及ビ程度ヲ定メ而シテ奈何ナル方法ニ依ツテ保險ヲナスカハ工業主ノ意思ニ一任スルモノニシテ一ハ災厄ニ關シ工業主ト勞働者トノ間ニ權義ノ關係ヲ定ムルト同時ニ官業トシテ災厄保險ノ業ヲ營ミ工業主ヲシテ成ルベク之ニ依ラシムルノ方針ヲ立ルモノ是ナリ。前者ハ英吉利佛蘭西捷馬ニ於テ行ハル、制度ニシテ後者ハ瑞典ニ行ハル、モノタリ。強制保險ニモ亦二種ノ區別アリ一ハ強制加入ノ主義ヲ採ツテ強制設備ノ主義ヲ含テタルモノニシテ一ハ是等二主義ヲ併用セルモノナリ。以太利和蘭ノ現行法ハ前者ニ屬シ獨逸、奧太利、那威ノ現行法ハ後者ニ屬セリ。

以太利和蘭ニテハ官立災厄保險局ヲ設ケ又特定ノ條件ノ下營業保險相互保險等ヲ公認シ而シテ工業主ニ對シ必ラズ保險ニ加入スルコトヲ強行スルモ其ノ加入スベキ保險ノ種類ニ就テハ之ヲ工業主ノ任意トナシ敢テ政府ノ干涉ヲ加フルコトナシ。獨逸、奧、太利ニ於テハ工業主ヲシテ同業ノ關係ヲ標準トシ保險組合ヲ組織シテ災厄保險ヲ營マシメ、那威ニ於テハ官立保險局ヲ設ケ何レモ工業主ヲシテ之ニ加入スルコトヲ強制セリ

## 疾病保險

## 第二 疾病保險

疾病保險ハ各種ノ勞働保險中最モ古キ歴史ヲ有シ又其ノ行ハル、範圍ノ廣キコト他ノ勞働保險ノ右ニ出ルモノトス。抑モ疾病保險ハ其發生ノ當初ヨリ任意保險ノ方法ニ依リ現今ニ至ルマデ尙ホ此舊套ヲ改メズ、歐洲各國ニ於テ強制保險トシテハ僅カニ獨逸、奧、太利ノ二國ニ行ハル、ニ過ギス其他ノ諸國ニ於テハ悉ク任意保險トシテ偉大ナル發達ヲナセリ。願

フニ疾病ナル事情ハ災厄、老廢ニ比スレバ保險ノ經營極メテ容易ナルモノナリ之ガ計算ニ就テハ強チ大數ニ依ツテ平均ヲ得ルノ必要ナク、狹隘ナル地域ニ於テ少數ノ人員ヲ以テシテモ尙ホ之ヲ組織スルコトヲ得ルナリ、加之ナラズ救済ノ方法ノ爲メニ巨額ノ費用ヲ支出スルヲ要セズ、僅少ノ保險掛ヲ徵收シテ救済ノ目的ヲ達スルコトヲ得ベシ。是等ノ理由ニ基キテ疾病保險ニ就テハ強制主義ヲ適用セザルモ任意保險トシテ發達スルニ至レリ。現今各國ノ疾病保險ハ相互保險ノ組織ニ依リテ之ヲ營ムヲ通例トセリ。而モ狹隘ナル地域ヲ限リ少數ノ員數ヲ以テ之ヲ組織セルモノ多シ是レ相互ノ監督ニ依リテ疾病ヲ虛構シテ不當ノ利ヲ得ルノ弊害ヲ匡正スルノ必要ニ基ケルモノトス

疾病ニ關スル相互保險ハ共濟組合ノ名稱ヲ以テ各國ニ行ハレタリ、フレンドリ、ソサイエチー〔英〕、ソシエテ、ド、スクール、ミューチユエル〔佛〕、ヒュルフス、カッセン〔獨〕ト云フモノ即チ是ナリ。共濟組合ノ事業タル只疾病保險ニノ

ミ限ルニ非ラズ、疾病以外ノ事情例ヘバ老衰瘵疾等ニ對スル救濟ノ設備ヲナセルモノモ亦少ナシトセズ。然レドモ各國共濟組合ノ現況ヲ按スルニ其ノ主タル事業ハ疾病保險ナリトス。英國ニ於テ共濟組合ノ學者トシテ有名ナル「ウキルキンソン」ノ如キモ此事實ヲ斷定セリ。獨逸ノ現行共濟組合法ヲ見ルニ共濟組合ノ事業ハ成ルベク疾病保險ニ限ルノ方針ヲ採レリ。佛國ニ於テモ亦同一ノ趨勢アリト云フ。

歐洲各國ノ職工組合ハ疾病保險ヲ營メルモノ多シ。元來職工組合ノ主眼トスル所ハ團體ノ勢力ヲ以テ資本家ニ對抗シ組合員ノ勞働條件ヲ改良スルニ在リト雖モ此目的ノ爲ニスル運動ハ臨時ニ起ル場合多ク之ヲ以テ組合ノ常業トナス能ハズ。於是乎組合ノ常業トシテ勞働保險ヲ營ムコト、ナレリ而シテ各種ノ保險中疾病保險ハ最モ輕易ニシテ實行シ易キモノナルガ故ニ此種ノ保險ハ盛ンニ行ハル、ニ至レリ。

疾病ニ關スル強制保險ハ獨逸ヲ以テ嚆矢トス、一八八三年ニ制定セラレ

タル疾病保險法即チ是ナリ。次イデ埃太利ハ之ニ則ツテ疾病保險法ヲ制定セリ。抑モ獨逸ニ於テ疾病ニ關スル強制保險ハ突如トシテ起リタルモノニ非ラズ、該法ノ制定以前普魯西ニハ之ガ先驅タルベキ一種ノ法律アリ、此法律ニ依レバ各自治體ハ必要ト認ムルトキハ住民ニ對シ其地域内ニ在ル所ノ共濟組合ニ加入スルノ義務ヲ負ハシムルノ權能ヲ有スルナリ。顧フニ此法律タル強制保險ノ基礎ヲナセル所ノ強制加入ノ主義ヲ認メタルモノナリ。只政府ガ直接ニ之ヲ命令セズシテ自治體ヲシテ任意ニ之ヲ命令セシメタルコトハ疾病保險法ニ比シ稍々其趣ヲ異ニセルノミ。獨逸二國ノ疾病保險法ニ於テハ強制加入ノ主義ニ加フルニ強制設備ノ主義ヲ以テセリ。即チ法律ノ範圍内ニ在ル所ノ勞働者ニ對シ新ニ相互保險ノ設備ヲナシ之ニ加入スルノ義務ヲ負ハシメタリ。之ト同時ニ工業主ニ對シテ自己ノ僱使セル勞働者ト與ニ保險ニ加入スルコトヲ強制セリ。但シ工業主ハ勞働者ノ爲メニ費用ノ負擔ヲナスモ保險ノ利益ヲ受クル

ヲ得ザルコト、セリ、保險ノ設備ニ於テハ同一ノ自治區ニ住居スルコト、同一ノ工場鑛山等ニ傭使セラル、コト、或ハ同一ノ手工業組合ニ屬セルコト等種々ノ標準ニ基キテ特別ノ組合ヲ組織セシムルナリ、又特定ノ條件ノ下既ニ存在セル共濟組合ヲ以テ之ニ代フルコトヲ許セリ

### 老廢保險

#### 第三 老廢保險

老廢保險ハ窮民救助制ト密接ノ關係ヲ有シ各種ノ勞働保險中最モ重要ナルモノトス。方今歐洲各國ニ於テ老廢保險ノ發達ハ尙ホ幼稚ニシテ他ノ勞働保險ノ如クニ廣ク行ハレズ、只若干ノ國ニ於テ官業保險トシテ或ハ任意主義ニ依リ或ハ強制主義ニ依リテ實行セラレタリ。顧フニ老廢保險ハ永久ニ勞働力ヲ失ヒタル勞働者ニ對スル救濟ヲ目的トセリ、此種勞働者ノ救濟ヲナス爲メニハ終身年金ヲ給スルカ、然ラザレバ多額ノ一時金ヲ給セザル可カラズ、是等ノ費用ヲ支出セント欲セバ比較的高額ノ保險料ヲ徵收セザル可ラズ、是レ多數勞働者ノ堪ユル所ニ非ルナリ且又老

廢保險ノ費用ガ巨額ニ上ル結果トシテ確實ナル經營ヲナスガ爲メニハ保險技術上成ルベク被保人ノ數ヲ多クシ之ニ依ツテ計算ノ平均ヲ保ツノ必要アリ、夫ノ疾病保險ノ如ク少數ノ勞働者ヲ以テ狹隘ナル地域ニ之ヲ組織スルヲ許サルナリ、必ラズヤ大規模ノ保險組織ニ依ラザル可ラズ是レ亦勞働者ノナシ得ヘキコトニ非ルナリ、是等ノ事情ニ基キ各國ノ老廢保險ハ官業トシテ經營セラレタルモノ多シ、獨逸ニ於テハ相互保險ト官業保險トヲ折衷シテ其組織ヲ立テタリ、共濟組合ノ祖國トモ稱セラレタル英國ニ於テスラ共濟組合ノ事業トシテ此種ノ保險ヲ營メルモノ甚ダ少ナシト云フ

老廢保險ニ關シテモ亦任意主義ト強制主義トノ區別アリ、以太利、白耳義佛蘭西ニ於テハ政府ハ老廢保險局ヲ設ケテ保險事業ヲ營ムモ之ニ加入スルト否トハ勞働者ノ意志ニ放任セリ而シテ之ニ加入セル者ニ對シテ救濟ヲ行フ場合ニハ政府ハ特定ノ準則ニ依リテ補助金ヲ與ヘ其ノ徵收

セル保険料ニ相當セル程度ヲ超ヘテ保険ノ利益ヲ被ラシムルヲ例トセリ。老廢ニ對スル強制保険ノ實例ハ獨逸ニ於テ之ヲ見ル。該國老廢保險法ヲ按スルニ加入ニ關スル強制ヲ實行スルト同時ニ設備ニ關スル強制ヲ實行セリ。其保險組織ハ勞働者ト工業主トヲ以テ組合員トセル相互保險ナルコトハ疾病保險ト其趣ヲ一ニセリ。然レドモ此組合ニ對スル政府ノ監督ハ極メテ嚴重ニシテ機關ノ構成ニ就テハ官吏之ニ參加シ殆ンド半官半私ノ看ヲ呈セリ。又組合ノ範圍ハ成ルベク之ヲ廣クシ一聯邦ヲ以テ一組合ノ地域トセルアリ。或ハ數聯邦ヲ合セテ一組合ノ地域トナセルモアリ。夫ノ疾病保險ノ如クニ狹隘ナル範圍ニ限ラレタルモノニ非ラズ。保險料ノ負擔ハ勞働者ト工業主ヲシテ之ヲ分擔セシメ政府ハ年々巨額ノ補助金ヲ交付シテ被保人ノ利益ヲ圖レリ。

## 第十五章 職工組合

職工組合ノ性質

職工組合トハ勞働者ガ勞働條件ニ關シ資本家ニ對抗スル目的ヲ以テ同業ノ關係ニ基キ組織セル團結ヲ云フ。凡ソ勞働者ガ自己ノ地位ヲ改良進歩セシムルガ爲メニ組織セル團體ハ其種類固ヨリ多ク。或ハ共濟組合ト云ヒ。或ハ消費組合ト云ヒ。或ハ生産組合ト云フ。是等ノ組合ハ各々特殊ノ目的ヲ有シ悉ク勞働問題解釋ノ方法タリ。職工組合ナルモノハ亦其一種ニシテ其特色トスル所ハ他ナシ。勞働者ヲシテ團結ノ勢力ニ依リ資本家ニ對シ自己ニ利益アル勞働條件ヲ要求セシムルニ在リ。勞働條件ハ勞力ニ關スル賣買ノ條件ナリ。猶ホ商品ニ關スル賣買ノ條件ノ如シ。抑モ勞力ハ一種ノ商品ナリ之ヲ賣ルモノハ勞働者ナリ之ヲ買フ者ハ資本家ナリ。勞働者ハ最モ高價ニ之ヲ賣ラント欲シ資本家ハ最モ低價ニ之ヲ買ハント欲ス。此點ニ就キテハ勞力ノ賣買ハ商品ノ賣買トモ。

其趣ヲ異ニスルコトナシ。然リト雖モ勞力ト商品トハ本來ノ性質稍々異ナル所アリ、從ツテ賣買ノ關係ニ於テモ亦二者其狀態ヲ異ニセズンバアラズ。願フニ勞力ナルモノハ勞働者ノ身體ニ附着セル商品ナリ、勞働者ノ身體ヲ離レテ勞力ノ存在ヲ想像スルコトヲ得ズ。是故ニ勞力ノ供給ハ即チ勞働者ノ供給ナリ、而シテ勞働者ノ供給ノ増減ハ種々ノ社會事情ニ依ツテ定マルモノニシテ勞働者自身ニハ之ヲ奈何トモスル能ハズ。去レバ商品ニ在ツテハ供給ガ需要ニ超過シ從ツテ價格低下セル場合ニ當リ、生産者ハ生産ヲ減少シ供給ヲ制限シ需要ト鈞衡ヲ保タシメ其價格ヲ維持スルコト容易ナリト雖モ、勞力ニ在ツテハ此屈伸力ヲ欠ケルヲ以テ供給ガ需要ニ超過セル場合ニハ著シク賃銀ノ減少ヲ見ルベク再タビ需要ノ増加スルマデハ之ヲ回復スルニ由ナカルベシ。加之ナラズ商品ニ在ツテハ一地方ニ於テ需要減少シ價格低下セル場合ニ之ヲ他地方ニ輸送シ高價ニ販賣スルノ便宜ヲ有セルモ、勞力ニ在ツテハ此移轉力ハ殆ンド之ナ

シト云ハザル可ラズ。蓋シ交通機關完備シ轉居ノ容易ナル處ニ在ツテモ家族ノ關係、生活ノ狀況等ノ事情ノ爲メニ妄リニ其住所ヲ轉ジ職業ヲ百里ノ外ニ求ムルコトハ勞働者ノナスヲ好マザル所ナリ、況ンヤ交通機關ノ發達甚ダ幼稚ナル處ニ於テヤ。且夫レ勞力ナルモノハ勞働者ガ由ツテ以テ日々ノ生計ヲ支フル所ノ惟一ノ淵源ナリ。夫ノ商品ニ於ケルガ如クニ買手ノ指定セル價格ニシテ賣手ノ意ニ滿タザルトキハ暫ラク之ヲ保存シテ他日ノ好機會ヲ待ツガ如キ商略ハ勞力ノ賣買ニ於テハ決シテ行ハル可ラザルコトタリ。是ヲ以テ勞働者ハ勞力ヲ估賣スルニ當リ相率イテ賣急ギヲナシ其間ニ競争ノ絶ヘザルハ亦自然ノ勢ナリトス。而シテ資本家ハ此競争ヲ利用シテ充分低價ニ勞力ヲ買フコトヲ得ベク假令ヒ勞力ノ需要ハ供給ニ超過スル場合ト雖モ此事情ノ爲メニ勞働者ハ其利益ヲ主張スルコト能ハズ終ニ資本家ノ壓倒スル所トナルハ亦已ムヲ得ザルコト、云フベシ以上述ブル所ヲ約言スレバ勞力ハ商品ト其性質ヲ

異ニシ商品ノ賣買ニ於テハ買手ト賣手トハ常ニ對等ノ地位ニ立ツコトヲ得ルモ、勞力ノ賣買ニ於テハ資本家ハ勞働者ヲ凌駕スルノ力ヲ有セルコト是ナリ

勞働條件ヲ定ムルニ當ツテ勞働者ト資本家トノ關係果シテ是ノ如シトセバ勞働者ノ爲メニ圍リ之ヲ奈何ニセバ可ナランカ、勞働條件中特定ノ事項ニ關シテハ或ル程度マデハ政府ノ權力ニ訴ヘテ資本家ノ抑壓ヲ防止スルコトヲ得ン、例ヘバ執業ノ方法、勞働時間、休憩時間、定期休業日、危害ノ豫防等ニ關シテ各國政府ハ工場法ヲ設ケテ一定ノ準則ヲ立テ勞働者資本家ノ自由契約ニ一任セザルガ如シ、然リト雖モ勞働條件ノ最モ重要ナルモノハ賃銀ノ高低ニ在リ、之ニ關シテハ政府ノ權力ノ及ブベキ範圍ニ非ラズ必ラズヤ雙方ノ自由意志ニ基キテ之ヲ定メザル可ラズ、或ハ法律ヲ以テ各種ノ勞力ニ對シ賃銀ノ最低限度ヲ定ムルノ議ヲ立ツル者アリ、此議ヤ理論上正當ナルモ到底實行サルベキコトニ非ラズ、要之スルニ

勞働條件ヲ定ムルハ勞働者ト資本家トノ自由競争ニ依ルヲ以テ現時經濟組織ノ通義トナサル可ラズ、去レバ之ニ處スルノ方法ハ勞働者ニ一任セザル可ラズ、然ルニ勞力ノ賣買ニ於テ勞働者ト資本家トノ地位ハ強弱其勢ヲ異ニセルコトハ先キニ述ブル所ノ如シトセバ勞働者ガ個々獨立シテ資本家ニ當ルモ到底其効ナカラン、必ラズヤ團結ノ勢力ヲ以テ之ニ對抗セザル可ラズ、近時歐洲各國ニ於テ盛ンニ行ハル、所ノ職工組合ナルモノハ實ニ此必要ニ應ジテ起リシモノナリ、願フニ歐洲各國ノ職工組合ハ其事業ヤ一ニシテ足ラズ其活動ヤ區々ニ分レタルモ其ノ主眼ノ目的トスル所ハ他ナシ、勞力ノ賣買ヲシテ商品ノ賣買ト同一ナラシメ勞働者ト資本家トノ關係ヲシテ商品ノ賣手ト買手トノ關係ノ如ク對等ノ地位ニ立タシムルニ在ルノミ、余ハ次ギニ職工組合ノ組織及ビ活動ヲ説明シ由ツテ以テ職工組合ガ奈何ニシテ此目的ヲ達スルカラ明ニセント欲ス

職工組合ノ組織及ビ活動ヲ明ニスルハ英國ノ實例ニ依ルヲ以テ最モ適當ナリトナス、奈何ントナレバ英國ハ歐洲ニ於ケル職工組合ノ祖國ニシテ今ニ至ルマデ其發達ハ他國ノ企テ及ブ所ニ非レバナリ、現今英國ニ於ケル職工組合ノ組織ニ就キテハ各組合ノ間ニ多少ノ異同アリト雖モ、要之スルニ同一職業ヲ標準トシテ組織セラレタル勞働者ノ團體ナリ、而シテ其地域ハ或ハ廣ク全國ニ涉リ尙ホ濠洲、加奈太等ノ殖民地ニ及ブモノアリ、或ハ數州ニ跨ルモノアリ、或ハ只一州ノミニ限レルモノアリ、何レモ主要ノ工業地ニ本部ヲ設ケ各地方ニ支部ヲ設ケ互ニ聯絡ヲ通ジ事業運動ノ統一ヲ圖レリ

職工組合ノ機關ハ本部ニ於テハ書記長、會計及ビ委員會ヲ以テ執行機關トシ、各支部ノ代表者ヲ以テ組織シタル本部會ヲ以テ議決機關トナス、支部ニ於ケル執行機關ノ組織ハ本部ト異ナルコトナシ、議決機關ハ支部會或ハ組合員ノ總會或ハ組合員ノ代表者ヲ以テ、組織セル會議トナス、是等

ノコトタル組合員ノ多少ニ依ツテ其趣ヲ異ニセリ、因ニ云フ本部ノ書記長ナル者ハ組合ノ首領ニシテ有力ナル地位ナリ、全組合員ノ投票ヲ以テ之ヲ選舉シ最モ威望ニ富メル者ヲ以テ之ニ充テタリ

職工組合ハ組合員ノ資格ヲ定メ此資格ヲ有スル者ニ非レバ加入スルコトヲ許ササルヲ常トス、此資格トシテハ徒弟制度ノ存在セル職業ニ就キテハ徒弟年限ヲ終了スルヲ以テ條件トシ、又徒弟制度ナキ場合ニハ其技術ニ關シテ組合員ノ證明ヲ要スルコト、セリ、此規定タル之ニ由ツテ組合員ノ員數ヲ制限シ同種職工ノ供給ヲシテ妄リニ増加スルコトナカラシムルノ目的ニ出ヅルナリ

職工組合ハ勞働紹介ノ業ヲ營ムヲ例トス、組合員ニシテ業ヲ失ヒタルモノアルトキハ所屬ノ支部ニ届出デ支部ノ役員ハ其地方ニ於テ適當ノ工業主ニ就キテ傭入ノ紹介ヲナスノ義務アリ、若シ其地方ニ於テ業ニ就カシムルコト能ハザルトキハ他ノ支部ニ通知シ相當ノ地位ヲ與ヘシムル



ナリ。此場合ニハ轉居ニ關スル費用ハ所屬ノ支部ヨリ支出スルモノトス。此方法ニ依リ特定ノ地方ニ於テ勞働者ノ供給ニ剩餘アルトキハ之ヲ供給ノ不足セル他地方ニ移シ以テ需要ト供給ノ鈞衡ヲ保タシムルコトヲ得ベク、勞力ニ關スル供給超過ノ弊ヲ杜絶スルカ爲メニ此方法ノ必要ナルコト言フ俟タズ

勞働保險ハ職工組合ノ主要ナル事業ナリ、或ハ災厄ニ對シ或ハ疾病ニ對シ或ハ老癯ニ對シ救濟ノ制度ヲ立テタリ、之ガ資金トシテハ組合員ヨリ徵收シタル醜金ヲ積立テ定規ノ率ニ應ジテ各種ノ場合ニ於テ適當ノ救濟ヲナセリ、是レ勞働者ヲシテ生活ノ安全ヲ保タシムルガ爲メニ欠ク可カラザルコトタリ、加之ナラズ各組合トモ失業者ニ對スル救濟基金ノ制ヲ設ケ組合員ニシテ正當ノ理由ニ基ツキテ失業ノ地位ニ陥リタル者アルトキハ組合ハ一方ニ於テハ先キニ述ブルガ如ク勞働ノ紹介ヲナシ一方ニ於テハ失業中生計ニ必要ナル金額ヲ給スルコト、セリ、此ノ失業救

濟制度ハ勞働者ヲシテ資本家ニ對シテ勞働條件ニ關シテ正當ノ要求ヲナサシムルノ後援ヲナスモノタリ

職工組合ハ勞働條件ニ關スル一定ノ準則ヲ定メ、組合員ヲシテ之ニ基キテ資本家ト勞働ノ契約ヲ結ハシムルヲ常トス、例ヘハ勞働時間ハ幾時間ヲ超過ス可ラズ賃銀ハ若干以下ナル可ラズト云フガ如シ、若シ組合員ニシテ之ニ依ラズシテ雇傭ノ約束ヲナセル者アルトキハ直チニ除名ノ處分ヲナスモノトス、職工組合ガ勞働條件ニ關スル準則ヲ定ムルコトハ勞働者ヲシテ資本家ニ對シ共同ノ勢力ニ依ツテ勞働條件ヲ改良セシムルノ手段ニシテ各個ノ勞働者ガ單獨ニテハ到底其目的ヲ達スル能ハザル場合ニ於テモ此方法ニ依レバ容易ニ其効ヲ奏スルコトヲ得ベシ、去レバ資本家ニ在ツテモ此準則ハ之ヲ輕々ニ看過セズト雖モ時ニ或ハ之ヲ背ンセズ、之ガ爲メニ同盟罷工ノ口實ヲ與フルコト屢々之アリ

同盟罷工ハ職工組合ノ爲メニ最モ有力ナル武器ニシテ而モ最後ノ非常

手段ナリ。一派ノ職工組合ハ頻リニ同盟罷工ヲナシ由ツテ以テ階級軋轢ノ弊風ヲ馴致スルモノナキニ非ラズト雖モ、多數ノ職工組合ハ成ルベク平和ノ手段ニ訴ヘ協議ノ方法ニ依ツテ其目的ヲ達スルコトヲ務メ只已ムヲ得ザル場合ニ於テノミ同盟罷工ヲナセリ。而シテ之ヲナスニ當リテ最モ慎重ノ態度ヲ執レリ。若シ組合員ニシテ同盟罷工ヲナスノ議ヲ立ツル者アルトキハ役員ハ豫メ其理由ノ正當ナルヤ否ヤ、其必要已ム可ラザルヤ否ヤ、其財力ノ充分ナルヤ否ヤ、其時期ノ宜シキヲ得ルヤ否ヤ等各種ノ事情ヲ審査シタル後之ヲ總會ノ議ニ附シ組合員ノ賛同ヲ得テ之ニ著手スルナリ、而シテ其前ニ工場主ニ交渉シ協議ノ手段ヲ盡クシ已ムヲ得ザルニ及ンデ始メテ罷工ヲナスコト、セリ。罷工中ハ之ニ與シタル組合員ニ定期ノ罷工手當金ヲ支給セリ。此罷工手當金ハ同盟罷工基金ト稱シ年々一定ノ率ニ依リ積立タル組合ノ基金ヨリ之ヲ支出スルモノトス。若夫レ罷工ノ期間久シキニ涉リ此基金ノミニテハ不充分ナルトキハ臨時

ニ罷工ニ與セザル組合員ヨリ出金ヲナサシムルコトアリ、尙ホ不足アルトキハ他ノ職工組合ヨリ補助金ヲ出サシムルカ或ハ同盟罷工ノ理由頗末ヲ世間ニ公示シ公衆ノ義捐ヲ仰グコトモ屢々之アリト云フ

職工組合ノ組織及ビ活動ハ右述ブル所ノ如シ、勞働者ガ之ニ依ツテ勞働條件ニ關シテ資本案ニ對抗シ得ルコト假令ヒ商品ノ賣買ノ如クナル能ハザルモ幾分力之ニ近ヅクコト、ナルベシ。若シ夫レ職工組合ノ發達スルニ從ヒ活動ノ範圍ハ漸次擴張セラル、ニ及バ、勞働者ヲシテ資本案ト對等ノ地位ニ立タシムルコト敢テ難キニ非ルベシ。英國職工組合ノ現狀ニ徴スルトキハ此事ノ空望ニ非ルヲ知ルニ足ラン

從來學者及ビ實務家ノ間ニ職工組合ニ對シテ、反對ノ意見ヲ抱ケルモノ少シトセズ。夫ノ賃銀基金說ヲ奉ズル者ノ如キハ賃銀ノ増加ハ賃銀基金ノ増加ニ依ルカ然ラザレバ勞働者ノ減少ニ依ラザル可ラザルコトヲ前提トナスガ故ニ職工組合ハ賃銀増加ノ目的ヲ達スルニ於テ尠モ其力ナ

職工組合  
ニ關スル  
見

キコトヲ主張セリ、抑モ賃銀基金説ハ其前提ニ於テ既ニ一大謬見ニ陥レルコト會ツテ述ブル所ノ如シ、從ツテ此論據ニ據ツテ職工組合ヲ非議スルモ批評ノ價值ナシト云ハザル可ラズ、或ハ職工組合ヲ以テ労働者ト資本家トノ階級軋轢ヲ馴致スルノ原因トナシ、往々之ヲ以テ同盟罷工ノ機關トノミ認ムル者アリ、然レドモ職工組合ノ性質ハ決シテ然ルモノニ非ラズ、同業組合ノ起原ハ労働者ト資本家トガ對等ノ地位ニ在ツテ賣買ノ關係ヲ以テ労働條件ヲ定ムルニ在ルコトハ先キニ述ブル所ノ如シ之ガ爲メニ階級軋轢ヲ盛ナラシムルノ理由ハ毫モ之ナキナリ、只歐洲各國ニ於テ職工組合ニシテ固有ノ目的ヲ失ヒ徒ラニ社會黨ノ機關タルモノ少シトセズ、彼等ハ社會黨ノ煽動ノ爲メニ頻リニ不法ノ要求ヲナシ、資本家ヲ困マシメ又正當ノ理由ナクシテ妄リニ同盟罷工ヲ企ツルコトアリ、願フニ此種ノ職工組合ハ其組織ヤ其活動ヤ之ヲ職工組合ト云ハンヨリハ寧ロ社會黨ノ分派トモ云フベキモノナリ、之ヲ以テ一般ノ職工組合ヲ排斥

セントスルハ背理ノコトタルヲ免レズ、且ツ夫レ同盟罷工ナルモノハ實行ノ意志及ビ方法ニ依ツテハ危險ノ行動タルコト固ヨリ言フ俟タザル所ナルモ、同盟罷工ノ本來ノ性質タル一種ノ商畧ニ過ギズ、商品ノ賣買ニ於テ其價格ニシテ賣手ノ意ニ滿タザルトキハ賣手ハ之ヲ賣ルコトヲ肯ンゼザルガ如ク労働條件ニシテ労働者ノ満足スル所ニ非ルトキハ労働者ハ其労働ヲ停止スル何ノ怪ム所カ之アラン、職工組合ガ最後ノ手段トシテ同盟罷工ヲナスハ即チ此意義ニ外ナラズ、之ヲ以テ階級軋轢ノ原因ナリ、社會平和ノ亂階ナリト云フハ不當ニ非ラザルカ余ノ見ル所ニ依レバ職工組合ハ労働者ト資本家トノ軋轢ヲ調和スルノ一機關タリ、若夫レ職工組合ノ組織未ダ發達セザル處ニ在ツテハ労働者ノ意志ニ統一ナク其行動ニ規律ナキヲ以テ、一時ノ感情ニ動カサレテ永遠ノ利害ヲ顧ミズ、輕舉妄動徒ラニ資本家ニ反抗スルコトアルヲ免レズ、然ルニ職工組合ノ發達セル處ニ在ツテハ此種ノ事實ニ就キ多年ノ經驗ヲ有セル者労働者ヲ統

御シ以テ資本家ニ對スルガ故ニ、讓歩スベキハ之ヲ讓歩シ主張スベキハ之ヲ主張シ組合ノ運動ハ機宜ニ適シ情勢ニ戻ラズ、資本家ト談笑ノ間穩カニ事局ヲ終了スルコト敢テ難キニ非ラズ一八九二年十九世紀雜誌ニ於テ「チャンパーレーン」ハ職工組合ノ利益ヲ説明シテ曰ク、我國ニ於テ職工組合ノ發達セシヨリ以來勞働者ガ無謀悖理ノ行動ヲナセシコトハ其例甚タ少ナシ、職工組合ガ次第ニ經驗ヲ積ムニ從ヒ資本家ニ對シ不當ノ要求ヲナスコトナク、若シ此組合微ツセバ同盟罷工ハ免ル可ラザル場合ニ於テモ調停宜シキヲ得平和ニ事ヲ了スルコトヲ得ルニ至レリト、由是觀之レバ職工組合ハ當ニ階級軋轢ノ原因タラザルノミナラズ却ツテ階級ノ平和ヲ維持スルノ力ヲ有セルモノト云ハザル可ラズ

各國職工組合ノ沿革

英國ニ於ケル職工組合ノ萌芽ハ十八世紀ノ末葉ニ發生シ十九世紀ノ初

期ニ及ンデ其數漸次ニ増加セリ、製本業者、活版業者、鋸物業者等ノ組織セル組合ノ如キハ其主タルモノナリ、當時英國ニ於テハ嚴密ナル結社法ノ存在セルアリ、此法律ヤ從來手工業ノ徒弟ヲ團結シテ其師匠ニ對抗スルヲ禁止スルガ爲メニ制定セラレタルモノナルニ關ラズ工業革新ノ時代ニ至ツテハ更ラニ工場勞働者ニ適用セラレ、勞働者ガ組合ヲ組織セル爲メニ刑辟ニ罹リタル者少シトセズ是ヲ以テ當時ノ職工組合ハ秘密ノ結社トナスカ或ハ共濟組合、職工俱樂部ノ名稱ヲ冠セシムルヲ常トス、一八二四年結社法廢止セラレ、勞働者ニ對シ結社ノ自由始メテ公認セラレタルヨリ以來職工組合ノ組織ハ各種ノ工業ニ相踵デ起レリ、現今英國職工組合ノ模範タル器械職工組合ノ如キハ此時ニ創立セラレタルモノトス、此時代ノ職工組合ノ組織ハ甚ダ不完全ニシテ、其活動動モスレバ詭激ニ尖シ徒ラニ同盟罷工ヲ起シ以テ資本家ヲ迫害スルコトヲ務メ秩序ノ平和的ニ勞働者ノ利益ヲ圖ルコト少ナカリキ是レ當時社會主義ハ勞働者

ノ間ニ瀰漫シ此主義ヲ執レル職工組合多カリシガ爲メナリ然ルニ五十年代ニ至ツテ社會主義ハ殆ンド其跡ヲ歛メシカバ職工組合ハ始メテ此主義ノ係累ヲ脱スルコトヲ得純然タル經濟上ノ運動トナリ勞働保險、勞働紹介等各種ノ有益ナル事業ハ著々其緒ニ着ケリ而シテ資本家ニ對スル態度モ次第ニ變化シ成ルベク仲裁調停ノ方法ニ依ツテ爭議ヲ終了シ已ムヲ得ザル場合ニ非レバ同盟罷工ヲナサズ而シテ同盟罷工ヲナスニ際シテモ舊時ノ如クニ暴力ヲ用キ脅迫ヲ事トスルコトナク一定ノ期間罷工ヲナシ由ツテ以テ自然ニ資本家ヲ屈伏セシムルコトヲ務メタリ夫ノ同盟罷工ハ一種ノ商畧ナリトノ思想ハ實ニ此時ニ起リタルヲ見ル次イテ一八七一年政府ハ職工組合法ヲ制定シ職工組合ニ與フルニ法人ノ資格ヲ以テシ資本家ノ間ニ組織セラレタル同業組合ト同一ノ特典ヲ與ヘタリ此法律ノ發布以前勞働者ハ只結社ノ自由ヲ得タルモ組合ニ關スル政府ノ保護監督ノ方法未ダ立タズ組合ノ管理者ニシテ組合ノ財務ニ

就キテ私ヲ爲ス者アルモ法律上救済ノ途ナカリシナリ然ルニ此法律ノ爲メニ組合ハ法人ノ資格ヲ得ルコト、ナリ此種ノ弊害ハ其跡ヲ絶ツコトヲ得タリ是ヨリ後職工組合ハ長足ノ進歩ヲナシ其勢力侮ル可ラサルニ至レリ而シテ資本家ハ勿論社會一般ニ職工組合ニ對スル感情ハ次第ニ變化シ從來之ヲ煽動ノ機關トシ衝突ノ原因トシテ嫌忌セシ者モ今ハ却ツテ勞働問題ヲ解釋スルニ必要ナル平和ノ方法トシテ之ヲ歡迎スルニ至レリ數十年前現今ノ皇帝ガ皇太子タリシ時職工組合ノ役員ヲ「サンリンドグハウス」ニ招キ謁見ヲ賜ハリシコトアリ現任勞働局長「バルネツト」氏ハ會ツテ機械工組合ノ書記長タリシ人ナリ一八九一年獨逸ニ於テ列國工場法會議ヲ起シタル時ニ英國政府ハ職工組合ノ役員ヲシテ自國ノ委員トシテ出席セシメタリ一八九八年「プリストル」市ニ於テ英國職工組合聯合會アリシ時ニ該市選出ノ國會議員ニシテ而モ屈指ノ富豪ナル「フライ」氏ハ該會ニ出席セシ人々ヲ招キ盛大ナル園遊會ヲ開キタリ是

等ノ事實ニ依ツテ英國職工組合ガ社會ニ歡迎セラレ、ノ狀ヲ知ルベシ、現今英國職工組合ハ二派ニ分レタリ、一ハ舊派組合ニシテ一ハ新派組合ナリ、舊派組合ハ多年ノ沿革ヲ經テ發達シタルモノナルモ、新派組合ハ最近十餘年間ニ起リタル勞働運動ニシテ夫ノ「ベンチレット」ガ創設シタル造船職工組合「トムマン」「バーンス」等ノ經營セシ鐵道職工組合、瓦斯職工組合、水夫組合ノ如キ其ノ最タルモノナリ

舊派組合ト新派組合トノ間ニハ勞働問題ニ關スル主義ニ於テ一大鴻溝ノ存セルアリ、何ツヤ、舊派組合ハ社會改良主義ニ依リテ平和ナル手段ヲ以テ自己ノ地位ヲ改良セント欲スルモ、新派組合ハ社會主義ニ依リテ過激ナル運動ヲナスモノタリ、願フニ舊派組合ニ在ツテハ組合ノ勢力ヲ藉リ勞働條件ヲ改良スルヲ以テ理想トセルモ、新派組合ハ組合本來ノ事業ハ之ヲ輕視シ只之ヲ以テ社會主義宣布ノ機關ニ充ツルモノタリ、是ヲ以テ新派組合ハ舊派組合ノ如クニ勞働保險ノ如キ勞働紹介ノ如キ健全ニ

シテ秩序アル事業ヲ經營スルコトナク、又勞働條件ニ關シテモ頻リニ極端ナル要求ヲナシ安リニ同盟罷工ヲ企テ由ツテ以テ階級軋轢ノ念ヲ培養スルコトニ汲々タリ、抑モ新舊兩派ノ職工組合ガ其主義理想ヲ異ニセル所以ノモノハ組合ニ屬セル勞働者ノ種類ニ依レリ、舊派組合ニ屬セル者ハ特別ノ技能ヲ有セル所ノ勞働者、所謂高等勞働者ナルヲ以テ其思想ハ保守的ニ其行動モ秩序的ナリ、然ルニ新派組合ニ屬セル者ハ特ニ練習ヲ要スルコトナクシテ勞働ニ從事シ得ル者、所謂普通勞働者ナルヲ以テ其境遇ト云ヒ其性行ト云ヒ危險ナル運動ヲナスニ適セル者ナリ、「ベンチレット」「トムマン」「バーンス」等ノ社會主義ヲ宣布スルヤ當初ニハ舊派組合ヲ利用セントシタルモ終ニ其ノナス能ハザルヲ知り更ニ新派ノ組合ヲ組織シ以テ舊派ト對抗セントシタルモノ固ヨリ偶然ニ非ルヲ知ルベシ、今ヤ英國ニ於テ職工組合ニ屬セル勞働者ノ總數百三十萬人ナリ、其多數ハ舊派組合ニ屬シ新派組合ニ屬セル者僅々二十萬人ニ過ギズ、二者勢力

ノ消長ハ日ヲ同ウシテ語ルベキニ非ルモ新派組合ガ勞働者ノ間ニ社會主義ヲ傳播セシムルノ力アルコトハ爭フ可ラズ近年職工組合聯合會ニ於テ社會主義ニ則リタル議案ガ屢々通過スルコトアルヲ見バ亦以テ新派組合ノ勢力侮リ難キモノアルヲ見ン

茲ニ勞働局年報ニ依リ職工組合ノ近況ヲ示サンニ

組合數	組合員數
一八九二年	一、二一八
一八九三年	一、二六九
一八九四年	一、三一一
一八九五年	一、三二九
一八九六年	一、三四一
一八九七年	一、三三九
一八九八年	一、三一〇
一八九九年	一、二九二
組合數	組合員數
一、二一八	一、五〇三、二三二
一、二六九	一、四八〇、二七〇
一、三一一	一、四三九、三〇四
一、三二九	一、四〇九、一五〇
一、三四一	一、四九六、七六〇
一、三三九	一、六一四、九九三
一、三一〇	一、六四九、二三一
一、二九二	一、八〇二、五一八

又該表ニ依リ重ナル組合百ニ就キ組合員數及ビ財務統計ヲ掲ゲンニ

組合員數	收入額	支出額	年度末資金額
一八九二年	九〇五、一一六	一、四七七、三二五	一、四三六、〇九五
一八九三年	九〇九、五三六	一、六二四、六三一	一、三八一、八一三
一八九四年	九二四、一六三	一、六三四、九二〇	一、五七九、二二九
一八九五年	九一五、〇六三	一、五六〇、〇六三	一、七四七、七四〇
一八九六年	九六二、一三八	一、六七五、五六九	一、二三五、三八六
一八九七年	一、〇六四、四九三	一、九八一、九八六	二、二七二、二七三
一八九八年	一、〇四三、一八三	一、九一七、二六九	二、六九八、四二二
一八九九年	一、一七四、六六五	二、八六四、〇〇六	三、二八二、九二二

佛國ニ於ケル職工組合ハ其發達英國ニ及バザルコト遠シ願フニ職工組合ハ結社ノ自由ト相伴フニ非レバ其發達ヲ期ス可ラズ然ルニ佛國政府ガ勞働者ニ對シテ此自由ヲ與ヘタルハ「ナボレヲン」三世ノ時代ニテアリキ、且夫レ佛國人ハ之ヲ概言スレバ各個獨立ノ氣象ニ富ミ合同ノ運動ヲ

ナズニ適セズ事ニ當ツテモ冷熱殊ニ甚シク堅忍不拔ノ志操ニ乏シ、労働者ニ在ツテモ此性行ハ易フ可ラザルモノアリ、夫ノ英國労働者ノ如ク秩序アリ且ツ冷靜ナル團體的運動ヲナスコトハ到底之ヲ望ム可ラズ、佛國ニ於テ職工組合ノ發達緩慢ナル所以ハ主トシテ是等ノ事情ニ由ラズンバアラズ、加之ナラズ佛國ノ労働者ハ社會主義ノ犯ス所トナリタル者多ク資本家ヲ視ルコト仇敵ノ如ク同盟罷工ヲ以テ一種ノ商略ト認メズ却ツテ階級軋轢ノ手段トナセリ。去レバ職工組合ノ多クハ社會黨ノ分派タリ、而シテ社會改良主義ヲ標榜セルモノハ労働者ノ同情ヲ得ルコト甚ク難シト云フ。是レ佛國職工組合ガ英國ニ於ケルモノト大ニ其趣ヲ異ニセル所ナリ。

佛國職工組合ノ沿革ヲ按ズルニ十九世紀ノ六十年代ニ其萌芽ヲ發セリ。先是革命時代ニ制定セラレタル「シヤブリエ」法ナルモノアリテ労働者ノ結社ハ其ノ主義目的ノ何タルヲ問ハズ凡テ禁止セラレタリキ、然ルニ「ナ

ボレヨン」三世ノ帝位ニ即クヤ意ヲ社會改良ニ留メ種々ノ畫策ヲ立テ殊ニ職工組合ガ労働問題ノ解釋ニ必要ナル機關ナルコトヲ認メ、一八六四年「シヤブリエ」法ヲ改正シ労働者ニ對シ結社ノ自由ヲ公認セリ。此法律ノ制定以後數多ノ職工組合ハ組織セラレタリ、而シテ是等ノ團體ハ其組織ヤ活動ヤ悉ク模範ヲ英國ニ採リ平穩ナル手段ニ依リ資本家ニ對抗スルヲ以テ主眼トナセリ。「マークス」ノ列國社會黨ノ起ルヤ労働者ノ多數ハ之ニ左袒シ職工組合ハ終ニ固有ノ性質ヲ失ヒテ社會黨ノ機關トナレリ。夫ノ六十年代ノ末期ニ當リ激烈ナル同盟罷工ノ各地ニ起リシハ全タク之ガ爲メナリキ。於是乎「ナボレオン」三世ハ職工組合ニ對スル方針ヲ一變シ之ガ鎮壓ニ全力ヲ委スルニ至リ職工組合ノ發達ニ一頓挫ヲ來タセリ。普佛戰爭以後數年間ハ職工組合ノ形勢甚ク振ハザリシガ一八七五年「フヒラデルフヒヤ」世界大博覽會ニ於ケル列國労働會議ノ影響ノ爲メニ其衰運ヲ挽回シ新タニ組織セラレタル組合ノ數ハ歲々其多キヲ加ヘタリ。



八八四年政府ハ勞働者ノ結社ニ關スル法律ヲ制定シ職工組合ニ法人ノ資格ヲ與フルコトヲ許セシヨリ職工組合ノ發達ハ大ニ見ルベキモノアリ。現今佛國職工組合ニハ社會主義ニ依ルモノト社會改良主義ニ依ルモノトノ二派アルコトハ猶ホ英國ニ於ケル新舊兩派ノ如ク職工組合聯合會ノ如キモ一八七九年以來二者分離シテ互ニ相爭ヘリ。前者ハ勞働協會 (Confédération générale du travail) ト稱シ後者ハ勞働紹介局協會 (Fédération des bougres du travail) ト稱セリ。而シテ此二派勢力ノ消長ヲ見ルニ職工組合總數ノ約三分ノ二ハ前者ニ屬シ三分ノ一ハ後者ニ屬セリ。

茲ニ佛國職工組合數及ビ組合員數ニ關スル累年比較ヲナサンニ

組合數	組合員數
一八八四年	六四
一八九一年	一、二二七
一八九四年	二、二七八
	未詳
	未詳

一八九六年	二、二五三	四二、二七七
一八九七年	二、三一六	四三、一七九
一八九八年	二、三二四	四三、七七九
一八九九年	二、六八五	四九、二六四

獨逸ニ於ケル職工組合ノ發達ハ英國ニ及バザルコト言フ俟タズ之ヲ佛國ニ比スレバ多少ノ進歩ヲ示セルヲ見ル。抑モ獨逸ニ於テハ職工組合ノ運動ニ關シテ理論ニ實際ニ之ヲ唱道誘掖シタル社會改良家少シトセズ。然ルニ勞働者ノ之ニ左袒スル者多カラズ今ニ至ルモ其効果見ルニ足ルモノ少ナシ終ニ職工組合ハ獨逸ノ國土ニ適セズト云フ者アルニ至レリ。是レ何ニ由ツテ然ルカ。願フニ獨逸勞働者ノ眼中ニハ萬能ノ政府アルノミ活動スル個人ナシ。勞働問題ノ解釋ニ就イテモ彼等ハ自ラ進ンデ團結ノ勢力ヲ籍ツテ資本家ニ當ルコトヲ好マズ。寧ロ政府ノ權力ニ訴ヘテ自己ノ利益ヲ保全セント欲スルモノ、如シ。是レ獨逸勞働者ガ英國勞働者

ト全ク其性情ヲ異ニセル所ニシテ、獨逸ニ於ケル職工組合ノ運動ガ甚靡振ハザル所以ノモノハ主トシテ之ニ由ラズンバアラズ、加之ナラズ職工組合ハ勞働保險ヲ以テ其事業ノ一ニ加フルニ非レバ健全ナル發達ヲナス能ハザルハ英國ノ實例ニ徵スルモ明瞭ナル事實ナリトス、然ルニ獨逸ニテハ七十年代以後勞働保險制實行セラレ勞働保險ノ事業ハ該法ニ依レル組合之ヲ營ムコト、ナリタルガ爲メ職工組合ハ英國ノ如クニ勞働保險ノ事業ヲ營ムコト困難トナレリ、夫ノ勞働保險法案ガ帝國議會ノ議ニ上ルヤ「ヒルシュ」氏ハ該法ガ職工組合ノ發達ヲ阻害スルノ憂アルコトヲ述ベテ之ニ反對シタルヲ見テ以テ之ヲ知ルニ足ルベシ、是等ノ事情ニ基キテ獨逸ニ於ケル職工組合ノ運動ハ其進歩ヤ甚ダ緩漫ナルヲ見ル

獨逸ニ於テ政府ガ勞働者ニ對シ結社ノ自由ヲ認メタルハ一八六七年普國改正工業法ヲ以テ嚆矢トス、帝國成立後該法ハ各聯邦ノ間ニ行ハレ勞働者ノ結社ノ自由ハ周テク帝國各地方ニ及ベリ、先是「ラッサル」「マークス」等ノ社會黨ハ職工組合ノ創立ニ盡力シ種々ノ名稱ノ下ニ之ヲ組織シタルモ概ネ失敗ヲ以テ了レリ、社會改良主義ノ徒モ亦職工組合ノ必要ヲ唱道セル者少シトセズ、「ブレリントナー」「ヒルシュ」氏ノ如キハ英國ニ趣キ職工組合ノ實狀ヲ調査シ之ヲ本國ニ移植センコトヲ企テタリ、然レドモ其結果見ルニ足ルモノナシ、普佛戰爭以後工業ハ長足ノ進歩ヲナシ勞働問題ノ形勢稍々危殆ナルニ及ンデ、職工組合ハ漸次各地ニ創立セラレ、此種ノ勞働運動ノ前途ハ次第ニ有望トナレリ、方今獨逸ノ職工組合ハ社會改良主義ニ依ルモノト社會主義ニ依ルモノトノ二派ニ分レタルコトハ英佛兩國ト其趣ヲ異ニセズ、社會改良主義ニ依ル組合ハ「ヒルシュ」派ヲ主トシ其他基督教的組合、新教的組合及ビ中立派組合ト稱スルモノ若干アリ、一八九九年ノ調査ニ依レバ是等組合員ノ總數ハ約二十万人ナリト云フ、社會主義ニ依ル職工組合ハ社會改良主義ニ依ルモノニ比スレバ其進歩

實ニ偉大ナルモノアリ抑モ此種ノ組合ハ悉ク社會黨ノ機關タルヲ以テ社會黨ガ黨勢ヲ擴張スルニ從ツテ其發達ヲ見ルニ至ルナリ近時獨逸ニ於ケル社會黨ノ勢力ハ滔々トシテ底止スル所ヲ知ラザルモノ、如シ職工組合ガ之ニ伴ツテ盛運ニ向フハ固ヨリ偶然ニ非ルナリ茲ニ此種ノ組合ニ屬セル組合員ノ總數ヲ按ズルニ一八九一年ニハ廿餘万ナリシガ一八九九年ニハ既ニ五十万ニ達セリ社會改良主義ノ組合ガ緩漫ナル發達ヲナセルニ比シ是ノ如キ正反對ノ事實ヲ示セルハ之ヲ以テ職工組合其物ノ發展ト云ハンヨリハ寧ロ社會黨ノ發展ト云ハサルヲ得ズ

一八九三年獨逸職工組合聯合會組織セラレ第一回總會ヲ「ハルバースタト」ニ開ケリ此聯合會ハ主トシテ社會主義ノ職工組合ヲ網羅シ社會改良主義ヲ執ル組合ノ多數ハ之ニ加ハラザリキ第二回總會ハ一八九六年伯林ニ開カレ第三回總會ハ一九〇二年「フランクフルト」ニ開カレタリ聯合會ノ發行セル統計ニ依リ其所屬組合ノ組合員總數ヲ見ルニ左ノ如シ

一八九八年

四九一、九五五

一八九九年

五八〇、四七三

一九〇〇年

六九〇、二八七

一九〇一年

六八六、八七〇

由是觀之レハ獨逸職工組合ハ近時稍々進歩ノ兆候ヲ示セルモノ、如シ現今政府ノ之ニ對スル態度ヲ見ルニ社會主義ニ依ルモノニ對シテ鎮壓ノ方針ヲ執ルハ固ヨリ當然ノコトナリト雖モ社會改良主義ニ依ルモノニ對シテモ之ヲ保護獎勵スルコトナク寧ロ之ヲ冷遇セリ夫ノ英佛二國ニ於ケルガ如ク職工組合ニ與フルニ法人ノ資格ヲ以テスルノ法律ハ未ダ制定セラレザルヲ見テ以テ之ヲ知ルベシ社會改良家ノ間頻リニ之ニ苦慮セル者多キハ亦宜ナリト云フベシ

近時職工組合國際協會ヲ設立スルノ議ハ社會改良家ノ間ニ行ハレ一九〇二年始メテ之ガ組織ヲ見ルニ至レリ此協會ハ本部ヲ伯林ニ置キ毎年

一回各國職工組合ノ代表者ヲ招集シテ組合ニ關スル諸般ノ事務ヲ協議スルコト、セリ。先ヅ各國ニ於ケル組合ノ狀況ヲ明ニスル爲メニ統計ヲ編製セリ一九〇四年該統計ハ英獨佛三國ノ語ヲ以テ公刊セラレタリキ、此協會ニハ露國ヲ除クノ外歐洲各國之ニ加ハラザルモノハ殆ンド之ナシ、歐洲以外ノ國ニテモ濠洲ハ已ニ加盟ノ申込ヲナセリト云フ  
該會ノ發表セル統計ニ依リ英佛獨以外ノ諸國ニ就キテ職工組合ノ組合員總數ヲ見ルニ左ノ如シ

和 國	三七、二二一
瑞 典	八九、七八八
瑞 典	一〇四、九九九
那 威	一六、二二七
奧 太 利	二〇五、六五一
匈 加 利	五三、一六九

セルビヤ	二、九三二
ブルガリヤ	一、六七二
瑞 士	四一、八六二
以 太 利	二六〇、一〇二
西 班 牙	五六、九〇〇

茲ニ我國職工組合ノ沿革ヲ按スルニ此種ノ組合ガ始メテ我社會的現象トシテ發生シタルハ最近ノ事實ニシテ主トシテ日清戰役後ニ於テ工業ハ著シク勃興シ勞働者ノ數大ニ増加シタル結果ナリトス、顧フニ此時期以前ニ於テ多少之ニ似タル組合アリ例ヘバ大工業組合、石工組合、左官職組合等ノ如シ、然レドモ是等ハ手工業者ノ組合ニシテ之ヲ以テ各國ニ在ル所ノ職工組合ト同一視スベキニ非ラズ、我國ニ於テ職工組合ノ學說ニ就テハ從來學者ニ依ツテ江湖ニ紹介セラレタルモノ少ナシトセズ、去レド之ヲ實行ノ征途ニ上ラシメタルハ高野房太郎、片山潜二氏ノ功ナリト

ス明治三十年ノ頃此二氏ハ頻リニ勞働演說會ヲ開ラキ勞働運動ノ必要ヲ唱道セシガ終ニ勞働組合期成同盟ヲ組織セリ之ニ加入セシ者ハ鐵工ヲ首トシ活版工之ニ次グ抑モ該會ノ目的トスル所ハ各種ノ勞働者ヲシテ特別ノ職工組合ヲ組織セシメ而シテ期成會ヲ以テ之ガ中樞タル聯合機關トナスニ在リキ該會ノ組織後若干モナクシテ鐵工組合ナル鐵工ノ團體成立セリ此組合員ノ總數ハ二千人以上ニ達シ一時盛運ニ向ヒシモ近時甚ダ萎靡不振ノ状態ニ在リ因ニ云フ期成同盟會ノ會員ノ多數ハ鐵工ナルヲ以テ此會ト鐵工組合トハ密着ノ關係ヲ有シ殆ント同心一體ノ觀ヲ呈シタリキ

鐵工組合ノ事業ヲ按スルニ勞働條件ノ改良ヲ圖ルヲ以テ主眼ノ目的トナシ附屬ノ業トシテ負傷疾病ニ對スル救濟ヲナセリ此救濟ヲナス爲メニ組合員ヲシテ其收入ノ如何ニ係ラズ毎月二十錢ノ出金ヲナサシメ負傷疾病ノ際ニ一日二十錢ノ割合ヲ以テ十日毎ニ救濟金ヲ與フルモノトス

此救濟ヲ受クルハ既ニ三ヶ月以上出金ヲナシタル者ニシテ負傷疾病ノ爲メニ三週間以上ノ休業ヲナシタル場合ニ限レリ救濟金ノ給與ハ一ヶ年間九十日以上ニ涉ルコトヲ得ズ又組合員ニシテ加入後六ヶ月ヲ經過シ且ツ會費ヲ全納シタル者ニ對シ類焼ノ際ニ五圓ノ見舞金ヲ與ヘ死亡ノ際ニハ二十圓ノ葬儀費ノ外組合員タリシ年數ニ應ジ拾圓乃至三十圓ノ扶助料ヲ遺族ニ與フルコト、セリ該組合ハ紛議仲裁ノ方法ヲ設ケ組合員ト工場主トノ間ニ起レル紛議ニ關シ組合ノ役員ヲシテ之ヲ仲裁セシムルコト、セリ

鐵工組合ニ次イデ起リタルモノヲ日鐵矯正會トナス該會ハ日本鐵道會社ノ瀛關手火夫ヲ以テ組織セラレタル職工組合ナリ先是三十一年該社ニ於ケル是等ノ職工ハ一大同盟罷工ヲ起シ一時世間ノ問題タリシガ事件終了ノ後彼等ハ痛ク組合ノ必要ヲ感ジ終ニ之ヲ組織スルコト、ナレリ本部ヲ仙臺ニ設ケ支部ヲ各地方ニ設ケ鐵工組合ト呼應シテ勞働運動

ニ從事セリ。該會ノ事業ハ特ニ見ルベキモノ少ナシト雖モ、其特色ヲ舉ゲンカ、組合員ノ得ル所ノ賃銀ニ就キ當初一年間ハ毎月日給ノ全部、二年目ヨリ毎月日給ノ半額ヲ徴收シ之ヲ郵便貯金トナスノ制ヲ設ケタリ而シテ此貯金ハ組合ノ財産トナサズ各自ノ名義ヲ以テ之ヲナセルモ之ヲ共同ノ事業ニ使用スルコト、セリ

活版工組合ハ三十二年十一月秀英合活版工ノ發起ニ依リ島田三郎氏ノ統率ノ下ニ成立セリ、余モ亦之ガ賛助員タリキ、高野房太郎氏ハ鐵工組合ニ於テ片山氏一派ガ漸次社會主義ニ傾キ職工組合ノ本來ノ目的ヲ失ヒ之ヲ以テ社會主義宣布ノ機關トナセルノ傾向アルヲ見テ驟然袂ヲ分ツテ活版工組合ノ賛助員トシテ盡力スルコト、ナレリ、該組合ノ特色ハ労働者ト資本家トノ調和ヲ圖ルニ在リ、而シテ其組織ハ歐洲ニ於ケル労働者資本家混合組合ニ則リタルモノトス、去レバ其規約ニ於テ活版印刷營業組合ト提携シテ相互ノ福利便益ヲ期スルコトヲ明言シ而シテ工場主

及ビ工場監督者ヲ以テ賛助員トナシ、必要ナル場合ニハ其保護ヲ受クルコトヲ敢テシタリキ、該組合ノ事業ハ労働條件ノ改良及ビ共濟制度ノ二種トナス、前者ノ事業ニ就テハ豫メ労働條件ニ關スル一定ノ準則ヲ定メ組合員ヲシテ之ニ依ツテ労働契約ヲ結バシムルモノトセリ、而シテ、此準則ヲ定ムルニ就テハ必ラズ先ヅ工場主ト協定スルヲ要ス、又組合員ト工場主トノ爭議ニ關シテ組合ハ仲裁調停ノ義務ヲ有セルモノトセリ、後者ノ事業ニ就テハ負傷疾病等ノ場合ニ相當ノ救濟ヲナスモノトシ、疾病負傷ノ際ニハ二十一日目ヨリ、一日十錢ノ割合ヲ以テ十日毎ニ救濟金ヲ與ヘ、災厄ノ際ニハ即日ヨリ同額ノ救濟ヲナス、火災水災等ノ場合ニハ三圓乃至五圓ノ救濟金ヲ與フ、又六ヶ月以上會費ヲ納メタルモノニシテ死亡セルトキハ葬儀費トシテ拾圓ヲ與フ、又組合員タリシ年數ニ應ジ五圓乃至二十圓ノ扶助料ヲ遺族ニ與フルモノトス、此趣旨ニ依リ組合成立シ毎月活版工組合報ヲ發行シ時々演說會ヲ開ク等其活動見ルベキモノアリ、

此組合ハ鐵工組合ガ社會主義ニ依レルニ反シ社會改良主義ヲ標榜シ世間ノ同情ヲ得タリシガ創立後若干モナクシテ職工證ノ問題ニ關シ組合ノ意見ハ工場主ト異ナリ雙方ノ間ニ感情ノ衝突ヲ來タシ、島田氏ノ熱心ヲ以テシテモ遂ニ之ヲ調停スルニ由ナク爲メニ該組合ハ解散ノ不幸ヲ見ルニ至レリ、其後該組合ノ一部ハ誠友會ナル團體ヲ組織セルモ形勢甚ダ振ハズト云フ

### 第十六章 工業裁判及ヒ工業調停

工業裁判及  
ヒ工業調停  
ノ性質

労働者ト資本家トノ間ニ於テ労働條件ニ就キテ起ルベキ争議ハ之ヲ分ツテ二種トナス。一ハ既ニ契約セル労働條件ノ履行ニ關スルモノニシテ、一ハ新タニ雇傭契約ヲ開始シ若シクハ之ヲ變更セントスルトキニ起ルモノトス。例ヘバ解雇ノ條件トシテ一定ノ豫告期間ヲ約束セルニ關ラズ資本家ガ臨時解雇ヲナシタル場合、或ハ労働者ガ工場ノ器具、器械ヲ破損シタルトキハ相當ノ損害賠償ヲナスベキコトヲ約束シタルモ事實發生ノ際此約束ヲ履行セザル場合等ニ起リタル争議ハ第一種ニ屬シ、又有期ノ雇傭關係ニ於テ期間満了ノトキ更ラニ雇傭ヲ繼續セントスルニ當リ労働時間若シクハ賃銀額等ノ労働條件ニ關シ雙方ノ意志合致セザル場合、或ハ不定期ノ雇傭關係ニ於テ臨時ニ一方ヨリ労働條件ノ變更ヲ申出デタル場合等ニ起リタル争議ハ第二種ニ屬セリ、要之スルニ第一種争議ハ

既存ノ雇傭契約ニ關スルモノニシテ純然タル法律問題ニ屬シ民法ノ規定ニ依ツテ之ヲ解決スルコトヲ得ベキモ、第二種爭議ハ將來ノ雇傭契約ニ關スルモノニシテ其間毫モ法律關係ヲ含ムコトナク、只雙方ノ利害ヲ折衷參酌シテ仲裁ノ條件ヲ設ケ之ニ基キ雙方ヲシテ讓歩セシムルニ依ツテ解決セラレベキモノトス加之ナラズ第一種爭議ハ概ネ特定ノ勞働者ニ關スルモノナルモ第二種爭議ハ多數ノ勞働者ニ關スルヲ通例トセリ、フランケンスタインハ其著「勞働保護論」ニ於テ第一種爭議ヲ稱シテ權利爭議ト云ヒ、第二種爭議ヲ稱シテ權力爭議ト云ヘリ

第一種ノ爭議ヲ審判スル所ノ機關ヲ稱シテ工業裁判局ト云ヒ、第二種ノ爭議ヲ解決スル所ノ機關ヲ工業調停局ト云フ、是レ歐洲各國ノ社會政策ニ於ケル一般ノ事實ナリトス

第一種ノ爭議ハ先キニ述ブルガ如ク其性質ヤ普通裁判事務ト異ナルコトナク普通裁判所ニ於テ之ヲ審理スルヲ以テ當然トナスハ固ヨリ疑ヲ

工業裁判局  
ノ組織

容レズ然レドモ歐洲各國ニ於テ之ヲ普通裁判事情ヨリ分離シ工業裁判局ナルモノヲ設ケ特別ノ手續ニ依ツテ之ヲ審理セシムル所以ノモノハ他ナシ、元來勞働ニ關スル爭議ハ一般ノ民事訴訟ニ比スレバ成ルベク迅速ニ決定スルノ必要アリ又其手續ヲ簡易ニシテ訴訟費用ヲ少ナクスルヲ可トス、若シ然ラザランカ資本家ハ之ヲ顧慮スルコトナキモ勞働者ハ自然ニ訴訟ヲ忌避シ權利ヲ拋棄シ只管ラ資本家ニ屈伏スルニ至ルノ憂アルベシ、加之ナラズ此種ノ爭議ヲ審判セント欲セバ多少一般工業ノ狀況ヲ明ニシ勞働者資本家ノ關係ニ就キ相當ノ知識ヲ有セザル可ラズ、是レ普通裁判官ニ對シテハ得テ望ム可ラザルノコトタリ、是等ノ理由ニ基キ工業裁判局ナル特別ノ裁判機關ハ起レリ

歐洲ニ於ケル工業裁判局ノ嚆矢ハ一八〇六年佛國ニ創立セラレタル工業裁判局(Conseils de prud'hommes)ニ在リ、此制度ハ先ヅ里昂市ニ起リ漸次其他ノ工業都市ニ行ハレ一八八六年ニハ其總數ハ一三六ノ多キニ及ベリ、



獨逸ニテハ一八九〇年工業裁判法ノ制定アリ、該法ニ依ツテ創立セラレタル工業裁判局ノ數ハ一八九六年ノ調査ニ依レバ二七五ナリ、之ヲ細別スレバ

人口十萬以上ノ都市ニ在ルモノ 三六

人口二萬乃至十萬ノ都市ニ在ルモノ 一〇四

人口二萬以下ノ都市ニ在ルモノ 一三五

其他諸國ニ就キテハ、奧太利ハ一八六五年ニ、白耳義ハ一八五九年、以太利ハ一八九三年ニ此制度ヲ設ケタリ

工業裁判局ノ組織ハ各國ノ多少旨趣ヲ異ニセルモノアルモ大體ニ於テ同一ナリ、今佛獨兩國ノ法律ニ依リ其要旨ヲ説明セン、工業裁判局ハ任意設立ノ機關トシ強制設立ノ主義ニ依ルコトナシ、即チ市村自治團體ノ發意ニ依リ政府ノ認可ヲ受ケテ之ヲ設立スルヲ以テ通則トス、蓋シ工業裁判局ノ制度タル工業地ニ於テノミ其必要ヲ見ルモノ

ナリ然レドモ或ハ工業地ニシテ工業發達ノ程度及ビ其狀態ニ依リテ之ヲ設クルヲ要セザル所アルガ故ニ各地方ノ自治團體ヲシテ必要ニ應ジ漸次之ヲ設立セシムルハ適當ノ方法ナリト云フベシ

工業裁判局ハ自治體ノ地域ヲ標準トシテ設立セラレタリ、佛國ニテハ地域廣大ナル都市ニ就キ工業ノ種類ニ應ジテ之ヲ分割シ同一地域内ニ若干ノ工業裁判局ヲ設クルコトアリ

工業裁判局ハ審判員及ビ審判長ヲ以テ之ヲ組織ス、審判員ハ其地域内ノ勞働者及ビ資本案ヨリ單選無記名ノ選舉法ニ依リ各々其半數ヲ選舉若ルモノトス、審判長ハ佛國ニテハ審判員ノ互選ニ依リ而シテ正副審判長ヲ勞働者資本案ノ雙方ヨリ選出スルコト、セリ、獨逸ニテハ市村長シスクハ市村會ガ勞働者及ビ資本案ノ階級ニ屬セザル者ニ就キ之ヲ選定スルコト、セリ、願フニ工業裁判局ガ資本案勞働者ノ代表者ヲ以テ組織セラル、ハ他ノ裁判制度ニ於テ未ダ其比ヲ見ザル所ニシテ工業裁判局ノ

特色ハ實ニ茲ニ在リ。此組織ニ依リ工業ニ關スル爭議ハ始メテ正當ナル判決ヲ受クルコトヲ得ベシ。然リ而シテ此組織ニ依ルトキハ二階級トモ同數ノ代表者ヲ出ダスヲ以テ可否定同數ノ場合ニハ只審判長ノ意志ニヨリ之ヲ決スルノ外ナシ、而シテ多クノ場合ニ於テ雙方ノ代表者ハ各々其ノ代表セル階級ノ利益ヲ主張スルヲ以テ審判長ハ之ガ判決ニ就キ常ニ中心トナルハ亦自然ノ勢ナリ。去レバ審判長ハ雙方ノ利害ヲ斟酌シ公平ナル判斷ヲナスノ資格ヲ有スル者タラザル可ラズ、而シテ如何ニセバ適當ナル審判長ヲ得ベキヤハ各國當局者ノ苦心スル所ナリト云フ。

工業裁判局ノ判決ハ強制力ヲ有セルコト普通裁判所ノ判決ト其趣ヲ異ニセズ、而シテ特定ノ場合ヲ除キテハ凡テ上訴ヲ許サザルナリ。上訴ヲ許ス場合ニハ之ヲ普通裁判所ニ提起スルコト、ナセルハ各國ノ恒例ナリトス。

工業調停局  
ノ組織

第二種爭議ハ第一種爭議ニ比スレバ勞働問題上主要ナル關係ヲ有セル

モノトス。願フニ勞働者ガ資本家ニ對抗スル最終ノ武器タル同盟罷工及ビ資本家ガ勞働者ヲ壓服スル有力ナル手段タル同盟解雇ノ如キハ第一種爭議ノ爲メニ起ル場合ハ甚ダ少ク多クハ第二種爭議ノ爲メニ起ルモノタリ。然ルニ此爭議ノ性質タル法律ノ適用ニ依ツテ解決サルベキニ非ラズ只勸誘的ニ雙方ノ利害ヲ調和セシムルニ依リ平和ノ局ヲ結ブコトヲ得ベシ。要之スルニ裁判ニ依ラズ調停ヲ以テ之ニ處セザル可ラズ。去レバ此種ノ爭議ヲ處分スルノ方法ハ近時學者及ビ實際家ノ間ニ一大疑問トナリ種々ノ方策ハ既ニ各國ニ行ハレタルモ其ノ歸スル所ハ勞働者ト資本家トノ代表者ヲ以テ組織セル工業調停局ヲ設ケ之ガ調停ノ任ニ當ラシムルニ外ナラズ。余ハ次ギニ歐洲ニ於ケル工業調停局ノ來歴及ビ現狀ヲ述ベント欲ス。

工業調停局ハ十九世紀ノ六十年代ニ始メテ英國ニ起レリ。「マンデラ」ハ一八六〇年「ノッテング」ハム市ニ於テ此組織ヲ設ケ、次テ「ケツタル」ハ一八六

五年「ウォルウエルハムプトン」市ニ之ヲ創立セリ此二氏ノ創意ニ係ル工業調停局ハ大體ニ於テ同一ノ主義ヲ執レリ即チ一地域ニ於ケル勞働者ト資本家ヲシテ同數ノ代表者ヲ選出セシメ之ヲ以テ調停局ヲ組織シ調停ノ事ニ當ラシムルコト是ナリ而シテ是等ノ代表者ハ勞働者ニ在ツテハ職工組合ノ役員資本家ニ在ツテハ同業組合ノ役員ヲ以テ之ニ充ツルコト、セリ然レドモ其細目ニ至ツテハ二者各々其趣ヲ異ニセルヲ見ル即チ審判長ヲ擇ブニ當リ「マンデラ」派ハ之ヲ審判員ノ互選ニ任セ「ケツテル」派ハ審判員ヲシテ雙方ニ利害關係ヲ有セザル第三者ヲ指名セシムルコト、セリ又調停ノ實行ヲ保障スル爲メニ「ケツテル」派ハ調停ヲ始ムル前ニ雙方ヲシテ若シ調停ノ結果ヲ實行セザルトキハ相當ノ制裁ヲ負擔スベキコトヲ契約セシムルモ「マンデラ」派ハ之ニ關シテ何等ノ方法ヲモ設クルコトナク調停ノ結果ガ實行サル、ヤ否ヤニ就キテハ只雙方ノ自由ニ放任セリ調停ノ手續ニ就テハ二派トモ二段ノ順序ヲ履ムコト、ナシ

先ヅ審判員ノ一部分ヲ以テ和解委員會(Board of conciliation)ヲ組織シ先ヅ第一回ノ和解手續ヲナサシメ而シテ此委員會ガ其目的ヲ達セザルトキハ之ヲ總會(Board of arbitration)ノ議ニ附シ更ニ調停ヲナサシムルナリ此二派ノ調停局ハ創立以來其成績見ルベキモノアリ勞働者モ資本家モ均シク之ヲ歡迎セリ政府モ亦之ニ左袒シ殊ニ調査委員會ヲ設ケ之ヲ普及セシムルノ方法ニ就キ調査ヲナセシガ之ガ結果トシテ一八七二年調停條例(Arbitration act)制定セラレタリ此條例ハ雇傭契約ニ於テ之ニ關スル爭議ハ凡テ之ヲ調停局ノ調停ニ附スベシトノ條項ヲ存シタル場合ニハ貸銀ニ關スル事項ニ就テハ必ラズ調停局ニ提出スベキコトヲ強制セリ願フニ此條例ノ制定ハ工業調停局ノ發達ニ至大ノ影響ヲ與ヘタルモノナルベシ茲ニ一九九九年英國勞働局年報ニ依リ最近六年間ニ於ケル英國工業調停局ノ數ヲ示サン

一八九四年

四五

一八九五年	四〇
一八九六年	五〇
一八九七年	四八
一八九八年	四九
一八九九年	五三

獨逸ニ於テハ工業調停局ハ一八九〇年工業裁判法ニ依ツテ工業裁判局ヲシテ之ヲ兼ネシメタリ。該法ニ依ルトキハ工業裁判局ノ審判員及ビ審判長ハ工業調停局ノ審判員及ビ審判長タルモノトセリ其組織選任ニ關シテハ先キニ述ベタルモノト同一ナルヲ以テ茲ニ之ヲ畧セン。只茲ニ一言スベキハ工業裁判局ノナシタル判決ハ其性質ヤ普通裁判所ノ判決ト異ナルコトナク強行ノ力ヲ有セルモ調停局ノ調停ハ此力ヲ缺キ調停ノ條件ニ從フト否トハ雙方ノ自由ニ在ルコト是ナリ

獨逸工業調停局ノ組織ニ就イテハ非議スベキ點少ナシトセズ。凡ソ工業

調停局ノ審判長タル者ハ工業ノ實際ニ通シ資本勞力ノ關係ヲ明ニシ雙方ノ信用ヲ得タル者ナルコトヲ以テ要件トナスナリ而シテ此事タル工業裁判局ノ場合ヨリモ更ニ一層ノ必要ヲ認ムルナリ。然ルニ獨逸ニテハ工業裁判局ノ審判長之ヲ兼ネ而シテ此審判長ハ自治機關ノ選定ニ係ルヲ以テ多クハ官吏ノ資格ヲ有セル者之ニ當リ、而シテ是等ノ人々ハ假令ヒ相當ノ學識アルモ概シテ此種ノ事情ニ通曉セズ、其ノ提出スル所ノ調停條件ハ雙方ヲ満足セシムル能ハザル場合多シ。且夫レ審判員タル者モ工業裁判局ノ審判員之ヲ兼ヌルコトハ先キニ述ブル所ノ如シ而シテ此審判員ハ各種ノ工業ヲ通ジテ選出サ、ルヲ以テ現ニ調停スベキ工業ニ關シテハ特ニ智識經驗ヲ有セザルコト屢々之アリ、例ヘバ紡績業ノ資本家若シクハ勞働者ニシテ建築業ニ關スル爭議ノ調停ヲナスガ如キコトナシトセズ。是ノ如クシテ圓滿ナル調停ノ實ヲ舉ゲントスルハ至難ノ事ト云フベシ。要之スルニ工業裁判ト工業調停トハ大ニ其性質ヲ異ニセル